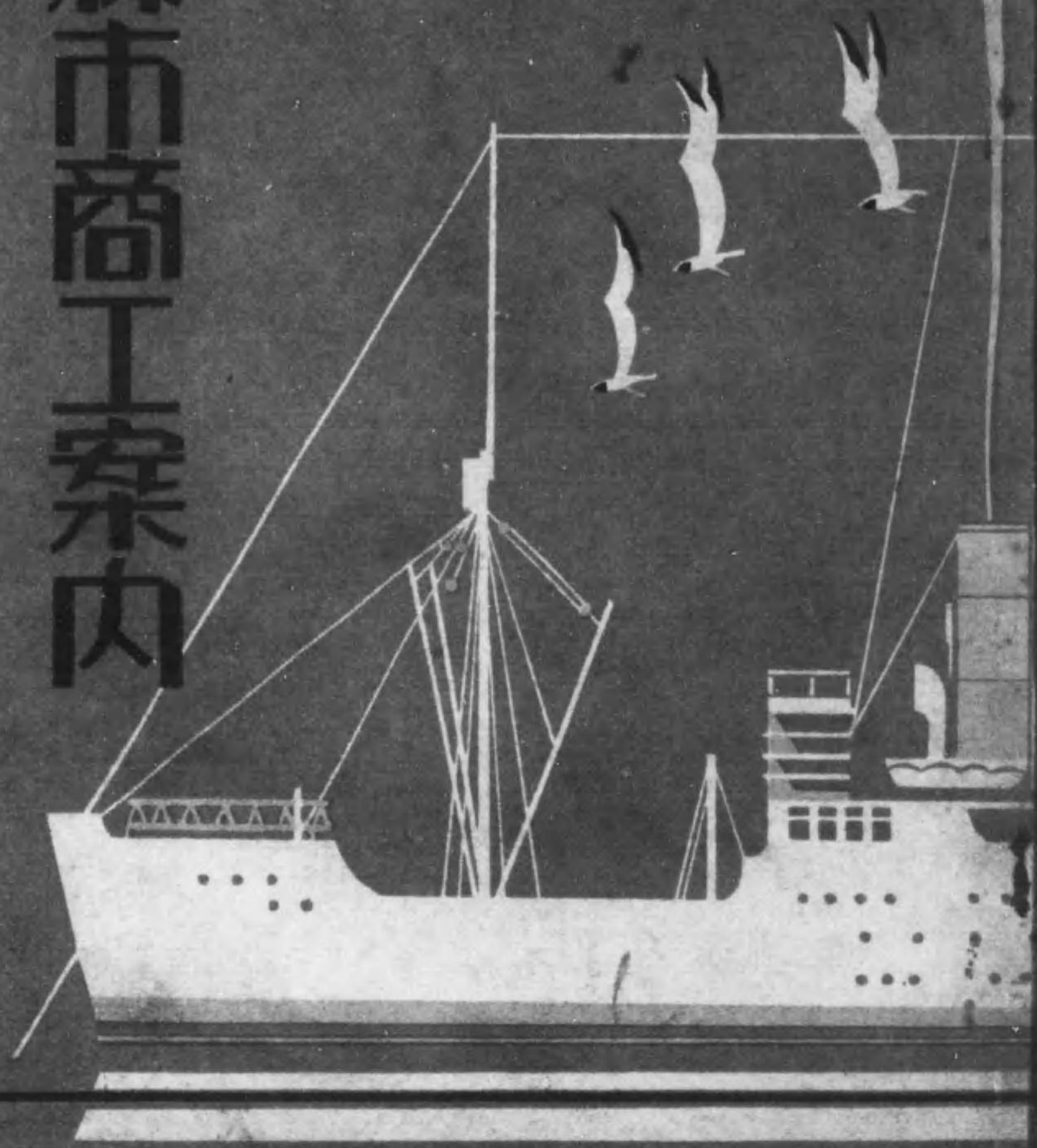


青木林市商工案内

355
640



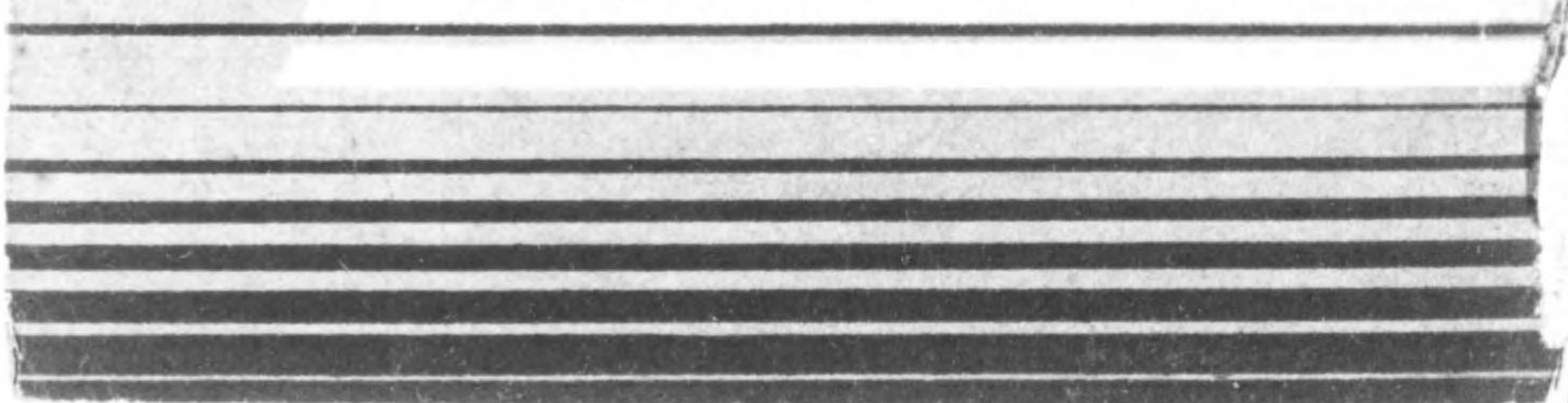
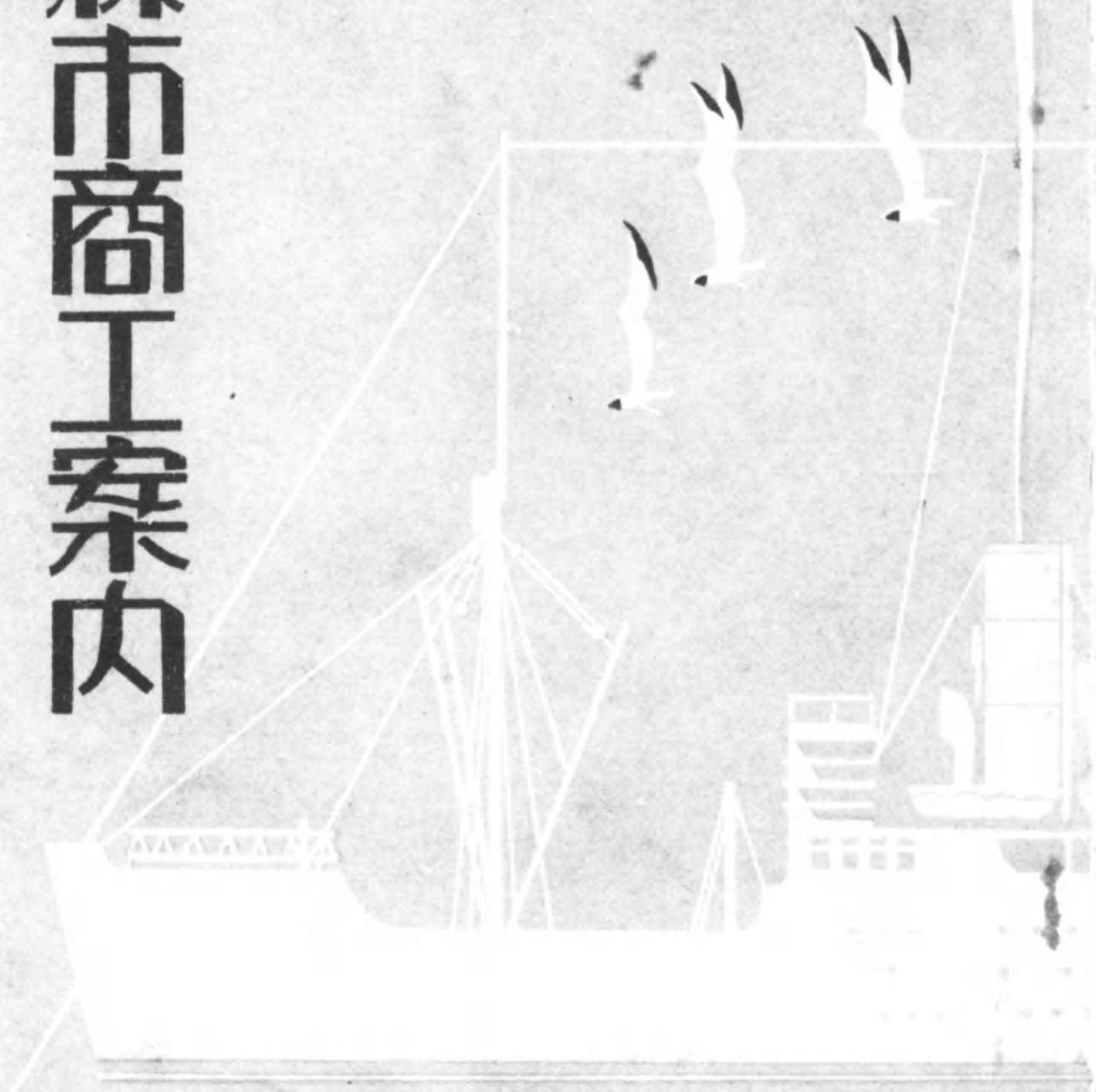
始



青森市商工業案内

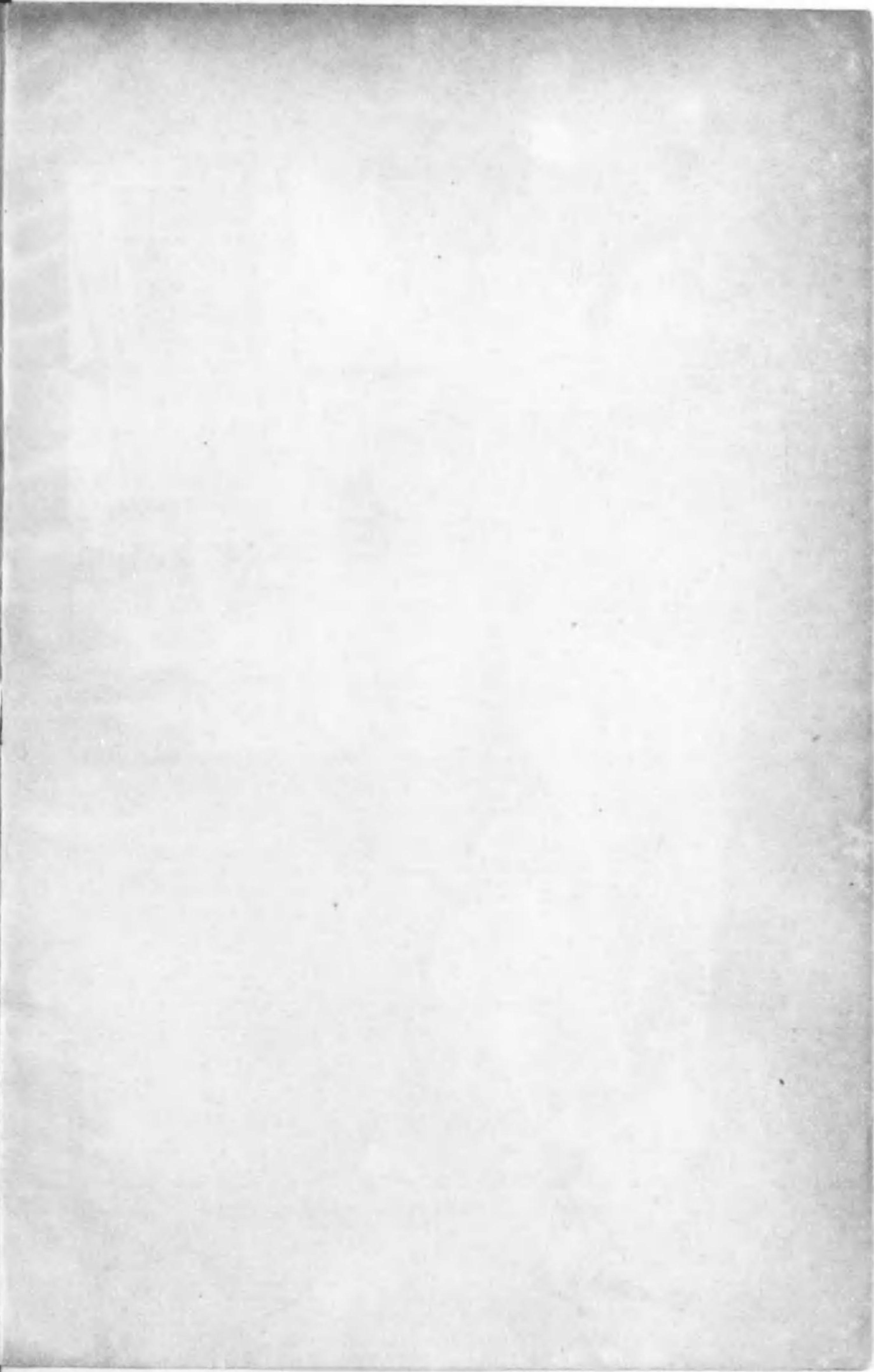
355

640

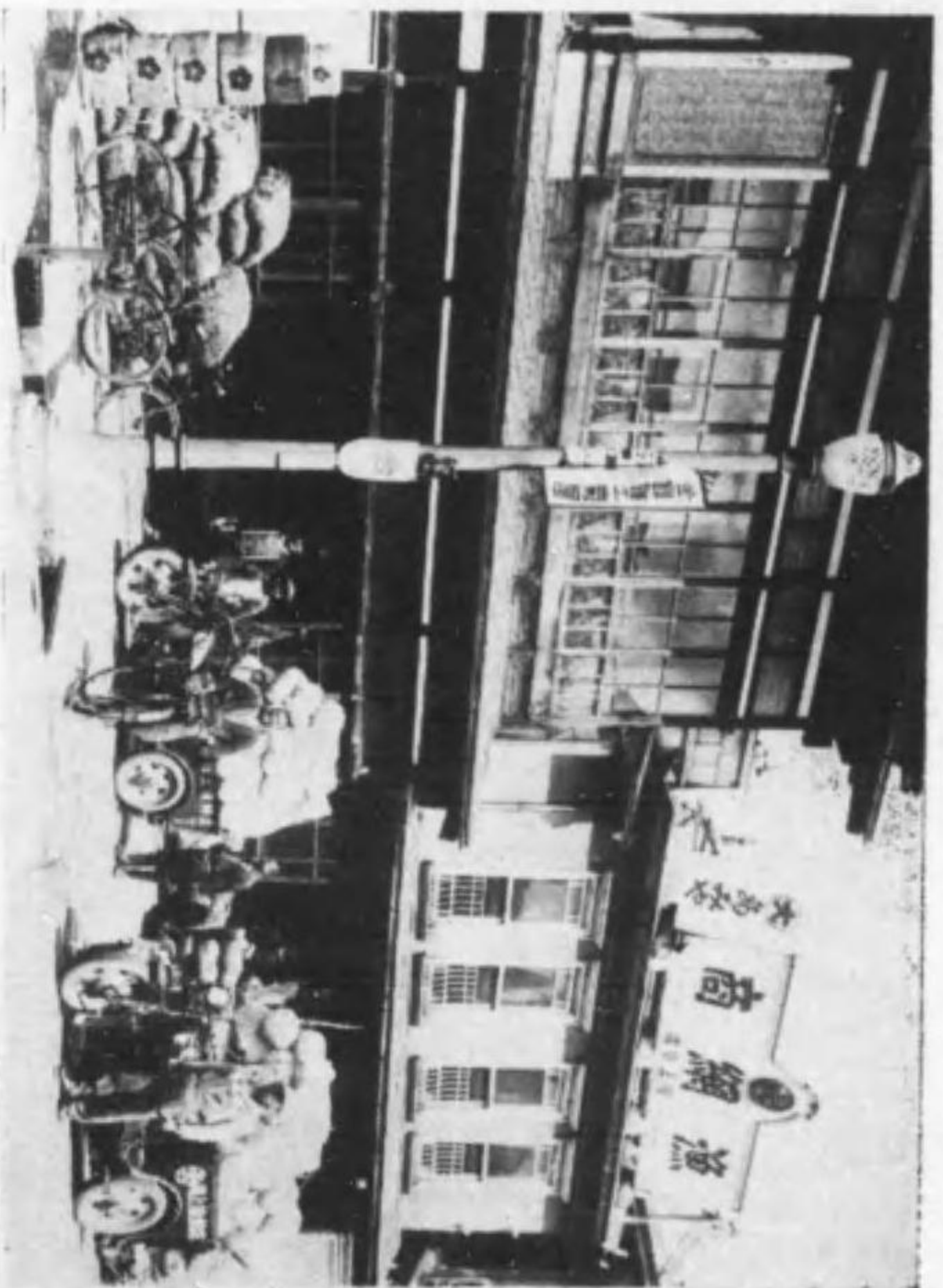


青森デパート 新品館全



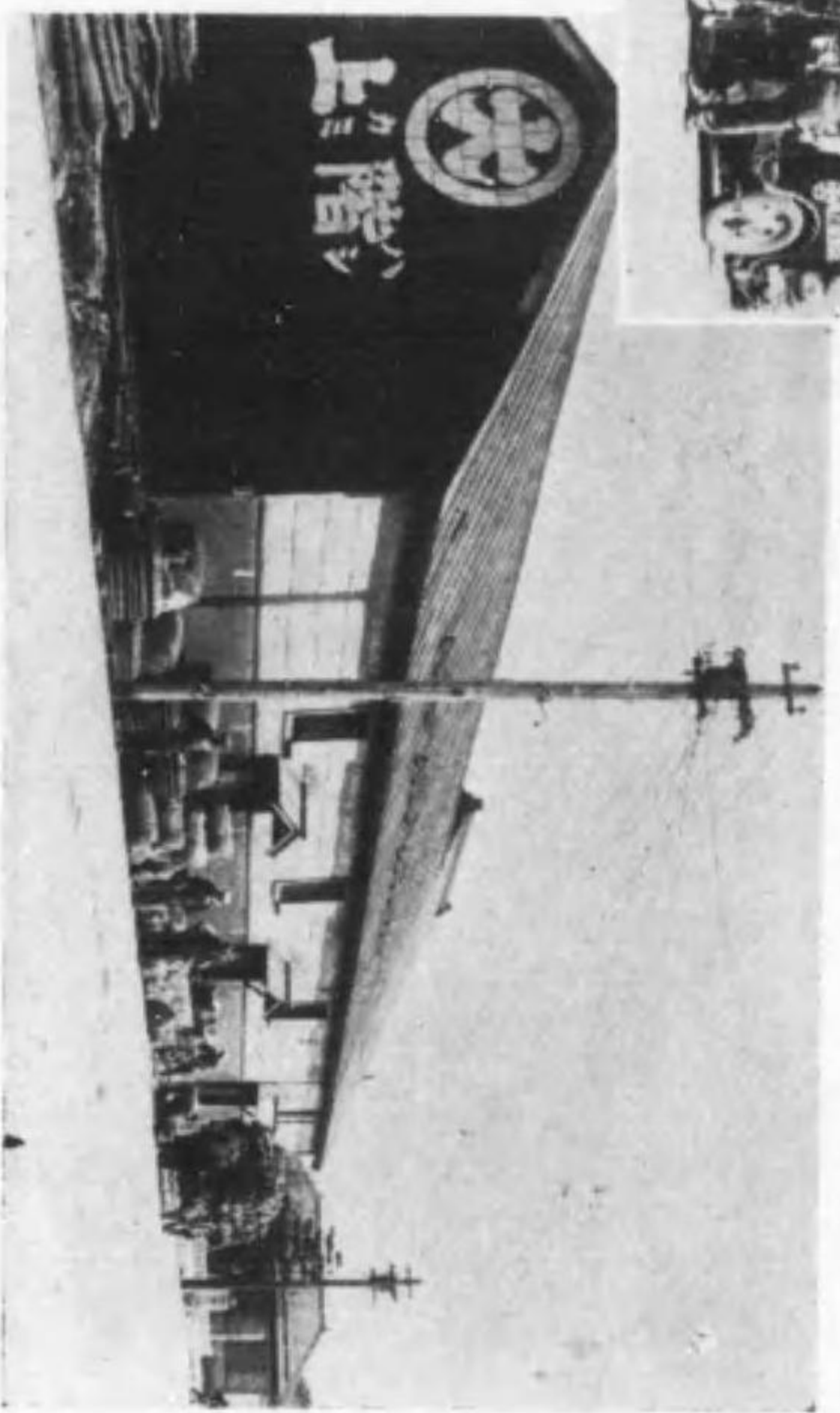


漁網漁具商

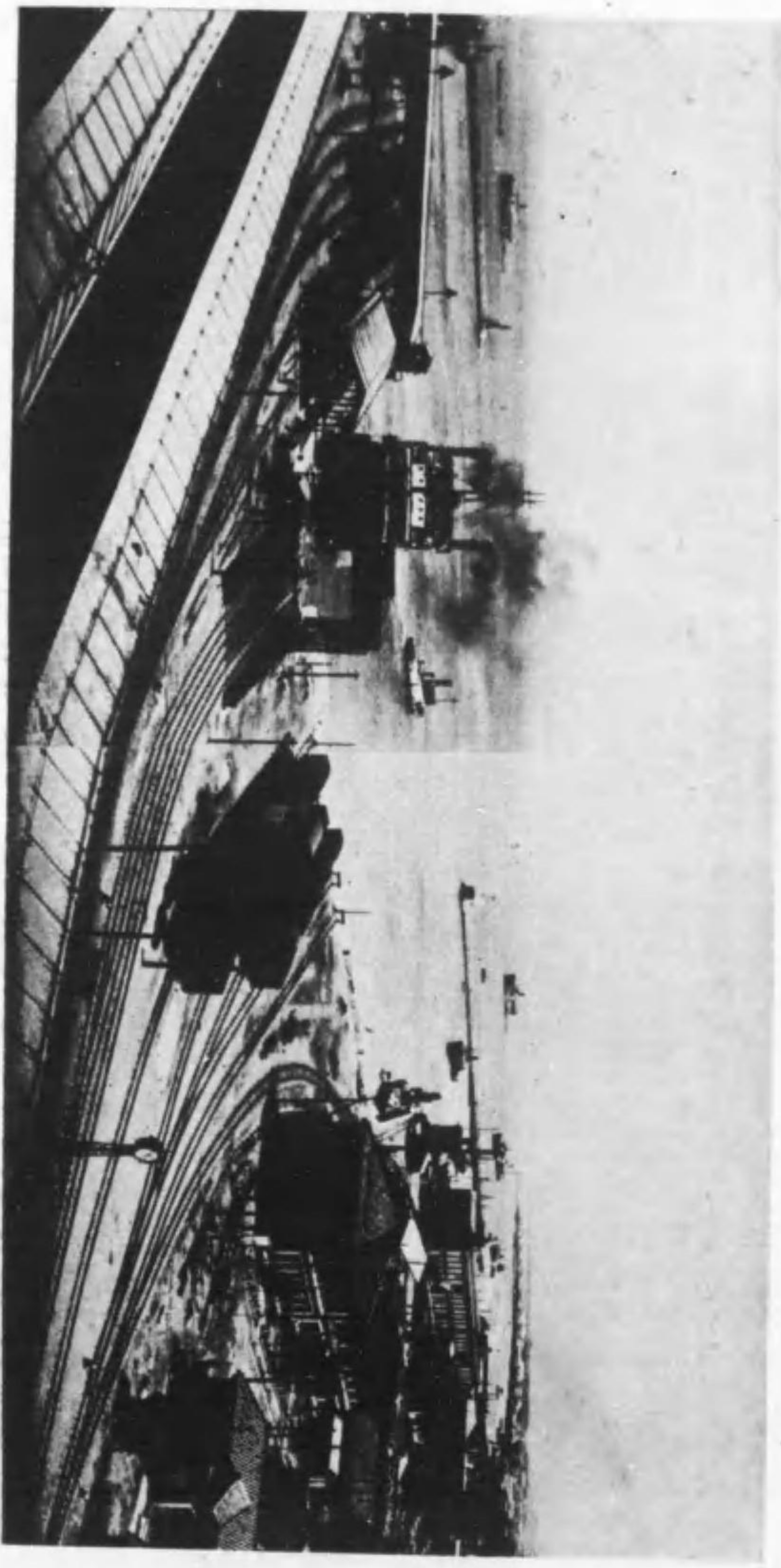


大 上 階
カミハシ

青森市大町二丁目
電話 八〇六番
替台六八五〇



景 全 港 梁



マルカン



ヤマカ



キヅコウカン

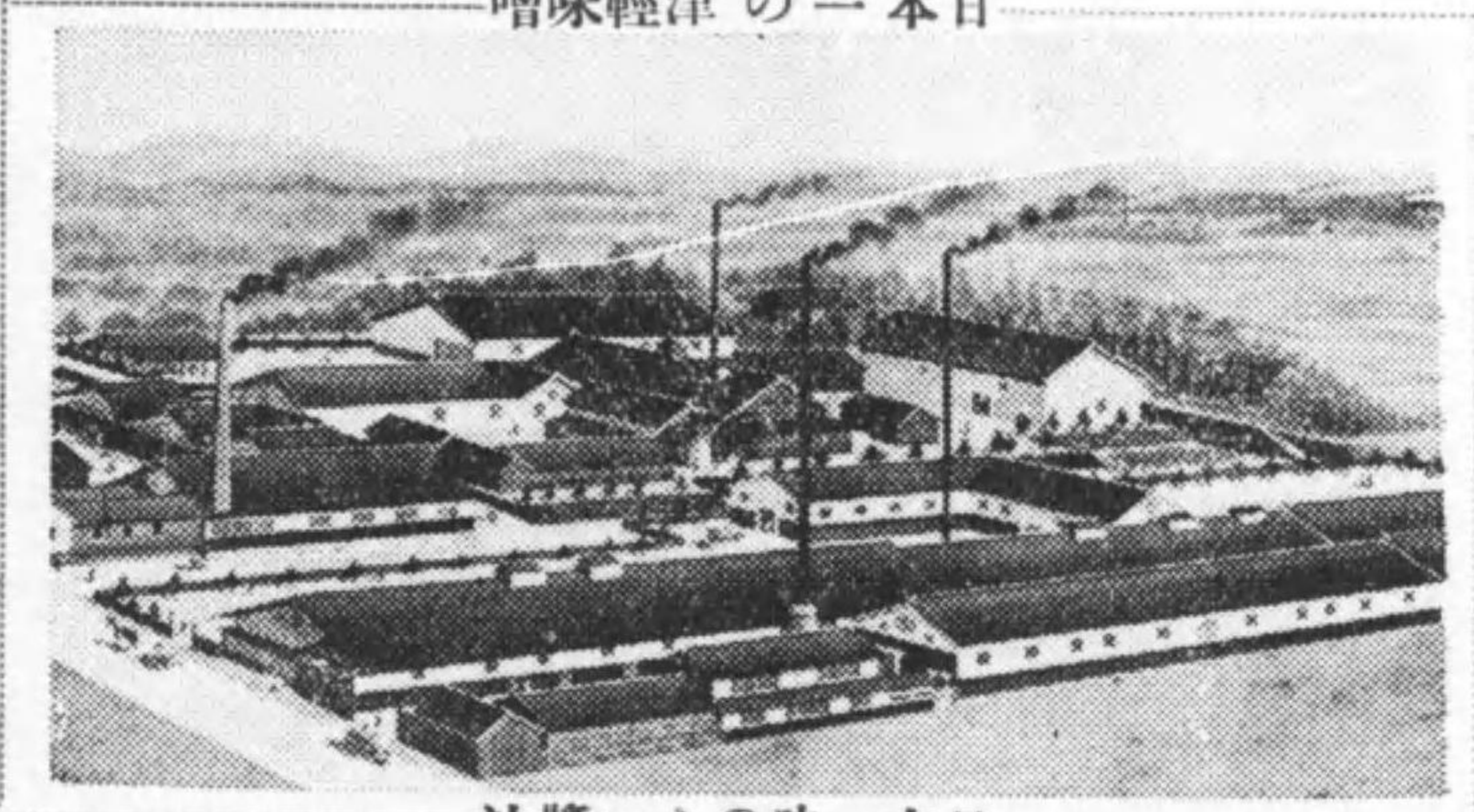


トワダ



キヅコリダ

— 本日 一の 津 軽 味 噌 —



— 本日 一の 味 よ の い 醬 油 —

第一工場

本店 青森縣五戸町

電話 長一 番 番

醸造元

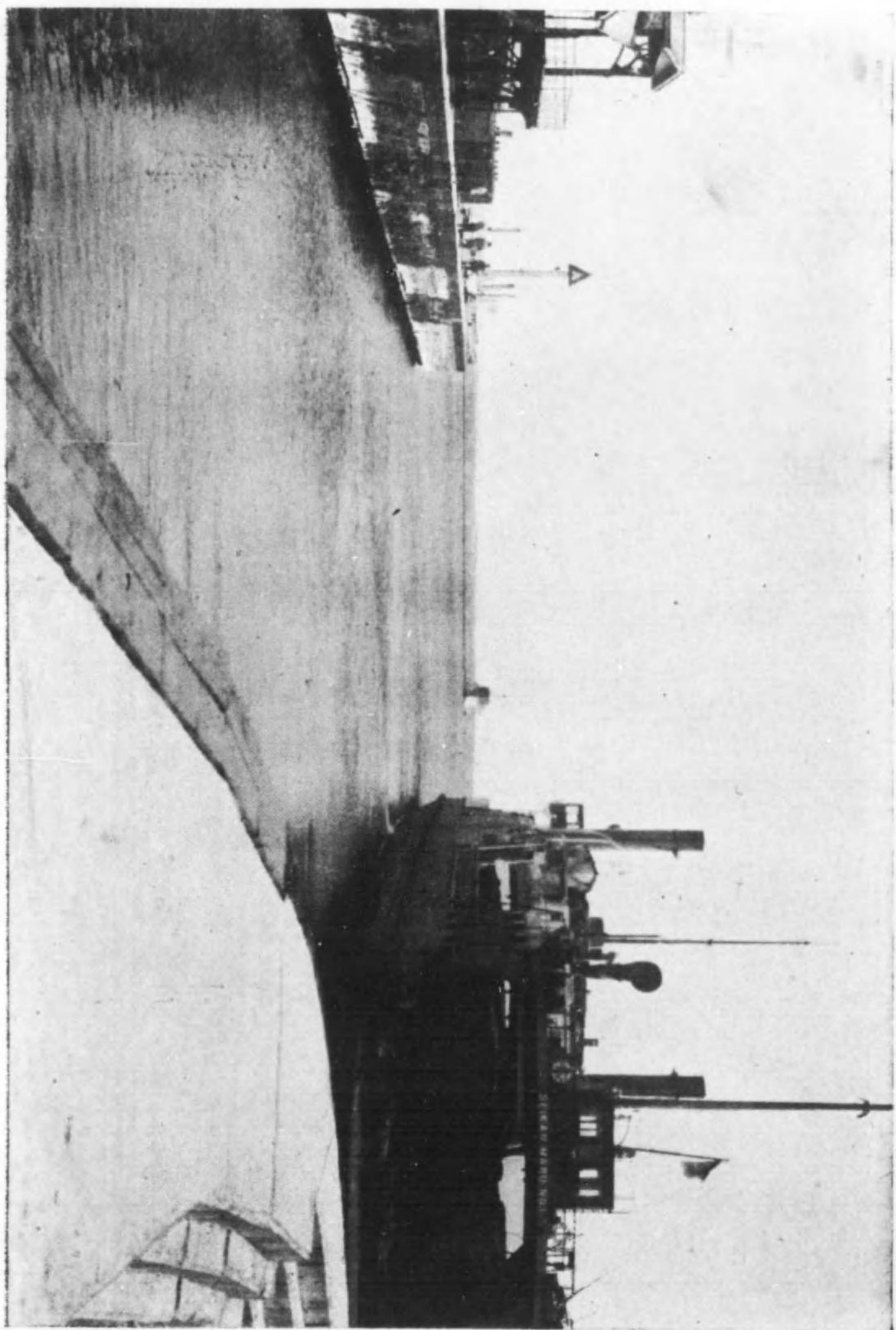
十和田醬油株式會社

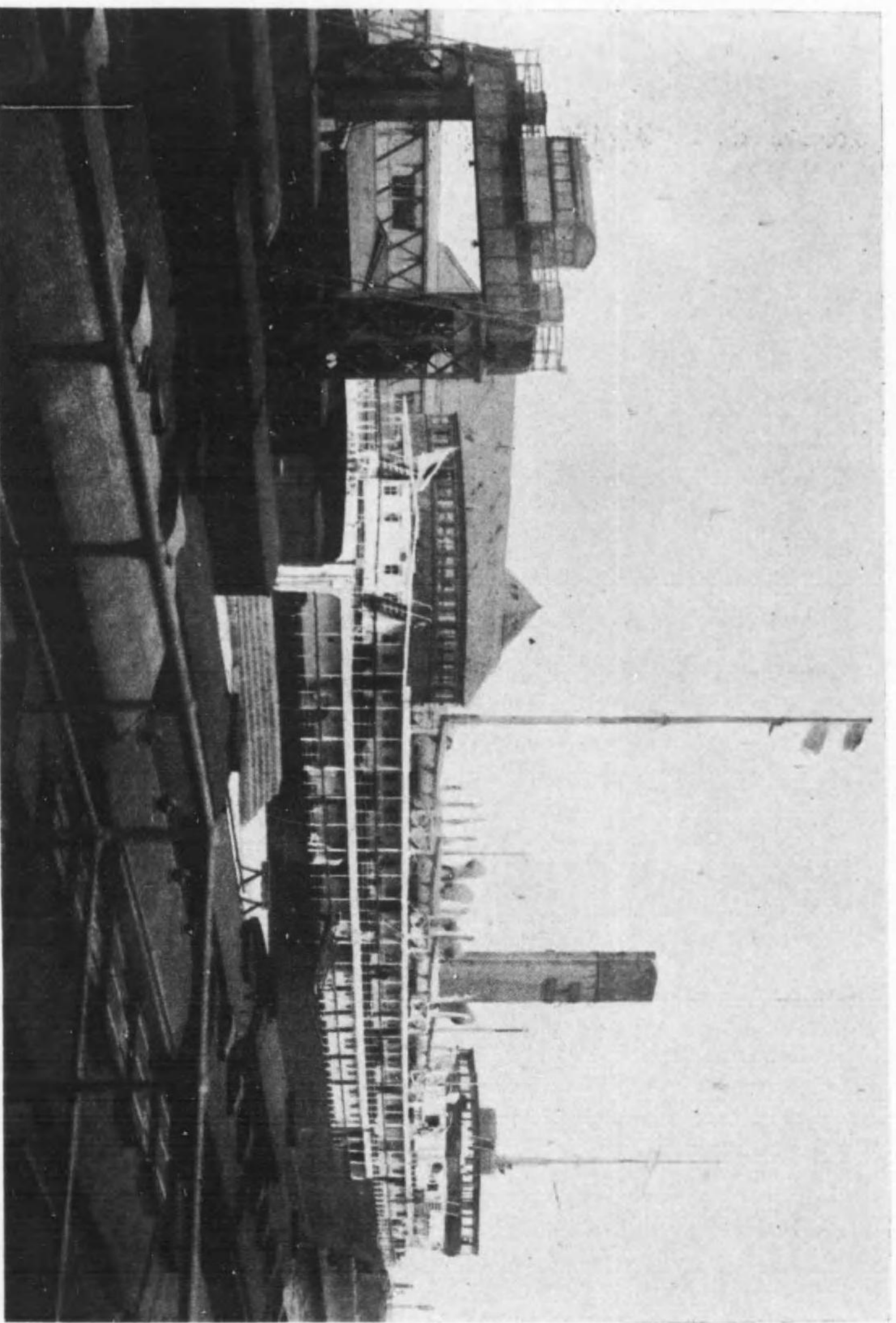
第二工場

支店 青森市浦町

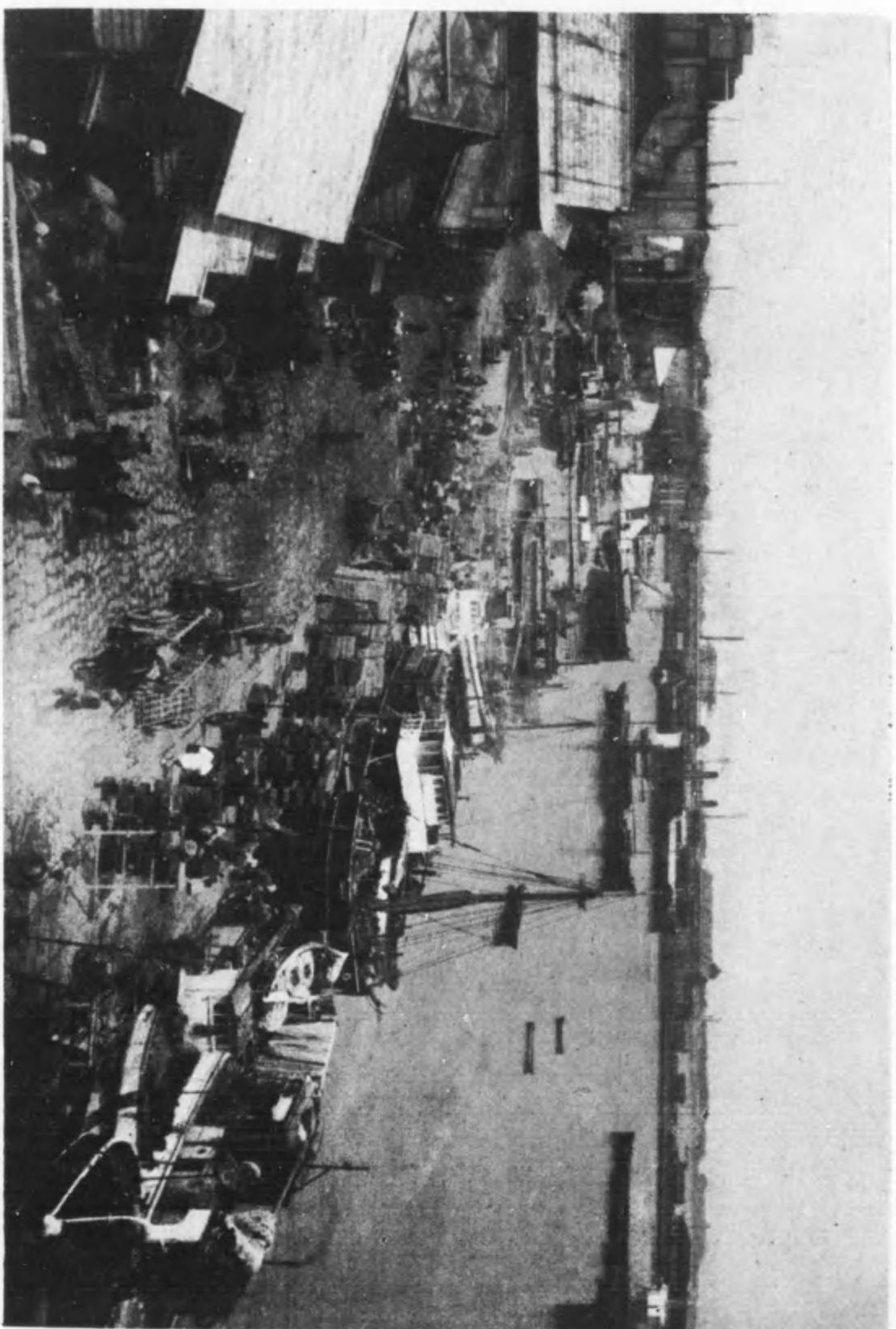
電話 長二一〇番 一三〇〇番

貨車航送船



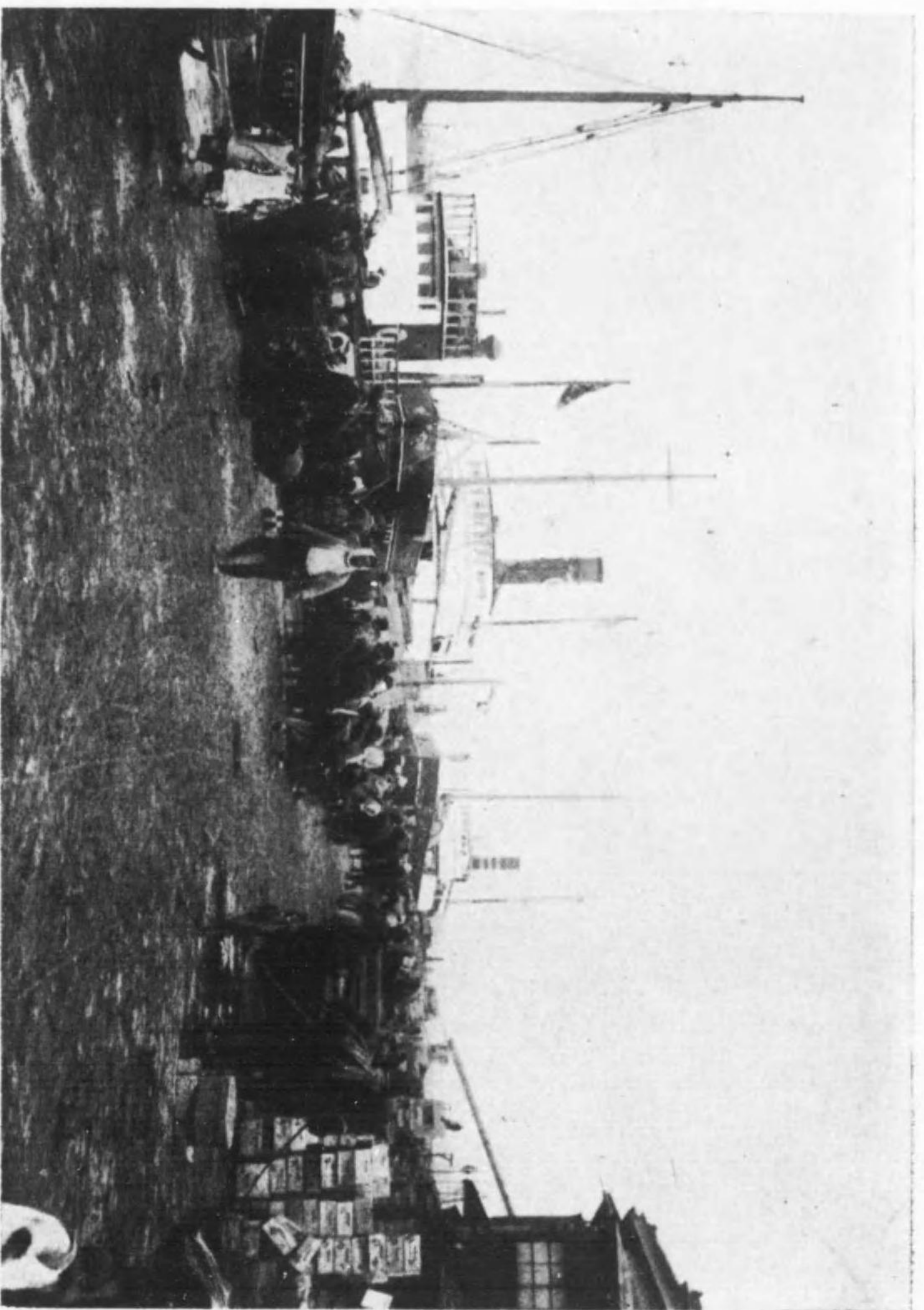


架動橋及貨車搭載ノ狀況

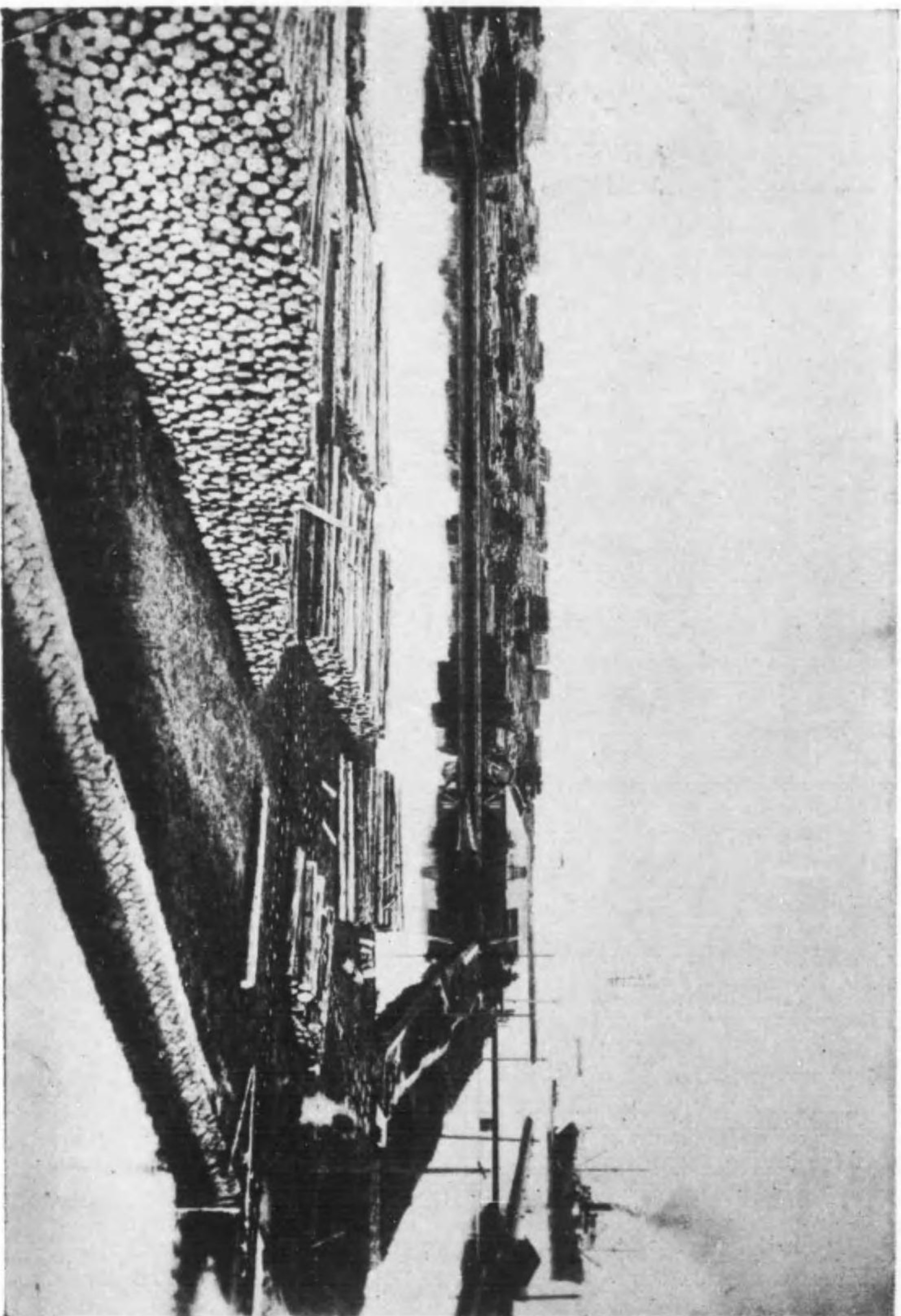


鯨

船 (共ノ一)



船 (其ノ三) 鯨



青森營林局貯木場



青森市役所



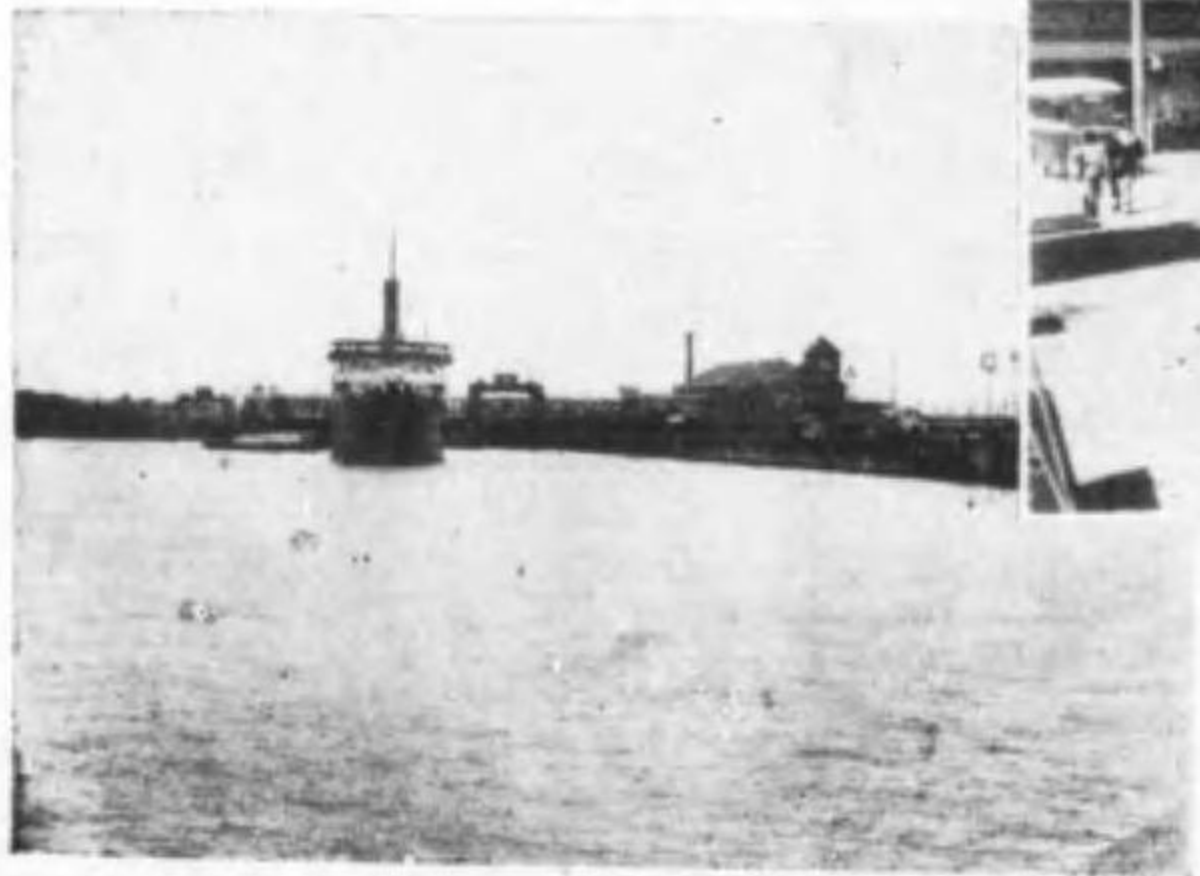
青森縣廳



青森市公會堂



青森營林局



青森築港(函連絡船)



青森驛

市森青



新町通り



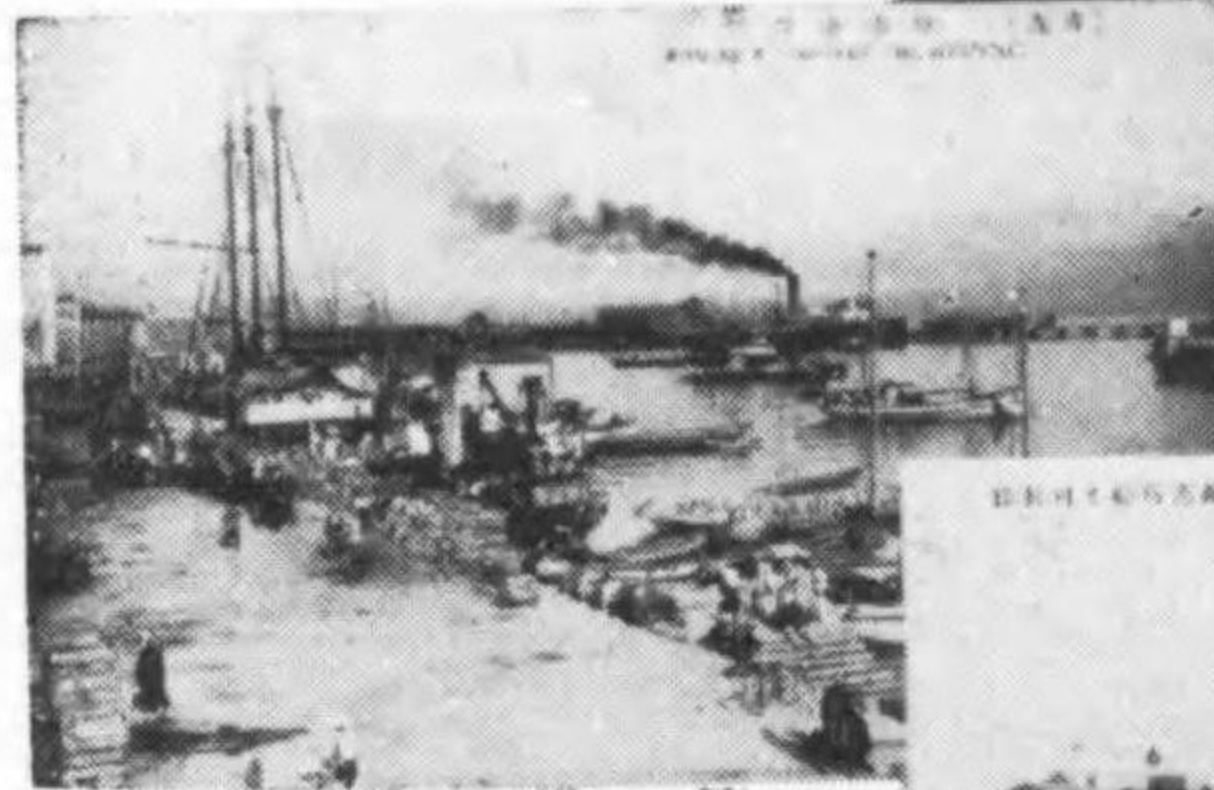
大町通り



大町通り



新町通り



築港内

連絡船と可動橋





合浦公園
(其ノ二)

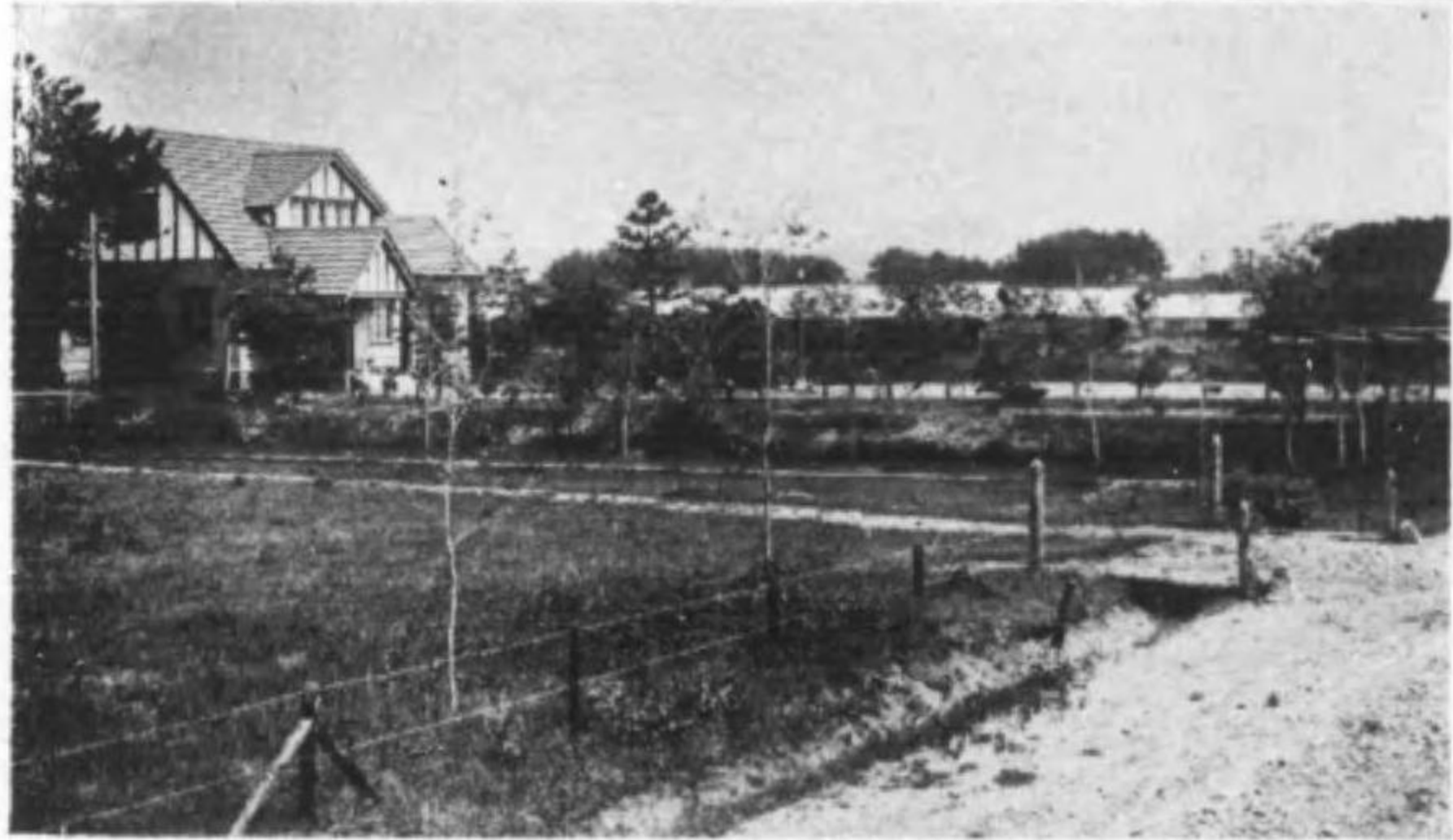


(其ノ二)



(其ノ三) 公認トラック

善知鳥神社



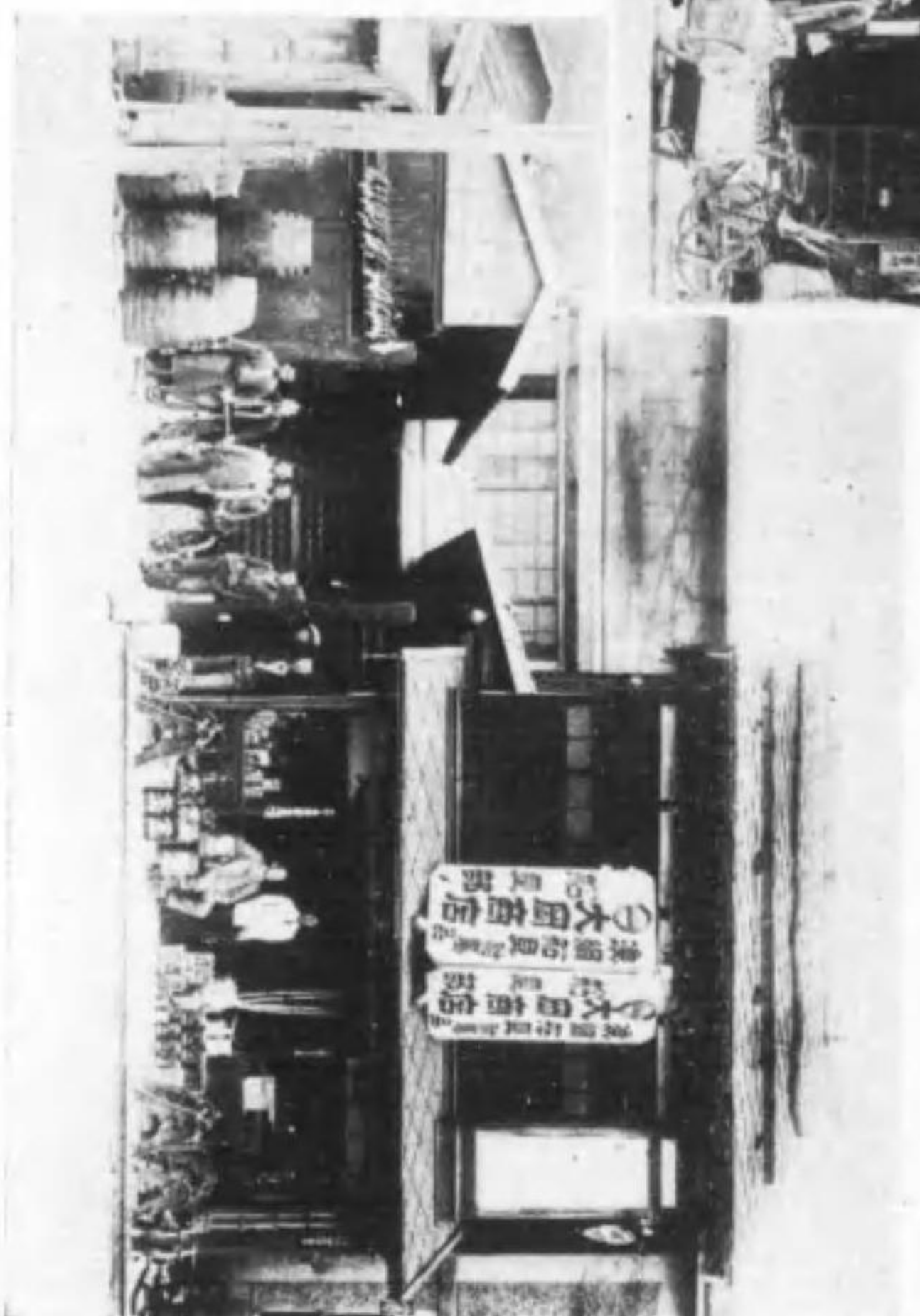
農林省種鶏場

青森競馬場



關西製網株式會社
 東亞製網株式會社
 關西ベント株式會社
 新田帶革株式會社
 神戸瓦斯株式會社
 日本生命株式會社
 昭和火災保險株式會社
 日の出帆布株式會社

代理店



青森市安方町
 大岡右衛門商店

電話 振電 略
 (子)ハ又(カラ子) 座口替振
 九二五四三 京東

特223
132



青森市
商工業案内



青森特産材 ひば

□ ひば材の特性

耐久力、抗壓力、負擔力、弾性の強大

□ ひば材の用途

柱、床板、土臺、鐵道枕木、橋梁、土工用材
電柱、水槽其他建築、家具用材一式

ひば材見本説明書御申込次第贈呈

青森市濱町(青森木材會館内)

青森縣樅材協會

電話九八番・五九八番

凡 例

- 一、本書は青森市産業の沿革、現況等を骨子とし、之に關する一般狀況を簡單に記述したものである。
- 一、本書に引用した統計は主として昭和八年のものに據り産業の變遷消長を比較考査するために既往の計數をも採録したのである。
- 一、統計中何年とあるは歷年調査、何年何月等と明記せるは其時の現在事實である。

青森市商工案内目次

第一章 總 說	一
第一 青森市の今昔	一
第二 位置及地勢	二
第三 沿革	三
第四 道路	八
第五 市街	二
第二章 氣象及戸口	三
第一 氣象	三
第二 戸口	一五
第三 職業別人口	一七
第三章 商業	一七
第一 概 說	一九
第二 會 社	三
第三 商業組合	三

第四 商工會議所……………三

第四章 工業

第一 概説……………三

第二 工業の現状と將來……………六

第三 主要工業の狀況……………四

○ 製材業……………四

○ 罐詰工業……………四

○ 燒竹輪……………四

○ 津輕味噌……………五

第四 工場……………五

第五 特産品(お土産品)……………六

第五章 交通運輸

第一 概説……………六

第二 海運……………七

○ 航路……………七

○ 入港船舶……………七

○ 乗降船客……………七

第三 貿易の現状と將來……………七

○ 貨物移動の趨勢……………七

○ 出貨入貨量の比較……………七

第四 外國貿易……………七

○ 貿易狀況……………七

○ 通商貿易國……………八

○ 輸出貿易……………八

○ 輸入貿易……………八

第五 内國貿易……………八

○ 貨物移動の概況……………八

○ 出貨入貨量の比較……………九

第六 陸上交通……………九

○ 鐵道……………九

○ 軌道……………一〇

○ 道路……………一〇

○ 鐵道貨物集散の概要…………… 一〇一

第六章 港 灣

第一 築 港…………… 一〇五

第二 青森港の特長…………… 一〇八

第七章 金 融

第一 銀 行…………… 一一一

第二 市街地信用組合…………… 一一四

第三 信託業…………… 一一五

第四 質屋業…………… 一二五

第五 郵便貯金…………… 一二六

第六 産業団体…………… 一二七

商工人名録…………… 一三三

雜

○ 官公衙…………… 一三七

○ 學 校…………… 一三八

青森市商工案内

第一章 總 說

第一、青森市の今昔

往時に於ける本縣政治文化の中心地は云ふまでもなく、城下町弘前で其繁榮の有様は古代の遺物塹壘櫓門や國寶五重塔等が、今に尙香氣高き不滅の藝術を傳へてゐるのを見ても思ひ知られる。

かゝる城下町の繁榮に引替へ一度都門を離れた邊陲僻地に至ればこれは、亦文化の光に浴さぬ原始さながらの未開地であつた。

今でこそ東北六縣中仙臺市に次ぐ我が青森も、其の昔は所謂蝦夷外ヶ濱の一部で、元善知鳥村と呼ばれた漁戸點在する一寒村に過ぎなかつたのである。

市の東部を貫通する清流堤川も、僅かに部落から部落へ宿を求めて彷徨つた旅商人が渡し舟に依つて通過するに止まり、草深き荒野を太古の姿其のまゝに容々として海に注ぎ、小止みもなく自然の搖籃をくり返してゐたのである。

此の堤川口に臨んで北は陸奥灣の蒼波を、南の空に悠然と浮く八甲田の峻嶺を中心に東西の三面を圍

む山岳を望むほか眼前に映するものは只だ茫漠たる荒れ野原で、徒に蘆葦叢生し尾花の咲き亂れるがま、に委さしてゐる、此の草叢の中の寒煙寂寥な部落こそ後世本邦北門の要津たり、國際的商港を發生せしむる母体であつたことを願れば轉た今昔の感に堪へないのである。

第二、位置及地勢

本邦東北に於ける經濟的發展の重要使命を有する我が青森市は本州東北の盡頭に位し、東經百四十度四十五分、北緯四十度五十一分に當り、前方は陸奥灣に介し津輕海峽を隔て北海道函館と相對し、青函連絡船で渺沔六十哩を僅かに四時間餘で達する。

地勢は平坦で郊外平野を合する時は東西三里餘、南北二里餘に亘り田畑が夙に開けて自ら市街の膨脹に備はり、青森市の今日ある所以は實に地の利に負ふ所多いのである。

市の背面の空に悠然として聳ゆる八甲田の峻嶺を中央に東、西、南の三面は山岳を以て圍まれ、駒込川及荒川の清流は、甲田山麓を迂回して市の南端に於て合流、堤川となりて市の東部を貫流して陸奥灣に入る、前方は直ちに陸奥灣の蒼波、市を中心として西北に突出する津輕半島は更に横はる下北半島と共に半圓を描いて灣口に相擁し、其の端麗なる山姿は特産ヒバ林に依つて淡く染なされ、常緑針葉樹千古の綠は漫々たる港水に映じて崇高の靈氣溢る、仙境を展開してゐる。

名勝地としての青森港頭の風景美と交通文化として世界的に比類なき貨車航送船の出現、更に水産

加工、罐詰工業の進展等に依つて一躍世界的となつた、我が青森は津輕海峽を介して東西兩洋に通ずる極めて優秀なる地點にあり、更に天然の諸條件に恵まれたる港灣を背景に今や國際的商港として活躍しつゝあるのである。

第三、沿革

本州北門の大埠頭、交通文化の中心地、將又水産都市として躍進してゐる青森市は舊津輕藩の領有に屬し、往古は所謂蝦夷外ヶ濱の一部で元善知鳥村と稱へ、茫々たる草叢の間に漁戶の點在せる一寒村に過ぎなかつたのである。

史上燦として輝く文武の譽れ高かりし津輕藩、中興の明主信牧公は其の優越せる地勢を認め此處に商港を開き、名も青森村と改稱されたのは實に寛永元年である。

當時の青森は其の海に沿ふた處は到る處蘆葦生ひ茂つて沼や入江多く、その寂寥たる有様に坐口に開拓の勇士をして轉た望郷の哀愁に堪へざらしむるものがあつたらしい、然し明君信牧公は良く家臣を督勵し一意商港建設の覇業に邁進し以て本港の基礎を確立したのである、而して商港の竣成と共に領内の豪商を移轉せしめて諸問屋を置き、或は街道の改良を行ひ、傍ら堤川の渡船を廢して橋を架する等大いに交通量の増加を策したので海陸の運輸漸く開け本港繁榮の端緒を見るに至つたのである。

超えて寛文十一年當地に陣屋を築き、藩兵の駐屯を見るに至つて愈々市街の体裁を整へ、次いで貞丁

年間に入りて村を町と改むるに及んで其の名は廣く世に紹介せられ、船舶の來往するもの夥しく、戸數百を算し茲に舊觀を一變して城下弘前と並び藩内樞要の都會となつたのである。

更に江戸廻送の藩米は専ら當港より積み出され。北海道松前との交易も亦漸く頻繁を加ふるあり、爾來津輕地方物資集散の要津として愈々其の名聲を高からしめたのである。

斯の如くに商港經營は着々その實績を擧げ、青森殷盛の基礎が築かれて今日遂に國際的に進出し得たのは言ふまでもなく、商港建設の創始者たる藩主信牧公が善政の餘榮にして、吾々市民として感恩の赤誠を表する所である。

其の後時代の推移、文化の進むと共に益々其の機能を發揮し、明治維新廢藩置縣の制布かれて縣廳所在地となり縣下に於ける政治、文化の中心地として官公衙の増設が都府の特色を全く一新するに至り茲に牢固たる我等の青森を確立し得たのである。

明治十八年道路法制定せらる、や當市亦東京、陸羽國道兩線の終點に指定さる、超えて同二十三年市制、町村制の實施と共に茲に町制を布く、同二十四年舊日本鐵道會社上野、青森間東北本線の全通に依つて交通状態に一大變革を來し、對北海道間の物資は概ね本市を経由するに至り其の價值も一般に認識せられて著しく其の勢力範圍を擴め、獨り東北に於ける要津たるのみならず本邦主要港灣たるの基礎が築かれたのである。

更に明治二十七年青森、弘前間に官線鐵道の布設となり、超えて同三十年近接部落の併合を行ふて翌三十一年愈々市制が施行せられたのである。

其の後明治三十七年上野、青森間奥羽本線も全通せられて此處に東北地方縦貫二大幹線鐵道の終點となり、一方北海道開發の促進に北洋漁業の進展とに依つて物資の集散加速度的に増加を來し、其の聲價が愈々昂まれ名實共に北門の要津たり、本邦主要港灣たるの地歩を占めて百貨の交易千客の往來に未曾有の盛況を呈するに至つたのである。

加ふるに多年熱望せし開港問題も明治三十九年四月に至り輸入品目制限ながらも其の指定を受け、大正十一年三月制限が撤廢せられて茲に完全貿易港として自由に飛躍する事が出來たので、外國貿易は逐年増加の趨勢を辿り、就中北洋魚族に對する漁業貿易の策源地ともなりて魚類の集散地として其の名は天下に冠絶するに至つたのである。

更に此の特色が工業に反映して水産加工業の勃興となり、鮭鱒罐詰の如きは海外市場に進出して頗る好評を博し、今では國際的商品として各國の需要旺盛となり、従つて青森の名も一躍世界的となり國際的商港として活躍する様になつたのである。

其の間縣下多年の懸案たる青森港修築の大業は大正三年に起工、滿十ヶ年の歲月を要して大正十三年に於て完成を告ぐるに及んで愈々近代的港灣の体型を整ひ、超えて同十四年に鐵道省空前の施設たる

青函間連絡航路に交通文化として世界にも類例の少ない貨車航送が開始せらるゝありて客貨連絡上圓滑安全を期するを得、更に陸岸には大倉庫、冷藏庫軒を並べて建設せらるゝ等堂々たる陣容を整へ今や本邦北門の一大門戸として内は東北に於ける經濟發展の重要使命と、外は通商貿易港として樞要の地位を獲得するに至つたのである。

斯の如く畫期的大躍進に既成築港は忽ち狹隘を告げ、目下幸に修築擴張工事中にて今や工程の安全と促進を期しつゝ、愈々大青森港としての各種の事業が熱心に企圖せられ、諸般の繁榮策亦誠實に講究せられ、砂糖移入場の如き現に其の指定を受け、更に大連、朝鮮、滿洲、北鮮、兩航路も實現せらるゝ、等大貿易港建設の氣運漲り、海陸相呼應して港勢の伸張に最大努力が拂はれ居るを以て將來の活躍こそ大いに囑望すべきものがあらう。

他面市勢は前述の如く海陸兩運の便に恵まれて長足の進歩を爲し、人煙日に稠密を加へ、明治三十七年公衆電話架設せらるゝと共に水道布設の工を起し、同四十二年竣成を告ぐ、諸般の施設稍々緒に就き市勢益々發展の機運に向はんこせしに不幸翌四十三年五月突如祝融の大厄に遭ひ、商港開設以來幾百年營々として築いた青都の文化は殆んど全滅に等しい打撃を蒙つた。

即ち本市の中樞をなす市街は一朝にして焦土と化し、滿目荒涼世人をして其の再起を疑はしめたのであるが、大火の趣一度、天聽に達するや、天皇、皇后兩陛下には殊の外御軫念あらせられ、長くも侍

従を差遣して親しく罹災民を慰問せさせ給ひ、更に御内帑金御下賜の御沙汰書を拜し奉る、縣市當局此の優渥なる聖旨を奉戴して銳意青都百年の理想を基礎として復興計畫を樹立し、俱に再建の大事業に着手したのである、全市民亦聖恩に感泣しつゝ、全国各地よりの同情ある救援とに斷然奮起し遂に災前に勝る街衢の整ひたる都市を再現することが出來たのである。

隣保郷黨の死傷する者算を亂して街頭に横はる悲惨なりし當時を回想し轉た感慨に堪へざるものがある、復興の完成は新しき青森の誕生を齎し、市街は整然碁局の如く道路は幹線最大十二間より普通八間に擴め、適宜街路樹を配して名實共に近代的都市たるの体裁を整ひたるも如何にせん財政の都合上其の計畫が残存區域に及ばざるは甚だ遺憾とする所である。

更に爾後に於ける發達に適正なる嚮導を與へざる結果、其後急激なる膨脹はは只管傳統の上へのみ伸び、自然のまゝに放置されて何等統制なく年と共に擴大して行つたので、統一ある文化施設に乏しく文明都市として甚だ幼稚な過程を辿つたのである。

茲に於て早くより之が對策に腐心し事實上本市と有機的の一体をなせる郊外部落を市域に編入し、都市の實力を充實すると共に總体としての都市に系統ある施設をなすべく、先づ以て昭和二年四月一部併合を行ひ、超えて昭和四年七月都市計畫法の適用都市として其の指定を受けたのである。

更に昭和七年六月再度の併合を行ひて今や既に道路網を決定し目下着々其の實行中で、都市計畫法の

精神に則り時代に順應した文明都市の建設に最大の努力が拂はれ居るを以て、將來の青森こそ刮目に値するものあらん。

第四、道路

道路。都市的施設の根幹とも稱すべき道路は、都市に於けるあらゆる交通機關の基礎となり、恰も人体に於ける血管の如き役割を演ずるもので、單に交通上重要なのみならず都市の美觀からも、市民の保安或は保健衛生上からも、極めて重要な地位を占むるは今更謂ふ迄もない。

然るに本市の道路は明治四十三年の大火前は或る一部を除き迂餘曲折し、而も狭少にして車馬の通行も困難を感じる位であつたのである、それが大火復興に際し當局の英斷によつて現在の如き廣々と擴大せられたのである、然し乍ら其の計畫が前にも述べた通り財政の都合上一期に大計を樹て得なかつたのみならず、爾後の發達にも適正なる嚮導を與へず、自然のまゝに放置されて文化的施設を見ざる結果、其の後急激なる外延的膨脹が近代都市の理想と全く相反する道程を辿つたのである。

依つて早くより之が對策に腐心し、都市施設の改善創建を試みたが市財政其の他の事情により早急に之が實現を見ざるは甚だ遺憾に堪へざる所である。

而して其の後に於ける本市は歐洲大動亂が齎せる未曾有の好況時代を一轉機とし、之に伴ふて生ぜる都市集中の現象は必然的に住宅の急増を促し主として郊外へ郊外へと著しい伸張を來したので忽ちに

して之等を都市化せしめ、市街の發展状態が何等市内と異なる所がなく兩者は全く社會生活に經濟生活に密接不離の關係を生ずるに至つたのである。青森市の實質的發展は之等近郊部落のすばらしい躍進に依つて明かに裏書され、交通、産業、保健衛生、社會事業等本市の如何なる施設も之等部落の關係を無視しては完全なる遂行を期す能はざる状態にある。茲に於て事實上本市と有機的一體をなせる郊外部落を市域に編入し、都市の實力を充實するに共に總体としての都市に系統ある施設をなすべく先づ實質的に大青森市の實現を圖らんとする氣運を醸成するに至つたのである。

而して將來都市計畫法實施の前提として一期に之等全部の併合を企圖せるも色々の事情に災せられ、交渉遲々として進まざるを以て取敢へず兩者意見の一致せる一部を市域に編入し、昭和四年七月愈々都市計畫法適要都市たるの認可を得たのである。

其の後更に所期の目的たる殘餘の部落をも併合して、今や既に都市計畫區域内全般に亘つて所謂交通上の根幹となるべき道路網を決定し、目下着々事業が實施せられて時代に順應したる文明都市建設に精進しつゝあるを以て「一層住み良き都」の出現も近い將來である。

舗道。路面の舗装は近代都市の道路に對し必要欠くべからざるものであるが、如何にせん多額の工費を要するので、財政的に惠まれざる本市としては充分其の必要を痛感しつゝ、容易に實現を見ず、僅かに砂利及碎石の補填に依つて一時を糊塗するに過ぎなかつたのである。

然るに日に月に整備し行く交通機關、就中自動車の急激なる増加に路面は全く四離滅裂となり、降雨の場合は泥濘靴を没し、晴るれば黃塵天に漲るの不愉快なる有様に、惡路は青森の名物とさへ稱した事も必しも酷評とのみ考へられなくなつたのである。

無舗装に依る市民の蒙る經濟上の損失尠少なからざるは元より論を俟たない處であり、公衆保健並に都市自体の美觀乃至は市の体面上から觀ても、本施設の必要欠くべからざる事は言ふまでもない。

我が青森市は有数の商港都市として、將又發展途上にある工業都市として最も有望なる將來を有するにも拘らず都市的施設の根幹とも稱すべき道路は前述の通りであり、其利用の趨勢に對比する時は一日も等閑に附すべくもなく早急實施すべき運命にある、茲に於て一般市民も亦其の緊要なるを認め本施設に對する切望の聲漸く高まるにつれ歴代當局も鋭意調査研究を重ね之が解決に盡力し、愈々實施期に達せしに時恰も歐洲戰亂終局後に襲ひし反動的不況は容易に恢復の緒につかず、我が國の財界も亦世界的恐慌の渦中にあつて依然不景氣の域を脱せず、加ふるに昭和二年に本邦金融界未曾有の恐慌時代を現出する等不況の益々深刻化するありて產業界は衰微甚しく、日を経るに従ひ各種の事業は益々不況不振を來し都鄙至る所不景氣の聲に滿たされるの悲境に陥つたのである。

茲に於て一般勤勞者の就職難と生活苦は一層深刻を極め、中小商工業の閉店倒産する者亦相踵く状態となり、市民の擔稅力は極度に彈力を失ひ、毎歲市稅を初め諸稅金に於て減收に次ぐ減收を以てす

るの結果を招いたのである、稅外財源の少ない本市の財政は唯一の稅收入が右の如く窮迫せるを以て市豫算は極度の緊縮節約をなし、歲入欠陥に處するの途を講じなければならぬので遺憾ながら本事業の如き多額の工費を要する問題は延期の止むなき状態に立至つたのである。

資本主義經濟高度の發達は益々勤勞大衆と中小商工業者を壓迫し、所謂中産階級の崩壞現象を招來し而かも打續く經濟界不況は容易に恢復の緒につかず、此の不況の荒波に押し流されて勤勞者の失業する者年と共に増加し要保護階級層が益々擴大されつゝある、此處に於て政府は大々的失業救済の必要を認め全國的に産業振興を目的とする土木事業を起すと共に他面失業救済を目的とする地方土木事業費に對しても補助金交付の制度を發布せるを以て愈々本市に於ても此の好機を捉へ、市債を財源として遂に多年の懸案たる舗装工事を起すこととなつたのである。

先づ昭和六年度に於て市特別會計たる交通部の純益金を以て試験的に一部舗装の結果が極めて好成绩を挙げたるを以て翌七年より愈々失業者救済を目的とする舗装工事を起し、市内幹線市道は同年度に於て殆んど終了を告げ、昭和八年に入りて殘餘の所謂横丁通りを舗装し、更に市内を縦貫する國道は内務省直轄工事を以て同年度に於て竣成を見るあり、本年は縣道と市道の一部が工事中にして全道舗装が將に完了せんとす。

文化の風は颯々として社會全般に亘りあらゆる施設は日に月に改革を迫られてゐる。

特に都市的施設の根幹ともなるべき道路の發達は近代都市の盛衰に重大關係を持つものである、此處に於て本市は道路施設に對しては良く時代に適應する要件具備のため鋭意改良完備に努め孜孜して之が經營に當つた結果、其の努力が漸く報ひられ、實に本市に於ける諸施設が道路だけに表はれてゐると言はれる位立派になつた。

鏡の如く澄む舗道の整然たる街衢を見る時、誰が今昔の感に堪へざるものがあらう。

第五、市 街

市街は整然碁局の如く海岸に沿ふて東西に長く、市の中央を縦走する國道を中心として形成せられ、東、西、南の三面は扇型に擴大して平坦なるを以て市街はこの方面に向つて年々素晴らしい勢ひを以て進展して行くのである。

宏壯なる近代的大厦高樓は櫛比林立し、鏡の如く澄む文明舗道は常に往來股賑を極め、綠色滴たる街路樹は程よく植樹せられて一入風致を増し、更に近來街路照明施設の擴張整備せらるゝ、ありて沿道の美觀は世界に誇る貨車航路施設と共に遠來觀光客の旅情を恍惚たらしむるものがある。

現在町數は貳拾六で、其の町名を擧ぐれば左の通りである。

安方町、新安方町、新舘貝町、博勞町、大町、古川、濱町、鹽町、大野、新濱町、真町、新町、舘貝町、米町、柳町、寺町、鍛冶町、大工町、松森町、堤町、浦町、榮町、造道、八重田、沖館、新田

内外米雜穀
各種肥料
三菱養鶏飼料
問屋

青森市新安方町

和田幸吉商店

電話長四六六番・一、三三九番
電略(ワタ)又ハ(ワ)

出張店 五所川原町

電話 一四九番

酒類
問屋



西尾三郎商店

青森市濱町

電話 一四六番

米穀
雜穀
荒物
問屋



奈良左市商店

青森市古川町

電略 (ナラ) 又ハ(ナ)
電話 三三八
受信署號 アヲモリマルサ
振替口座小樽一五五八〇番

和洋酒類。食料罐詰
味噌。醬油。卸小賣
銘酒 太陽 販賣元
銘酒 爛漫青森代理店

松坂屋

小島友七

青森市大町
電話 二百五十六番
電略 (トモ七)又ハ(コ)
振替口座 仙臺 一二〇四番

和洋酒類食料諸罐詰
清涼飲料水各種

青森市濱町

商號 藤武田榮三郎商店

電話 一三四番
振替口座 仙台四三六八

銘大關。金露
酒白藤。菊水
分醬油特約店
①白酒發賣元

酒類
罐詰商



青森市濱町
梅津忠兵衛

青森市濱町

電話 五三八番

振替口座東京四三六四五番

綿布
卸商

石郷岡喜一郎

青森市安方町十七番地

電略 (21)

電話 三三七番

振替仙台二一九二番

●諸官省各學校御用達●

株式會社



伊狩洋服店

青森出張所

電話一四六三番
青森市新町

弘前出張所

電話一〇〇三番
弘前市百石町

八戸出張所

電話八四五番
八戸市廿三日町

本店 新潟市古町通四番町

電話三二四一
振替東京三八一七番

支店及出張所
仙臺、秋田、村上、若松、鶴岡、十日町、津川町、河原田、富山、山形、前橋、長岡

第二章 氣象及戸口

第一、氣象

地方の生活、文化、活動各般がその氣候風土等自然現象により、著しく制約されることは言ふまでもないが、本市の文化、市民の生活、活動も自ら氣象に影響されてゐる處が多い。

溫帯地帯内とは云へ北方に偏せるを以て氣候は概して寒冷であり、農作物を犯さるゝ事極めて少ないが冬季中は大陸高氣壓のために西北の寒風吹き荒み、間斷なき降雪に積雪丈餘に及ぶこともあり稀に交通の支障を來すことさへある。

さりながら現今はこの冬季は北國の世界で雪に彩られた山々を眺めますと、其の姿に夢幻的な美しい誘惑を感じさせられるのである。

明けゆく世界に悠然と浮く白衣の嶺峰甲田の神秘的な山姿等、北國特有の雄大なる大景觀は到底南國人の味ひ得ぬ仙境である。

融雪は大休四月初めに終り、花は四月の末より五月の初めに梅、櫻、桃、李一時に開き百花爛漫とはこれ眞に東北地方の專有言である。

雨の多い梅雨期に雨量少く、盛夏は南國の酷暑に比しべくもなく、而も夜に入りて内海を亘る涼風は

苦熱を洗ひ去りて盛夏の苦しきも知らない程である。
 秋は概して雨量多いが市の三面を圍繞する山々、殊に紺碧の空に悠然たる甲田が美はしい錦を織りなし、燃るばかりの紅葉を居ながらの眺望は眞に神秘境にある心地がする。
 斯くの如く四季折々の風光に恵まれたる我が青森は、淺虫及酸湯兩温泉を背景に東北の樂土として益々其の聲價を高めつゝある。
 最近十ヶ年間の氣温左の如し

(△印ハ氷点以下ヲ示ス)

年次	氣				温	
	最高極	最低極	平均	平年	平年トノ差	
昭和八年	三三・九度	△一七・〇度	八・九	九・三	〇・四	
昭和七年	三四・〇度	△一四・二度	九・五	九・三	〇・二(一)	
昭和六年	三三・四度	△一四・七度	八・三	九・三	一・〇	
昭和五年	三二・九度	△一九・一	八・九	九・三	〇・四(一)	
昭和四年	三三・九度	△一七・六度	九・一	九・三	〇・四(一)	
昭和三年	三三・六度	△一七・四度	九・五	九・三	〇・二	
昭和二年	三三・五度	△一三・〇度	九・二	九・三	〇・一(一)	
昭和元年	三一・五度	△二一・〇度	八・六	九・三	〇・七(一)	
大正十四年	三三・二度	△二三・六度	九・六			
大正十三年	三三・〇度	△二一・七度	九・六			

昭和八年中に於ける氣温左の如し

月次	氣				温	
	最高極	最低極	平均	平年	平年トノ差	
一月	六・二度	△一三・五度	△三・四	△二・七	〇・七	
二月	三・七度	△一七・〇度	△四・七	△二・二	二・六	
三月	八・三度	△一四・七度	△二・〇	〇・七	一・三(一)	
四月	二二・八度	△四・九	五・三	七・〇	一・七	
五月	二五・六度	△〇・八	二・七	一一・八	〇・九	
六月	二七・八度	七・二	一六・四	一六・三	〇・一	
七月	三三・九度	一七・〇	二二・一	二〇・八	二・三	
八月	三三・九度	一六・九	二二・九	二三・九	一・〇(一)	
九月	三三・〇度	六・三	一七・八	一八・六	〇・八(一)	
十月	二〇・七度	二・〇	一一・四	一一・一	〇・七(一)	
十一月	一七・六度	四・一	五・六	五・九	〇・三(一)	
十二月	一一・七度	△一二・七	一・〇	〇・二	〇・九	

第二、戸口

青森市は明治廿三年町制が布かれたのであるが、鐵道は東北及び奥羽の兩本線の開通、それに北海道開發の促進等に依り港灣の進出を見るに及んで益々發展し、明治卅一年隣接部落を併合し、茲に始めて市制が布かれたのである。

當時は戸數六千七百七十七戸、人口僅かに貳萬七千九百九十一人であつたが、爾後長足の進歩に逐年人口の増加を來し、市勢益々發展の機運に向はんとしつゝ、あつた矢先、偶々明治四十三年火災の厄に遭ひ全市殆んど烏有に歸したが、全國的の同情と市民の奮闘によつて克く復興の實を擧げ、晨年既に港

灣修築の大事を了し、昭和三年四月隣接二ヶ村の一部を併合して市勢の進展著しく見るべきものあり昭和五年十月施行の國勢調査に於て世帯數一萬四千六百四十二戸、人口七萬七千百三人を擁して東北都市中仙臺市に次ぐ都市となり、更に昭和七年六月隣接部落の一部を併合した、め人口十萬に達するのは近い將來である。

今此處に最近に於ける戸口増加の趨勢を示せば左の如くである。

年次	人		總口數	戸		一ヶ年間ニ於ケル人口ノ増加數
	男	女		數	數	
昭和八年	四五、〇〇一	四四、六三八	八九、六三九	一六、八二九	三、三七九	
昭和七年	四三、三三三	四二、九七七	八六、二六〇	一六、二七〇	六、六三三	
昭和六年	三九、七八五	三九、八四三	七九、六二八	一五、〇六六	一、七三五	
昭和五年	三九、〇七二	三八、八二二	七七、八九三	一四、七五二	二、六六	
昭和四年	三八、九五二	三八、六七五	七七、六二七	一四、七三三	一、三二二	
昭和三年	三八、三三七	三六、〇六九	七六、四二六	一四、二五五	二、八〇八	
昭和二年	三七、〇八八	三六、五三〇	七三、六〇八	一三、七八二	三、〇七五	
昭和元年	三一、〇〇七	三〇、五三六	六一、五三三	一一、七七三	二、一九四	
大正十四年	三〇、〇四八	二九、二九二	五九、三三九	一一、三八一	九、九二	

第三、職業別人口

本市は由來海濱の漁戸散在せる一寒村に過ぎなかつたのであるが、天然的に交通上優秀なる地利を占めて居るため其の發展も著しく、我が邦地方に於ける客貨集散上の要津となり、國際的商港ともなつたのである。

故に本市の消長は常々港灣を背景とし、住民の生業も亦之に倣ひ、先づ交通關係が商業の繁榮を促し市勢の發展を見るに至り、本縣に於ける政治經濟等諸般の中心機關を集中し、官公衛會社の増設が本市繁榮の一素因ともなりて各般の機能漸く整備するに及んで漸次工業の勃興を來したのである。今昭和八年十二月末現在による市民の生業狀態を調査するに其の大半を占めて居るものは言ふまでもなく商工業である、就中工業の近年著しく進出しつ、あるは特に注目し價するものがあり、將來の發展も亦豫測し得らるゝのである。

大正十三年	二九、八七七	二八、五三二	五八、三〇八	一一、五三〇	三、一四三
-------	--------	--------	--------	--------	-------

職業別人口 (昭和八年)

職業別	本		業計
	男	女	
農業	一、〇六〇	五四一	一、六〇一
水産業	二三五	一	二三六
鑛業	六〇	一	六〇
工業	四、〇八五	六五〇	四、七三五
商業	四、五九〇	二、二五〇	六、八四〇
交通業	二、四五三	一四七	二、六〇〇
公務自由業	二、三三〇	七九五	三、一二五
其ノ他有業者	一、七五〇	三九八	二、一四八
計	一六、五六三	四、七八二	二一、三四五
無職業	二八、四三八	三九、八五六	六八、二九四
合計	四五、〇〇一	四四、六三八	八九、六三九

國産津輕漆器各國漆器
家庭用家具小荒物雜貨

青森市大町二丁目角

岩谷冷蔵庫特約店
秋田曲木木工代理店



一戸家具百貨店

電話 九二四番

桐箆笥製造直賣
建具一式製造卸

各國漆器
佛壇佛具一式
嫁入道具一式
國產津輕塗製造一式

青森市米町二丁目

大橋漆器店

電話 一二〇二番

東隣り

大橋家具部

…(佛壇八十圓ヨリ千圓迄)…



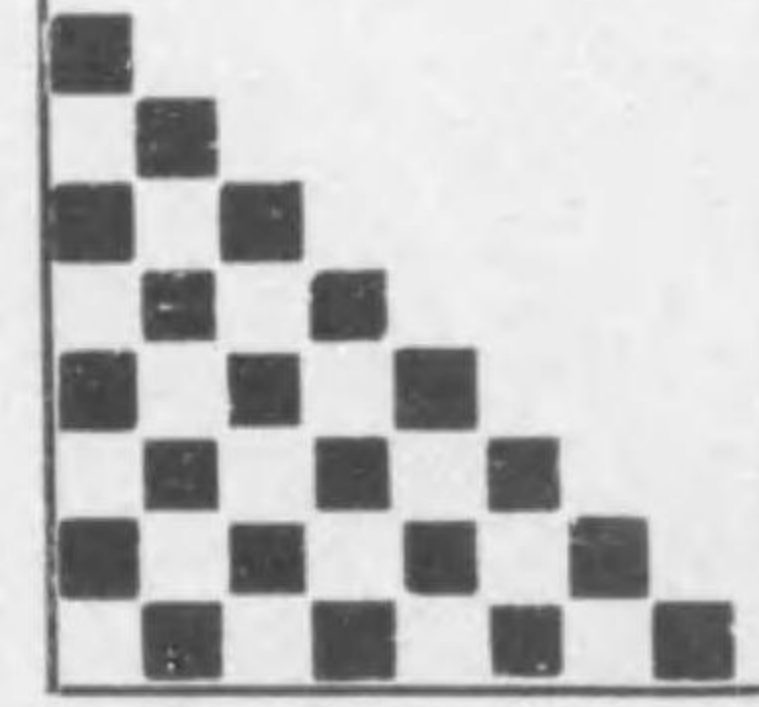
履物品附屬一式
雨傘 商卸



大島治三郎

青森市大町二丁目

電話 六五五番



履物問屋 青森履物株式會社

青森市新町

下印各種足袋
釣鐘地下足袋會社
櫻谷印・王將印ゴム靴
函館商事會社ゴム
代理店

青森市大町二丁目

雜メリヤス卸
貨商會
田星政商店

店主 星

電話 英吉
五四〇番

第一火災海上保險株式會社
東神火災保險株式會社
三井生命保險株式會社

代理店

元應丸 セキトール
 六六丸 ベー一タ
 其他拾貳種製劑

青森市寺町

南藥局
 南了益
 藥學得業士

青森市藥品移出業組合

事務所 青森市新町三一四番地

電話 一六八九番

- | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 島 | 齊 | 泉 | 稻 | 鎌 | 赤 | 濱 | 須 | 木 | 館 | 鈴 | 林 | 島 |
| 津 | 藤 | 長 | 見 | 山 | 平 | 山 | 藤 | 村 | 山 | 木 | 寅 | 津 |
| | | | 寛 | 田 | 平 | 喜 | | 源 | | 敬 | 圓 | 員 |
| | | | | 重 | 之 | 次 | 信 | 貞 | 次 | 次 | 次 | |
| 薰 | 吉 | 郎 | 郎 | 吉 | 進 | 郎 | 一 | 造 | 郎 | 一 | 郎 | 郎 |

青森市寫眞業組合

事務所 青森市博勢町〇六番地

電話一五三一 甲

柴	白	守	澤	澤	阿	越	松	中	小	大	石	
田	戸	屋	田	田	部	野	山	村	山	山	川	組
治			貞				山					合
兵	正	辰	太	義	吉	德	修	虎	竹	定		員
衛	雄	藏	郎	丈	郎	仁	汪	治	雄	藏	義	

第三章 商業

第一、概 説

藩主信牧公の商港建設に依つて確立された本市の商業は水陸兩運の形勝地にして、本州北門の關門となり、對北海道との連絡地點として古來より其の發達を見たのであるが、更に北方の開發と交通機關の完成に刺戟せられ、港勢は轉々向上して繁盛を來し、物資の輸送は日に月に増進し其の商圏は北は獨り北海道に止まらず、遠く樺太、沿海州に及び、南は東北六縣は勿論、北越、京阪、並に九州方面等全國至らざるなきまでに擴大するに至つたのである。

特に交通上樞要の地點を占めて、日夕船車が吞吐する旅客の數、日々六千人を下らず、之等は多く本市の顧客として一段と其の繁榮を促したのである。

然るに大正十三年、鐵道省の青函間連絡航路に交通文化として世界に誇る貨車航送船の就航せらるゝありて、茲に運輸系統の大革命となり、從來本港に於て一旦船舶に積替された物資は、今度は積替なしに貨車のまゝ輸送せらるゝ様になつたので、輸送日時の短縮、荷傷み、品違等の事故を防止し且つ荷造費の低減等幾多便宜が得らるゝに至つたので、航送船の利用は逐年増加の道程を辿り、漸次省外船の領域を蠶食したので、省外船は一轉して頽勢へ傾いたのである。

其の結果、必然的に本市の商業に重大變化を來し、對岸北海道の主要物産を内地方面へ賣り込む事も内地の物資を北海道へ販賣する上にも甚大なる影響を蒙り、其の商圈は著しく縮少するの止むなき状態となり、曾つては本州對北海道との連絡港たる關係で、物資の集散市場として其の潛勢力を天下に誇つた本港も、起點港より一躍通過港へ轉落の悲運に遭遇したのである。

搗て、加へて、航送船出現と共に連絡待合所も移轉せられ、北海道往來の旅客が市中に下車することが至難となつたので二重、三重の打撃に商業者は何れも其の方途に迷ひ、倒産、閉店するもの相次ぎ獨り商家のみならず、或は解が不用になつたり、濱人夫の失業等市全体として一時は相當なる打撃を蒙つたのである。

斯の如くに貨車航送が本市の現存する全ての機能に大きな影響を齎したのであるが、一面に近代的文明は本港の如き、優秀なる港灣を何時迄も不便のままに放任する筈はなく、青函間連絡施設が完備への途を急ぎつ、あつた事は、餘りにも當然過ぎる程當然であらねばならぬ。

兎に角に航送船の出現は大きな教訓となつて、本市は永續性のある商業の繁榮を何れの方面に求むべきか云ふ問題が朝野官民間に論議せらるゝ様になつたのである。

而して都市が地方的商業のみを以て自立するには、其の周圍に都市人口の十倍若くは夫れ以上の人口を抱擁する勢力圏を必要とすと稱されてゐる、然るに本市の現状は其の位置と經濟的還境に恵まれざ

る都市であり、地方的商業のみを以て自立の方途なき實狀にある、此處に於て商業中心より商工業中心に發展策を講ずるの必要に迫られて來たのである。

以上の觀察に依り本市を商工業中心に振作發展を促し、中繼港より再び起點港へ復活せしむるには、矢張り海を利用するより途がないのである。

商業地として發展性に乏しい本市も、商工業中心地としては將來に輝ける光明と存在の理由を持ち可能性が多分にある。

現に其の原料の殆んど全部を北洋魚族に求むる罐詰工業は、唯に生産高が市内諸工産品中最高位にあるばかりか、其の名は既に世界に鳴り響いてゐる。

自然の良港を抱き、世界三大漁場の一たる北海道沿海並に樺太、沿海州を其の對岸に持ち、且つ木材の無盡藏たる寶庫北海道、樺太、シベリヤ等々を間近に控へた本市は、此の地理的利便を極度に善用せねばならぬのである。同地方産の海産物は技術上から遠距離輸送不可能であり、且つ一大消費地たる内地の門戸を占めて居るため、北海道其他で加工精製せるものを再び輸送するよりは原料のまま、で本市へ搬出し、本市に於て加工精製の後直接消費地へ輸送する方が遙かに經濟的である。

其の上勞銀は一般に殖民地は高きため、加工精製に不利、不經濟であるが、是等の點から見ると本市は凡てに恵まれて居るので、對岸から産出される海産物、木材、石炭を多量に直接移入して是に加工

製造する事は本市商工業の生きる道であり港勢伸張の最大要素となるのである。
 以上の見地より港灣利用に依る各種の事業は熱心に企圖せられ、諸般の繁榮策亦誠實に講究せられ、現に罐詰工業の如き新興産業の勃興に依り、物資は遠く海外に輸出せられて商勢圏の益々擴大せらるゝあり、砂糖移入場問題も解決せられて、巨大船の續々入港せらるゝあり、更に市民の熱望せし北鮮航路の寄航が實現せられて北滿方面へ畫期的躍進の第一歩を踏み出し、彼我物資の交易に今や青函航路に失つた商圏を補充して餘りある等々膨湃たる再興の氣運全市に漲り、海陸相呼應して市勢の發展向上に懸命の努力が拂はれ居るを以て、將來の青森はより囑望すべきものがあらう。
 要するに本市の商業は之迄稍々内面的に發達して來たのであるが、貨車航送を一轉機に愈々目標を海外に置き、現に罐詰業の如き其の商圏は實に二十餘國に及ぶ盛況を呈し、この世界的躍進に刺戟せられて水産品加工業の熱心に講究企圖せられて着々實績を表はしつゝあり、之に相關聯して大海産市場の設置が目睫の間に迫り、魚族の集散並に利用に懸命の努力が拂はれて居り、更に北鮮、北滿航路の實現に物資の移動夥しく、天與の好位置に我が青森の實力の現實化とに據りて其の商圏は無限に擴大せらるべく、其の前途や實に多幸であり本市産業の發達は測り知るべからざるものがある。

第二、會社

本市に於ける會社企業は世界大戰亂當時の我邦に殺倒せし好景氣に未曾有の活氣を呈し、之を一轉機

に爾來量的にも質的にも急速な發展を遂ぐるに至つた。

夫れが戰亂終局後の反動的不況、昭和二年の金融大恐慌、更に金再禁による經濟界の動搖、昭和六年本縣未曾有の大凶作、同年末突發せる縣下金融界の一大不祥事等の影響を蒙る事甚大で興亡變轉幾度となく繰り返へされはしたが、量的には依然として増加の趨勢を辿り、事業經營は大規模、大資本經營に膨脹を來して本市の産業振興のため不斷の努力を續けてゐるのである。
 今昭和八年末現在に於ける企業概況及會社名を擧ぐれば左の通りである。

會社

株式會社

會社名	會社目的	所在	創立時	資本金額	公稱額	拂込額
株式會社 青森商業銀行	銀行業	濱町	明治廿七年七月	1,500,000	2,150,000	
株式會社 青森銀行	銀行業	大町	明治廿九年六月	1,000,000	650,000	
株式會社 青森貯蓄銀行	銀行業	大町	明治卅二年十一月	500,000	1,210,500	
株式會社 青森貯蓄銀行	銀行業	大町	大正十年十月	500,000	250,000	
株式會社 青森造船鐵工所	造船業	舘貝町	大正七年十二月	200,000	180,000	
株式會社 青森鹽元賣捌所	調味料販賣業	米町	大正八年六月	100,000	50,000	

青森船製造株式會社	菓子製造業	安方町	大正八年九月	50,000	10,000
歌舞伎座株式會社	貸席業	鹽川町	大正二年五月	115,000	17,500
株式會社 青森常設館	演藝場營業	古川法	大正二年十月	41,000	26,250
株式會社 東奥日報社	新聞紙發行業	長島	大正八年八月	100,000	70,000
小館木材株式會社	製材業	舘貝町	大正九年三月	300,000	300,000
東北商船株式會社	汽船運輸業	新濱町	大正九年二月	500,000	150,000
株式會社 丸一商店	被服類販賣業	濱町	大正九年二月	50,000	30,000
株式會社 啓明社	印刷業	米町	大正九年三月	80,000	30,000
青森印刷株式會社	印刷製本業	寺町	大正九年七月	80,000	31,000
株式會社 松木屋吳服店	デパートメント ストア	新町	大正十年四月	100,000	100,000
青森 桎 株式會社	製材業	長島	大正十年七月	110,000	81,500
青森信託株式會社	信託業	寺町	大正十年八月	1,000,000	600,000
東洋海運株式會社	運輸取扱業	安方町	大正十年四月	110,000	5,000
横内金融株式會社	貸金業	濱町	大正七年十一月	100,000	83,500
株式會社 大印運送店	運輸取扱業	安方町	大正七年四月	100,000	62,500
青森運輸株式會社	運輸取扱業	新濱町	大正八年二月	100,000	56,000
青森製氷株式會社	製氷業	新濱町	大正九年二月	500,000	450,000

株式會社 東北タンク商會	燃料販賣業	濱町	大正十年十二月	500,000	175,000
青森起業株式會社	貸席業	大町	大正十一年三月	100,000	31,000
青森無盡株式會社	其ノ他ノ金融業	米町	大正十一年八月	100,000	119,000
青森新炭株式會社	燃料販賣業	浦町字橋本	大正十一年七月	100,000	50,000
株式會社 青森臨港倉庫	倉庫業	新安方町	大正十一年八月	600,000	479,100
丸東運輸株式會社	運輸取扱業	安方町	大正十三年八月	100,000	25,000
株式會社 三輪運送店	運輸取扱業	安方町	大正十三年九月	100,000	50,000
丸屋同勤株式會社	貸金業	濱町	大正十三年六月	50,000	17,500
二葉商事株式會社	委託賣買業	浦町	大正十三年九月	100,000	25,000
渡邊株式會社	貸金業	米町	大正十三年十月	100,000	47,500
株式會社 三上商店	罐詰製造業	新濱町	大正十三年十一月	10,000	10,000
青森商事金融株式會社	貸金業	長島	大正十四年四月	100,000	25,000
大坂商事株式會社	貸金業	博勞町	大正十四年五月	50,000	20,000
青森保善株式會社	貸金業	濱町	大正十四年六月	189,000	189,000
青森商興株式會社	金融業	安方町	昭和二年一月	5,000	5,000
青森運送合同株式會社	運輸取扱業	古川字柳川	昭和二年二月	100,000	140,000
福助足袋青森販賣株式會社	被服類販賣業	米町	昭和三年三月	50,000	10,000

青森冷蔵汽船株式會社	汽船運輸業	新安方町	昭和三年二月	50,000	50,000
株式會社 篠原商店	製紙業	造道字浪打	昭和四年六月	50,000	11,500
株式會社 青森館	演藝場營業	浦町字野脇	大正十一年三月	100,000	71,000
丸進青森履物株式會社	木製品製造業	新町	大正十一年十月	100,000	25,000
大東食品株式會社	罐詰製造業	造道字浪打	大正十五年四月	450,000	450,000
青森興業株式會社	演藝場營業	鹽町	大正十一年二月	55,000	55,000
株式會社青森スキー製作所	木製品製造業	浦町字野脇	大正十二年四月	50,000	50,000
株式會社 盛喜商店	織物類販賣業	米町	昭和五年四月	500,000	300,000
青森鮭鱒罐詰株式會社	其ノ他ノ食料品販賣業	濱町	昭和五年六月	100,000	50,000
株式會社 青森公益市場	市場業	古川字美法	昭和五年十一月	20,000	10,500
東北印刷株式會社	印刷製本業	新町	昭和六年五月	15,000	15,000
青森青果株式會社	果實蔬菜類販賣業	柳町	昭和六年七月	5,000	5,000
青森農術株式會社	肥料販賣業	柳町	昭和六年九月	4,000	4,000
共同罐詰株式會社	其ノ他ノ食料品販賣業	濱町	昭和七年六月	30,000	30,000
下北運輸株式會社	汽船以外ノ水運業	新濱町	昭和七年十月	3,000	3,000
油川乗合自動車株式會社	自動車運輸業	新町	昭和五年九月	10,000	10,000
青森三共木材株式會社	製材業	沖館字小濱	昭和七年十二月	50,000	50,000

合資會社

青森モリス金融株式會社	其他ノ金融業	古川	昭和八年三月	50,000	11,500
青果食品株式會社	果實類販賣業	寺町	昭和七年十二月	10,000	10,000
青森モリス勸業株式會社	貸金業	古川	昭和八年四月	10,000	5,000
千葉商事株式會社	貸金業	長島	昭和八年七月	50,000	11,500
株式會社 青森	デパートメントストア	新町	昭和八年八月	50,000	50,000
津輕急行自動車株式會社	自動車運輸業	新町	昭和八年十月	60,000	30,000
東北製菓原料株式會社	製粉業	博勞町	昭和八年十月	6,000	1,000
東北海陸運輸株式會社	海陸運輸業	新安方町	昭和八年十二月	50,000	11,500

會社名	會社目的	所在	創立時	公稱額	拂込額
青森ラムネ製造合資會社	清涼飲料製造業	寺町	明治三十三年三月	10,100	10,100
颯味噌製造合資會社	味噌醸造業	濱町	明治三十三年十月	10,000	10,000
青森郵船合資會社	運輸取扱業	新安方町	明治四十一年九月	40,000	40,000
健屋同勤者造林合資會社	林業	濱町	大正七年十月	7,000	7,000
合資會社 若井罐詰工場	罐詰製造業	新安方町	大正十五年一月	100,000	100,000
合資會社 成萬商店	木製品製造	古川字美法	大正十一年九月	7,500	7,500

相互保全合資會社	貨金業	浦町字橋本	大正十二年一月	六、〇〇〇	六、〇〇〇
合資會社 青森工業所	其ノ他ノ商業	大野字長島	大正十三年十二月	一、五〇〇	一、五〇〇
合資會社 柳谷洋服店	被服其ノ他ノ裁縫品製造業	大町	大正十五年四月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
商興合資會社	其ノ他ノ商土地建物賃貸業	大野字長島	大正十五年六月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
合資會社 立田商店	穀類販賣業	大野字長島	昭和二年五月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 高橋太陽堂	料理店(カフェー)	新町	大正十五年二月	八、〇〇〇	八、〇〇〇
合資會社 青森船舶給水所	其ノ他ノ販賣業	新濱町	昭和二年十月	四、五〇〇	四、五〇〇
合資會社 奈良商店	水産食料品販賣業	沖館字篠田	昭和二年十一月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
青森製紙合資會社	製紙業	造道字浪打	昭和三年二月	三、五〇〇	三、五〇〇
合資會社 齊藤鐵工所	農業土工用機械器具製造業	大町	昭和三年三月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
合資會社 後藤測量所	其ノ他ノ商業	浦町字橋本	昭和三年五月	一、五〇〇	一、五〇〇
合資會社 關準商店	肥料販賣業	安方町	昭和五年三月	五、〇〇〇	五、〇〇〇
合資會社 青森新開社	印刷業	米町	大正五年四月	四、七五〇	四、七五〇
合資會社 金柿崎商店	水産食料品販賣業	親貝町	昭和四年三月	一、二〇〇	一、二〇〇
合資會社 内山商店	機械器具販賣業	大工町	昭和四年十二月	四、〇〇〇	四、〇〇〇
井運送合資會社	運輸取扱業	安方町	昭和五年五月	五、〇〇〇	五、〇〇〇
山本商事合資會社	貨金業	沖館字篠田	昭和六年一月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇

合資會社 千葉鐵詰工場	鐵詰製造業	造道字浪打	昭和六年四月	六、〇〇〇	六、〇〇〇
合資會社 稻源商店	其ノ他ノ販賣業	古川字美法	昭和五年十一月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 久保商店	鐵詰製造業	濱町	昭和六年七月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 船水商店	織物販賣業	安方町	昭和六年四月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 金甚商店	物品賃貸業	大町	昭和三年一月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 稻田建具店	木製品製造業	米町	昭和四年十一月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
成田商事合資會社	木材販賣業	古川字美法	昭和六年四月	四、〇〇〇	四、〇〇〇
浪岡製麵合資會社	其ノ他食料品製造業	浦町字橋本	昭和六年四月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 佐々木商店	鐵詰製造業	造道字浪打	昭和六年六月	三、五〇〇	三、五〇〇
青森園藝種苗合資會社	園藝業	浦町字野脇	昭和六年九月	五、〇〇〇	五、〇〇〇
合資會社 南商店	織物被服類販賣業	安方町	昭和六年十一月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
合資會社 松尾商店	織物販賣業	米町	昭和六年十一月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
合資會社 鎌田商店	糸類販賣業	寺町	昭和六年十二月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
合資會社 糸澤硝子店	硝子製品販賣業	新町	昭和六年十二月	五、〇〇〇	五、〇〇〇
合資會社 三上商店	酒類販賣業	柳町	昭和六年十二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
合資會社 内田商店	酒類調味料販賣業	古川字美法	昭和四年八月	二、四〇〇	二、四〇〇
合資會社 八甲商會	藥品販賣業	新町	昭和六年十二月	四、〇〇〇	四、〇〇〇

合資會社	岡本運動具店	遊戲具販賣業	新 町	昭和七年三月	三,000	三,000
合資會社	舎櫻庭商店	織物販賣業	安方町	昭和七年五月	二,000	二,000
合資會社	鈴木商店	物品販賣業	安方町	昭和七年五月	一五,000	一五,000
合資會社	上星屋酒店	酒類販賣業	浦町字橋本	昭和七年二月	一,000	一,000
合資會社	憲仲野商店	陶磁器販賣業	安方町	昭和七年九月	一,500	一,500
合資會社	村田靴店	皮革製品製造業	博勢町	昭和七年一月	三,000	三,000
合資會社	逸見商店	木製品製造業	安方町	昭和七年十一月	三,000	三,000
合資會社	今三上商店	酒類販賣	古川字美法	昭和七年十二月	五,000	五,000
合資會社	魚上石川商店	水産食料品販賣業	新安方町	昭和七年九月	四,000	四,000
合資會社	金茂里	料理店業	濱 町	昭和八年五月	一〇,000	一〇,000
合資會社	石館藥店	藥品販賣業	大 町	昭和八年五月	一〇,000	一〇,000
合資會社	山本茶店	其他ノ食料品販賣業	大 町	昭和八年七月	三,000	三,000
合資會社	坂井家	料理店業	濱 町	昭和八年八月	五〇,000	五〇,000
合資會社	街の酒場	料理店業	新 町	昭和八年十月	五,500	五,500
合資會社	青森魚糺製造所	水産品製造	造道字浪打	昭和八年十月	三〇,000	三〇,000
合資會社	室岡商店	雜貨類販賣業	浦町字橋本	昭和八年十月	五,000	五,000
合資會社	福岡商店	燃料販賣業	新濱町	昭和八年十二月	二,000	二,000

竹の湯合資會社 貨席業(湯や) 堤 町 昭和五年十一月 四,000 四,000

合名會社

合名會社	若由商店	水産食料品肥料販賣業	新安方町	明治四十三年三月	一三〇,000	一三〇,000
合名會社	小田仁商店	水産食料品販賣業	新安方町	大正十年十二月	二,000	二,000
合名會社	松屋洋服店	被服其ノ他ノ裁縫品製造業	大 町	大正二年七月	三,000	三,000
合名會社	三浦博盛堂	藥品類販賣業	浦町字野脇	大正十四年十二月	五,000	五,000
丸正運送合名會社		運輸取扱業	浦 町	大正十五年九月	六,000	六,000
合名會社	金原商店	調味料販賣業	大 町	大正十五年十二月	五〇,000	五〇,000
合名會社	大場商店	水産食料品販賣業	安方町	昭和二年十月	一,四〇〇	一,四〇〇
合名會社	丸青硝子店	硝子製品販賣業	大 町	昭和四年十月	五,000	五,000
細川合名會社		質屋業	博勢町	昭和五年七月	一〇,000	一〇,000
合名會社	本中村與助商店	調味料販賣業	米 町	昭和七年四月	八五,000	八五,000
西澤兄弟合名會社		漁撈業	長 島	昭和七年十一月	一〇,000	一〇,000
合名會社	彌中傳商店	果實類販賣	寺 町	昭和七年十二月	五,000	五,000
合名會社	堀内商店	果實類販賣	新 町	昭和八年一月	五〇,000	五〇,000

三藤合名會社	土地建物貨貸業	濱町	昭和八年四月	三,〇〇〇	三,〇〇〇
合名會社 山須藤商店	雜貨類販賣業	長島	昭和八年五月	三,〇〇〇	三,〇〇〇
合名會社 明治商行	菓子製造業	長島	昭和八年七月	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
合名會社 島圓商店	味噌製造販賣	米町	昭和八年九月	九,〇六一	九,〇六一

第三、商業組合

都市中小商工業者現下の窮狀は財界の不況深刻に基く反面に産業組合の異狀なる進出にも原因するのであるこの見解の下に、商工會議所が中心となつて全国的に反産運動が叫ばれてゐるが、元より組合の進出による影響も見逃がしわけにはゆかないが、夫れよりも業者自身が經營の根本にも重大な欠陥の伏在に職由するこも看過してはならないのである。

原因は兎に角も種々の打撃に窮迫せる都市の中小商工業者を急救するの必要に迫られて遂に商業組合法が生れ、目的が業者の救済だけに各方面より多大の期待が懸けられ設立希望の向は漸次増加するの模様で、本市に於ては凡に認可を得て營業を開始せるものに左記組合がある。

商業組合		事務所	
名	稱	名	稱
青森雜貨	商業組合	青森市大字寺町	青森洋服
			商業組合
			青森市大字米町

青森市薬工品移出商業組合 青森市大字安方町 青森市寫眞商業組合 青森市博勞町

第四、商工會議所

市制施行前の明治二十六年十月の創立で昭和三年商工會議所と改稱し、同年十月現在の所に事務所を移轉し専ら商工業の刷新改善に努力せられ各種施設をなすと共に交通運輸の調査、主要物産の紹介等商工業の助長發達に貢献しつゝある。

砂糖麥粉
 角天胡麻
 飴蒟蒻粉落花生
 素麵古新聞其他雜貨

青森市大町六丁目

冬吹田銓三郎商店

電話二四〇番
 振替口座東京一八五三六



ライジングサン石油株式會社代理店

青森市濱町九十四番地

株式會社 東北タンク商會

社長 横内忠作



電話(周)三三〇七番

出張所 弘前市驛前(電話八七二番) 八戸市小中野町(電話一二九番)
秋田縣大館町(電話八番)

青森市濱町九十四番地

大同生命保險株式會社代理店
日本火災保險株式會社代理店

横内忠作

電話(周)三三〇七番

日本ゼネラルモーター株式會社特約店

青森市濱町五十一番地

シボレイ號
オータラント號
ポントアツク號

横内モーター商會

電話(一)三三三八番

東京市上野池ノ端

御旅館 孔 雀 莊

下電 谷(周)六六三九七八番

◆砂糖。麥粉。雜穀。卸商
◆疊表。緣布。其他一式

◆日本蠟燭製造所特約店
◆大同燐寸株式會社代理店
◆洗濯石鹼縣下一手販賣

◎明治生命保險株式會社 青森代理店
◎明治火災保險株式會社

青森市米町拾七番地

合名 會社 中村與助商店

電話番號 百三十八番

◆宇治銘茶

◆特製ほうじ茶

◆茶器一式

青森市新町

中村茶店

電話百六拾八番

三井物産株式會社石炭部專屬賣炭所
 磐城セメント株式會社青森秋田山形代理店
 セメント防水劑ウオータイト代理店
 東京瓦斯コークス代理店

青森市大町四丁目

木原屋 **サ** 佐々木彦太郎商店

センターストアア東北一手販賣所 電話 八四七〇八番番
 高級△煉炭製造販賣所 電話 八四七〇八番番
 三井生命保險株式會社代理店 電信略號(アヲモリ、ササヒコ) 番番番
 大正海上火災保險株式會社青森中央代理店 青森郵便局私書函第二號

營業種目

石油 輕油 ガソリン 重油 機械油

三菱商事株式會社燃料部
 青森縣一手特約販賣店

青森市安方町一丁目

本 田 中 商店

店主 田中敬三

電話 二四九番 三三一番

日本海上保險株式會社青森代理店
 大阪富田商會青森代理店



株式會社

青森市新町

角弘銅鐵店青森支店

電話 二八六九番



株式會社

青森市浦町

角弘銅鐵店自動車販賣部

電話 一一二一七番

品質優良・價格低廉・在庫豊富

營業種目

諸機械工具類各種
調帶・塗油・船具各種
漁網・漁具・ロープ各種

主ナル代理店

三菱商事株式會社
木代發網株式會社
東京製網株式會社
發網製造株式會社
日本ペイント株式會社
關西ペイント株式會社

△函館製網船具株式會社青森支店

青森市安方町百四拾八番地
電話 四六九番・五八七番
電略 (ウロコ) 又ハ (ウ)

皆様の
最も信頼するに足る
印刷所

青森市寺町



青森印刷株式會社

電話四二〇番

活版、石版印刷 意匠 圖案
洋式帳簿裝綴 荷札紙器製造

第四章 工業

第一、概 説

本市は由來漁、農を基本産業にさ、やかな生計を営みし海濱の一寒村に過ぎなかつたのであるが、天然的に交通上優秀なる地利を占めてゐるので其の發達も著しく、我國北方に於ける客貨集散上の要津となつたのである。

故に本市の消長は常に港灣を背景とし、住民の生業も亦之に倣ひ先づ交通關係が商業の繁榮を促し、夫れが永らく商業を以て起つただけに工業の沿革に付ては甚だ微々たるものがあり、管内需要を目的の家内工業に過ぎず、只藩政時代より連綿として榮へ名産として今日縣外へ移出せられつ、あるものに僅かに味噌醸造業があるのみである。

其の後時代の進運に市民の自覺とは具体化して、明治二十三年初めて製材工場の設立となり、爾來交通機關の發達、金融制度の普及、更に豊富なる電力の供給とに工業界は著しき活況を呈し、從來の手工工業が機械工業に小規模のものは大規模、大資本の下に經營せらるゝ様になり、各種工業の種類と數量とは年々共に増加を來したのである。

更に交通機關の擴張整備に伴ひ物資の集散日を追ふて著しく、對岸北海道、樺太、沿海州等より工業

原料が極めて容易に且つ廉價に求め得らるゝので生産方面に於て異状なる進展を遂げ、茲に永らく消費都市として發達して來た傳統が打ち破られ、東北に於ける産業界の中樞都市となり一躍生産都市ともなつた譯である。

今茲に最近十ヶ年間に於ける本市の總生産額を検討するに農産物は漸く邊境農家の自給に止まり、水産及畜産も亦一部業者の生活資料たるに過ぎざる状態で、獨り工産品は常に總体の九割以上を占め、就中鮭、鱒、鱈の如き國際的工業品もあり、竹輪の如き全國的に有名なるものも製産せられ、其の他幾多有名なる特産品を産出せらるゝ様になつて、工業界の前途や實に洋々たるものありて將來益々増加するの趨勢にある。

生産總額

年次	實數						
	農産	畜産	水産	鑛産	工産	計	製材合計
大正十三年	109,254	259,348	32,341	—	4,764,253	5,164,196	—
大正十四年	111,721	277,421	34,513	—	5,133,156	5,517,001	—
昭和元年	97,850	221,455	44,279	11,960	7,444,187	7,779,731	—

昭和二年	231,637	231,071	131,965	10,340	7,046,231	7,631,245	—
昭和三年	238,681	247,414	109,697	13,060	7,39,337	7,838,179	—
昭和四年	234,631	271,789	444,494	5,790	9,954,293	10,909,977	—
昭和五年	177,690	272,266	283,251	5,166	7,15,453	7,853,866	—
昭和六年	85,931	228,183	270,826	1,500	6,666,846	7,233,275	—
昭和七年	172,200	188,509	35,807	147,900	7,013,114	7,837,630	—
昭和八年	184,214	233,345	76,933	19,200	8,505,753	9,649,354	—

比例

年次	例						
	農産	畜産	水産	鑛産	製材	合計	工産
大正十三年	21.2	50.5	0.61	—	—	92.22	—
大正十四年	22.04	45.1	0.63	—	—	92.82	—
昭和元年	11.26	28.4	0.57	—	—	95.18	—
昭和二年	22.91	30.3	1.60	—	—	92.32	—
昭和三年	30.07	31.6	1.39	—	—	92.22	—

昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
二・〇六	二・二六	一・一八	二・二〇	一・九一
二・四九	三・四七	三・〇〇	二・四〇	二・三一
四・〇八	三・六一	三・七三	四・〇三	七・四三
〇・〇五	〇・〇六	〇・〇二	一・八九	〇・二〇
九一・三二	九〇・六〇	九二・〇七	八九・四八	八八・一五

三八

第二、工業の現状と将来

本市は水産都市として對岸北海道、樺太、更に沿海州方面に對する漁業貿易の策源地たる特色は工業に反映して、工産額は生産總額中常に九割以上を占めて居るのは前述の通りである。

而して斯の如き工業の隆昌を來せる最大原因は港灣を背景とする食料品工業の勃興である、従つて食料品工業は各種工産中第一位にあるは勿論、最近では五割以上を占めて居るのである、更に亦其の三分の二以上は實に水産加工品であつて、工産全体の近來異狀の發展を遂けたるは實に水産加工品なりと稱して憚からぬのである、斯様に水産加工工業は逐年異狀の發達を遂けつゝ、あることは特に注目に値するものがある。

之れに次ぐものは、主として漁場行々魚族處理上に供せらるゝ桶、樽、木箱等の製作品を含む木製品

(製材を除く)工業である、第三位は輸入貿易品として屢次埠頭を賑はしたる南洋産の「パラフィンワックス」を原料とせる洋蠟燭が九割以上を占むる化學工業品である、更に本市特産の國際的商品鮭、鱒等魚類罐詰用罐製造を中心とする金屬製品の順である、斯の如く本市に於ける諸工業が港灣の恩恵に浴し、港灣利用に重點を置く工業が益々旺盛なるべく運命づけられて居ると思ふのが妥當である。以上の觀察に依り我が青森市は水産加工工業を中心とする工業都市としてのみ將來に輝ける光明と存立の理由を持ち可能性がある、而して此の運命線を突進するに當り何をさしおいても容易に大工業都市たらしめ得る諸施設の完備を期する必要がある、其の最も主要なるものに築港修築擴張がある、幸に目下工事中なるを以て竣成の暁には必然的により以上に大型船舶の出入を見るべく、更に貨物の陸揚げに要する經費の節減ともなりて百貨の交易益々旺んなるべく、就中對岸の北海道、樺太、シベリヤ方面等に特殊的地位にある本港へ益々多量に安全且つ手軽に同方面より入貨を見るべき状態にあるため、工業原料は容易に自由に得らるゝを以て將來の發展は期して待ちべく、其の結果商業も亦繁榮し遂には現存する凡ての機能に活氣を興ふること、もなりて、本市の發展路は實に港灣にのみ存すると謂ふべく、之を利用するの餘りにも容易にして水産加工工業中心たる本市の將來は益々囑望するに足るのである。

工 産 額

年次	實 數						
	金屬並機械器具類	化學工業品	木製品	飲食料品	被服並身ノ廻リ品	印刷業	雜工業
大正十三年	二四二,〇一八	八六五,四四五	一,〇〇八,〇三九	一,五四七,一八五	二八〇,八一九	八二〇,七八七	四,七六四,二五三
大正十四年	二四二,七四六	九〇三,四七五	一,二五三,八二七	一,七九三,〇四七	二四一,七八六	六八九,八三九	五,二二三,一五六
昭和元年	三三〇,七五五	六七二,七七四	一,三三六,〇九九	三,七八〇,六四三	二四七,一七七	三五六,九六〇	七,四一四,一八七
昭和二年	三五〇,四九九	六五四,三六一	一,五二五,六〇五	三,二九九,五六一	三三四,四九五	三〇一,七四五	七,〇四六,二三三
昭和三年	三二六,七五八	六二八,一三五	一,四二〇,一九六	三,三六八,四〇五	四二六,〇二八	四三一,四〇五	七,三九三,三七
昭和四年	一八〇,三二二	五三三,一五七	一,二五六,九四二	六,六六〇,一九〇	五九九,九八一	二六一,三三六	九,九五四,二九二
昭和五年	二五七,二九三	六八六,三七七	一,二四九,七八一	三,六〇四,三〇〇	五五四,七六〇	四二二,四七四	七,一五,四五三
昭和六年	五七七,九九九	五四三,四九八	一,〇五四,八二四	三,三六〇,六四〇	四一三,二五〇	四二七,一〇八	三〇九,五三七
昭和七年	七六八,六九一	五八八,四〇五	一,一〇八,一〇〇	三,四一五,〇五六	四〇五,一六三	二九二,四八一	七,〇三三,一四
昭和八年	一,三三〇,七〇一	四一九,七七八	一,一七一,八七五	四,四六七,一九七	四三五,八九一	三〇四,九九七	八,五〇五,七五二

比

金屬並機械器具類
化學工業品
木製品
飲食料品
被服並身ノ廻リ品
印刷業
雜工業

例

食料品工業

年次	實 數						
	總額	水産加工品	其ノ他	水産加工品	其ノ他	合	
大正十三年	五〇八	一八・一七	二一・一六	三二・四八	五・八九	一七・二二	
大正十四年	四七三	一七・六四	二四・四六	三五・〇〇	四・七二	一三・四五	
昭和元年	四四六	九・〇七	一八・〇二	五一・〇〇	三・三三	四・八二	
昭和二年	四九七	九・二八	二一・四八	四五・九八	四・四六	四・二九	
昭和三年	四三八	八・六九	一九・六四	四六・五九	五・八九	五・九八	
昭和四年	一八一	五・二六	一二・四三	六六・九〇	六・〇四	二・六三	
昭和五年	三六二	九・六五	一七・五五	五〇・六五	七・八〇	四・三二	
昭和六年	八六四	八・一三	一五・七七	五〇・二六	六・一八	四・六三	
昭和七年	一〇・九六	八・三九	一五・八〇	四八・七〇	五・七八	四・一七	
昭和八年	一四・四七	四・九三	一三・七八	五二・五二	五・一三	三・五八	

大正十三年

一,五四七,一八五

二四二,七五七

一,〇〇四,四二八

一六

八四

年次	工場数	職工数	製産額
大正十四年	1,793,047	221,703	1,171,744
昭和元年	3,780,643	2,583,397	1,197,246
昭和二年	3,239,561	1,880,600	1,358,961
昭和三年	3,368,405	1,860,328	1,508,177
昭和四年	6,660,120	5,721,989	938,101
昭和五年	3,604,310	2,658,444	945,896
昭和六年	3,360,640	2,356,705	1,003,935
昭和七年	3,415,056	2,372,768	1,042,288
昭和八年	4,467,197	3,195,218	1,271,979

第三、主要工業の状況

○製材業 斯業を営む工場、法人組織のもの六、個人経営のもの十三、計十九あり、資材消化力年間約百萬石を擁して當市工業に於ける最も樞要なる地歩を有して居る。

由來我青森縣は山林國として全國でも有名であり、就中當市の勢力圏内にある津輕半島の森林は本邦に於ける三大美林としてあまりにも有名であり、更に下北半島にも豊富なる「ヒバ」材の國有林を控へ

此の兩半島より出荷せらる、資材は是非青森港を経由すべき地理的關係にあり、その上北洋材の搬入容易なる地利を有するを以て夙に製材業の創設を見、特に歐洲大戰亂當時の好況に一段の進展を來したのである、其の後財界反動期に遭遇して甚大なる影響を蒙つたのであるが、關東大震災復興期に際しては工場の新設される等大に生産率の増進を示し頽勢を挽回して其の前途の多幸を約したのに、昭和時代の財界恐慌の餘波は木材界をも其の埒内に没入せしめ深刻なる不況に操短の止むなき状態に陥つたのである。

其の後一喜一憂に數年を経過し愈々昭和七年を迎へて下半年より所謂インフレ景氣に好轉の曙光を見出しに至りて業界も再び明るさを示し、夫れに特産「ヒバ」材の建築用材として他に其の比を見ざる耐久力が建築界の認むる所となりて、主に鐵道枕木として全國各地よりの注文殺倒し、更に最近新興滿洲國より大量の注文あるありて商勢圏は著しく擴大せられ將來の隆昌は期して待つべきものがあらう。昭和八年の實績製材數量約五十萬石にして資材の消費高約七十萬石と算せらる。

最近に於ける製産額左の如し

年次	工場数	職工数	製産額
昭和元年	15	615	2,703,887

昭 和 二 年	昭 和 三 年	昭 和 四 年	昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一九
七九五	七六三	六六四	六五二	六〇九	六七二	六七四
四、一〇五、七二六	三、九五〇、一二八	二、九四二、八一八	二、五五一、六〇三	二、〇五三、七〇一	二、六二三、六九四	三、〇三七、三〇一

四四

國産材の權威
青森特産 **ひば材の御愛用を推奨いたします**

ひば材は耐久力、抗壓力、負擔力、彈性等總べて木材としての最必要な條件を悉く具備した優良材でありますから、各種の用材殊に濕氣の多い爲に耐久力の強大なることを必要とする我國の建築には最適當して居ります。

ひば材は前記の様な特性がありますので土臺、柱、床組、鐵道枕木、橋梁、電柱、鑄木、車輛、船舶浴槽、水槽、桶、樽、漆器、曲物、木羽氈、土工用材等に最適當して居ります。

ひば材は木理が繊細美麗で、外觀及材質共に檜に類似してまことに上品でありますから住宅の内部用

營業課目

(本 社)
特産ひば材、北洋材及各種製材
製函及製樽、原木販賣
(支 店)
銘木、唐木、天井板、床廻材一式
諸 建 築 材 料 販 賣



小館木材株式會社

本社青森市蜷貝町一三〇 電話 二八七番
支店青森市濱町五丁目角 電話 一九番

青森特産ヒバ材專業

青森市浪打

木 大湊木材株式會社

電話 八三二〇三番

榻各種枕木
榻橋梁用材
榻建築用材

特ニ材料豊富規格ノ正確ナルヲ誇リト致候

材國マハ 産ク産ハ

各秋田種 製材販賣

會合名 藤田組長木澤製材所

秋田縣大館町驛前 電話 一五一番

青森特産 製材販賣

會合名 藤田組長木澤製材所 青森工場

青森市浪打七三番地 電話 四四〇番

土木建築請負業
木材製材業

櫛

材

縣

產

特

品

勉

強

青森市浦町

田成田文吉

成文請負部

成文木材部

電話事務所
本宅所
一八六一
三六一
五沖館

坂本製材製柱工場

青森市浦町字橋本
電話一、四三五番

坂本周八郎

青森市長島一、二六
電話五八二番

營業種目

青森特産
ひば材 建築、建具材
其他内地材 枕木、柁類



青森製材製柁株式會社

青森市長島町

電話 八四二番
一、六〇七番
電略 (マサ) 又ハ (マ)

各種荷造箱

專業

青森市蜷貝町百三番地

青森製函工場

電話 七五五番



特産ひば割箸



青森市箸副業組合

消毒割箸

事務所 青森市役所勸業課内

材、例へば天井廻り椽、甲板、洋式建築のドア、窓框、腰板、其の他和洋家具、陳列棚等に最適當して居ります。

ひば材は耐久力が殊に強大で容易に腐朽しませぬ、其の實例は澤山あります、例へば青森及石川縣下の神社佛閣及住宅などには、三、四百年以上を經過して尙且、屋外の部分にさへ殆ど變りのないものが澤山あります。

又名古屋城に次ぐ天下の名城と云はる、備後福山城の天主閣並に藤原三代榮華の跡を今にとゞむる奥州平泉の金色堂及び經藏にも此のひば材が用ひられ、前者は建築後三百有餘年、後者は八百二十有餘年を經過して今尙少しの腐れもないことが最近發見せられ世に驚嘆せられて居ります、又鐵道省の調査研究に依りますと、枕木の耐久力は平均檜十三年、栗は八年、防腐劑注入の潤葉樹は十一年であります、ひばは十五年を經過しても尙充分に使用が出來ると云ふことであります、又杉電柱の耐久力は普通防腐劑を注入したものでさへも二十年位に過ぎませんが、「ひば」は三十年を經過して尙使用に耐へてるものが澤山あります、又ひば材を使用した橋梁の中には三十餘年を經過して尙依然たるものが尠くないのであります。

ひば材は以上の様な優良材なるに拘らず最近値段が著しく格安になりましたから、此際是非御試用を御願ひ致します。

○鮭鱒罐詰工業 本業は製材業と共に本市に於ける主要工業をなすもので、最近にあつては近代的設備の完整せる十指の工場を有するに至つた、歐洲大戰中の財界好況時代に勃興を見た新興産業であつて、當時は主として沿岸漁獲に係る雑魚介類を原料に製造をなし、又一部北洋魚類を原料としたが何れも國內消費を主眼とする製法に止まりて生業規模並に生産額に見るべきものがなかつたが、最近に至つて外國輸出品として鮭、鱒を主とする北洋魚族の製造をなし、大量生産に精進した爲其の産額も年と共に増加し、本港對外貿易品の大宗となり實に國際的工産品ともなるに至つた、現今にては先進地の米國産を凌駕して世界市場に獨歩の地位を獲得し、英國、佛國、白耳義、伊太利、和蘭、南亞濠洲、印度等々南米を除く、殆んど各國に輸出の盛況を呈し世界的商品として確實なる商權を掌握するに至つた。

試に既往十ヶ年間に於ける罐詰製造額を示せば左の如し

年次	製造場數	職工數	生産額
大正十三年	1	1	一二六、七六九
大正十四年	1	1	三五三、一七五
昭和元年	1	1	二、三七九、二七七

年次	製造場數	職工數	生産額
昭和二年	8	六二一	一、四三七、六〇〇
昭和三年	8	八五六	一、三五二、四四八
昭和四年	8	一、四二一	四、四五八、七五八
昭和五年	9	一、二八二	一、七四二、一三六
昭和六年	10	一、四三六	一、六五六、六二四
昭和七年	10	一、六五七	一、六七五、五二二
昭和八年	10	一、六六二	二、五五三、七八〇

即ち大正十一年に於ては生産額僅かに八萬九千九百九十八圓に過ぎなかつたが、五年後の昭和元年には實に二百三十萬圓を突破し、本邦業界に於ては一樞要地として一般の認むる所となつた、超えて同四年には更に四百四十萬圓以上となり、本市罐詰製造史上新機軸を作るに至つた。

かやうに著しき發達を示したのは當業者が舊來の内地需要品の製造より海外市場向製品の生産に自覺し、大正十五年に於ては當市に大東食品株式會社罐詰工場の設立を見たのである、該會社は當港船入場に臨みて冷蔵倉庫を建築し、主として自社所屬工場の原料たる北洋魚族の冷蔵保管の傍ら冷凍事業をも營み引續いて事業を開始した、日魯漁業會社冷蔵庫並に青森製氷株式會社冷凍倉庫と共に當港冷凍事業の覇權を握り、當港罐詰製造業の進展と極めて密接なる關係を有するに至つたのである。

大東食品會社工場以外のものであつても冷蔵業の勃興に伴ひ原料の供給至便となり、何れも事業の擴張販路、就中海外市場への進出に依り益々活況を示しつゝある、素より北洋漁場に對し有利なる根拠地たるの地利を有する當港に斯業の發達を見たのはむしろ當然のこゝであると共に今や當港に於ける斯業は益々發展し、本邦業界に一大脅威を感じしむるに至つた、斯の如く昭和四年に於て一大飛躍をなしたのは原料魚族の豊漁に歐洲方面に於ける本品聲價の昂進に伴ふ需要増加に基くものであつて、其の前途の益々多望を約したのに、同五年に至つて急減したのは原料魚族の不漁に伴ふ影響ミアラスカ、加奈陀方面は稀なる豊漁を見、歐洲方面に伸展して著しく邦品の進出を壓迫した爲に勢ひ製造を差控へなければならぬ結果に陥つたのである。

當青森港は對岸に世界三大漁場の一たる北海道を控え、更に樺太沿海州「カムチャツカ」等に近く隨つて鮮魚の集散地として他の追従を許さぬ潛勢力を有し、殊に北洋魚族の集散は天下に冠たるものがある、而して陸岸には鮮魚の冷凍、冷蔵に關する設備整然として生産額の高低あるは當然にして、本市に於ける斯業も北洋漁場の不漁に近年は過ぐる昭和四年に遠く及ばずとも最新式の機械を据付け近代設備の完整せる十ヶの工場にて一日實に一萬箱（一箱一ポンド入四十八ヶ）以上の生産能力を有し今は組合組織をなし製品の品位向上、規格の統一に最大努力を拂ひ斯業の發展隆昌に精進しつゝあるから將來世界市場の獨歩の地位を獲得するは敢へて至難の業にあらず、斯業の前途實に多端なるものがある。

がある。

○焼竹輪 鮭、鱒罐詰と共に本市に於ける代表的水産加工品で新興産業の一つである、元來竹輪の先進地は三陸方面であるが、同地方に於ける原料鮫の漁期は短期なるに反し、本市は貨車航送が實施せられてから原料の供給に非常なる便益が得られ、且つ冷蔵庫の建設に依つて原料及製品を調節することが出来る様になつた關係で、竹輪製造等が近年長足の進歩を示したのである、先年大阪市に開催せられた全國食料品々評會に於ては、食料品全体を通じて三等賞に入賞する等今や先進地を完全に凌駕し、鮭、鱒罐詰と共に日本一を誇るに至つたのである、現在は十指を算する工場ありて一日の生産能力實に一千五百函（一函一本約三十匁程度のもの二百四十三本）を突破するの盛況にある需要地は大坂方面を主とし名古屋地方に及び大工場や家庭での食用に歡迎され、更に都會名物「オデン」の原料に用ひられ好評を博しつゝある。

茲に最近に於ける製造額を示せば左の如し

年次	生産	年次	生産
大正十三年	一一五、九六〇 <small>円</small>	昭和元年	二〇四、一二〇 <small>円</small>
大正十四年	二六八、一二八	昭和二年	四四三、〇〇〇

昭和三年	五〇七、七八〇	昭和六年	四八二、〇一〇
昭和四年	八七〇、五〇〇	昭和七年	四六五、四七〇
昭和五年	六七五、六〇〇	昭和八年	六四一、四三八

五〇

○津輕味噌 本市が生む特産品として最も古き歴史を有する工産品である。

元來味噌は全國的工産品たる關係で名産として餘り響が薄い、本市は北海道、樺太と特殊的關係があり、同方面漁場の發展が本縣より出稼漁夫の多數入り込む様になり、それが動機に津輕味噌の需給關係が生じたのである。

夫れか一般道民にも歡迎されて今日遂に全道各地で消費せられて名聲を博して名産たる所以を爲してゐるのである。

然して最近はその原料たる大豆を北海道又は滿洲に仰いであり、製品たる味噌の大半は北海道、樺太方面に移出し賞味されてゐるのは一見頗る奇異の感に打たれざるを得ぬものがある、原料と需要關係から商業的に觀るときは、減少するのが當然の如く考へらるゝも、事實は反對に年々向上するの奇現象を呈しつゝ、ありて、茲に工業製品に與へられたる特權の偉大さが肯定せらるゝのである。

之は一面業者は良く嗜好の變遷に留意し、消費者主眼にその製法に於ける技術の改善、販賣方法の研

創業………弘化四年

津輕最上

味噌

青森市米町

渡邊佐助商店

電話一四八番



商標登録
三津軽味噌醸造元
 縄蒔吹藁工品移出商

青森市米町七丁目

島圓商店

電話 五五
 五貳番 五參番

浅野セメント販賣代理店
 浅野物産建材部代理店

津軽代表
 天然味噌の白眉

最上 **三** 津軽
味噌



とてもおいしい

醸造元 **三村元喜四郎**

だしの効く三年味噌

青森市博勞町
 電話 二三〇番



最上

醬油
味噌



釀造元
青森市榮町

和 田 與 作

電話九〇七番
甲 振替 仙台 八二番

東京火災保險株式會社
大成火災海上保險株式會社
仁壽生命保險株式會社
代理店

天 然 釀 造

力 滋 養 味 噌

藁 工 品 輸 出 商

鎌 田 重 吉

青 森 市 米 町
電 話 一 〇 四 番

味 噌 製 造 所
電 話 二 二 四 番

先づ健康は味噌汁から……

青森鐵道購買御用

味噌醸造業

青森市浦町

阿保定吉商店

電話 九五一番

三印竹輪製造
製氷冷蔵庫

海產物商

石

沼田磯吉商店

青森市堤町五十八番地

電話 園園一八二番

電略 (又マ夕)又ハ(又)

振替口座東京三三三三四九番

運送部
運送合資會社

代表社員 沼田磯吉
青森市浦町 電話 一五四番

海産物
問屋

青森市安方町



根市兼次郎商店

青森局私書函第壹號

電話 五〇四番
電略 (ネ一)又ハ(ネ)

罐詰
製造業



青森市相馬町

根市罐詰工場

電話 八五番

究等鋭意斯業の發展向上に最善を盡した結果に外ならずして、北海道・樺太の二大消費地を對岸に持つ斯業の前途は益々多幸なりと言はざるを得ない。
試に既往に於ける生産高を示せば左の如し

年次	工場數	職工數	製産額
昭和元年	一〇	五五	三三六、六一五 <small>円</small>
昭和二年	一〇	五九	三二三、九二五
昭和三年	一〇	五五	三一〇、一九八
昭和四年	八	五二	三三九、二四一
昭和五年	九	五六	三〇一、四〇八
昭和六年	八	五一	三一〇、五三〇
昭和七年	八	五三	三二七、九六七
昭和八年	八	五三	三三四、八一四

主要工産物生産高

種別	金 屬 並 機 械 器 具 類									
	建築用金具類	銅鋼器	製鋼罐	鍍板鍍力細工	金銀製品	車輪	船舶	機械類	スッキ	其他
昭和八年	三二、八五〇	三、八二〇	一、〇六八、〇三二	二九、〇〇〇	三、五五〇	八、五〇〇	一五、九五〇	一五、〇〇〇	一九、〇〇〇	一、二三〇、七〇一
昭和七年	三〇、七三〇	三、三八〇	六一九、二〇八	二〇、一四〇	三、五七四	八、九〇〇	二〇、四五四	五、〇〇〇	五、〇〇〇	七六八、六九一
昭和六年	三六、七五〇	三、五〇〇	四三五、五三七	一五、五〇〇	二、五〇〇	一七、五〇〇	一六、九六一	四一、二五〇	四、五〇〇	五七七、九九九
昭和五年	三七、九〇〇	三、五〇〇	一三三、六四三	一四、五〇〇	二、八五〇	二〇、五〇〇	七、八〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二五七、二九三
昭和四年	五五、三八五	四、四六一	—	一三、〇三三	一、七五〇	三三、七〇〇	一八、四八〇	一〇、五〇〇	五三、〇〇〇	一八〇、三二二
昭和三年	一〇四、三〇八	八、三四〇	—	一一、八五〇	三三、五〇〇	九三、五二五	三三、五三五	五〇、九〇〇	—	三二六、七五八
昭和二年	九九、八四九	六、四〇〇	—	一一、二二二	三三、七七一	一〇〇、二二〇	一六、八九〇	一〇一、四八七	—	三五〇、四九九
昭和元年	一一九、五四五	二四、六〇〇	—	九〇、五〇〇	一四、一六〇	九、四五〇	一六、五〇〇	三四、〇〇〇	—	三三〇、七五五
石 灰	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一五、三六〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一五、六五〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一八、二〇〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二〇、六一〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一八、一〇〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一三、九六〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一四、四〇〇
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	七、五〇〇

種別	木 製 品						化 學 工 業								
	鐵道枕木	桶樽類	桁架類	建築指物	箱器具類	履物素地類	其他	計	其他	燭燭	米及染物	晒及染物	其他	和紙灰	貝灰
昭和八年	四九三、二八四	八六、〇三〇	九〇、九五六	一六五、五〇〇	一九八、三五〇	一一五、三五〇	二二、四〇五	一、一七一、八七五	四一九、七七八	五五、三九三	一九、八七〇	八三、三〇〇	二二、八二五	一九、三〇〇	一三、五〇〇
昭和七年	四四〇、五四〇	八五、三九〇	六五、四八〇	一六六、三七〇	一九六、八〇〇	一三七、五五〇	一五、九七〇	一、一〇八、一〇〇	五八八、四〇五	五八、九七七	一八、六二四	九九、七八九	三三、二七八	二四、〇六七	一八、五〇〇
昭和六年	三九七、九九四	八五、一五〇	五四、五二五	一六五、二五〇	一九七、四二五	一三六、七五〇	一七、七二〇	一、〇五四、八二四	五四三、四九八	六六、九〇〇	一七、四四八	二六、三六〇	二二、八五二	二四、四三八	一七、三〇〇
昭和五年	四四五、〇九七	一三二、一五〇	六三、〇〇〇	一九四、〇六〇	二二二、二六四	一五二、九六〇	三二、二五〇	一、二四九、七八一	六八六、三七七	三二、一三〇	二四、四九七	二七、四四〇	四三、七九〇	二五、九五〇	一八、七四〇
昭和四年	三三四、〇〇〇	一八四、九〇〇	四四、六八〇	二〇四、二八〇	三〇八、六八六	一三三、七〇〇	二〇、六九五	一、二三六、九四三	五三三、一五七	二二、八三五	二八、三二〇	六八、〇〇〇	三九、一九七	二五、六三五	二二、〇八〇
昭和三年	三七七、一六一	一九四、三五五	一一一、三六九	二八一、二二〇	三五〇、六九一	七四、七七〇	二九、六三〇	一、四一〇、一九六	六二八、一三五	四〇、三二二	—	九六、一三〇	四〇、五四〇	四一、七三四	一六、六五〇
昭和二年	五一七、六五七	一九一、五六九	九三、六五五	二八五、八二六	三三二、六四九	七二、九九八	三〇、二七一	一、五二三、六四五	六五四、三六一	四〇、八九二	—	一一、四四〇	四三、三〇〇	五〇、六一〇	一八、五〇〇
昭和元年	三三三、五一五	二三四、九〇〇	九三、四九九	二七八、二〇〇	二九五、九二五	八二、八〇〇	一七、三〇〇	一、三三六、〇九九	六七二、七七四	四九、〇五〇	—	一五〇、六〇〇	四三、二二〇	三三、七〇〇	三、七〇〇

身及服被				品料食飲										
靴	メリヤス	合羽	其ノ他仕立物	洋服類	計	其ノ他	蒲鉾竹輪	罐詰	麵類	醬油	味噌	清涼飲料水	粉類	菓子類
五二、二五五	八、三九一	一五、六〇〇	五、三〇〇	二二七、三三〇	四、四六七、一九七	三、四一五、〇五六	一、一八五、〇〇〇	四、四一五、四七〇	八〇、〇三〇	三、〇二一、二〇〇	三、三九、四九〇	四〇、八八五	一、四一五、八〇〇	二、三、六二〇
三三、六五〇	七、七二八	一五、五〇〇	五、五〇〇	二〇五、八〇〇	三、四一五、〇五六	一、一八五、〇〇〇	四、四一五、四七〇	一、六七五、五二二	八〇、〇〇〇	三、三九、四九〇	三、三九、九六七	三、五、六一七	一、六〇、九五〇	二、三、八〇〇
三六、七八五	七、三二五	一五、三〇〇	五、五〇〇	二二一、五〇〇	三、三六〇、六四〇	一、五五、九三〇	四、八二、〇一〇	一、六五六、六四一	七三、五〇〇	三、八五、一五二	三、一〇、五三〇	三、四、五九五	四、三、八〇〇	二、九、五〇〇
四九、〇四五	一一、〇九五	一五、五〇〇	五、一〇〇	二五〇、八〇〇	三、六四〇、三二〇	二、五、九七六	六、七五、六〇〇	一、七四二、一三六	五〇、二五〇	三、八七、〇六〇	三、〇一、四〇八	四、三、七五五	四、六、六二〇	二、三、四九五
四八、五三六	一三、四〇九	一四、七八〇	五、〇五〇	二七三、三二〇	三、六四〇、三二〇	二、四六、六〇〇	八、七〇、五〇〇	一、七四二、一三六	五二、〇五〇	三、一七、六八八	三、三九、二四二	五、三、二四三	七、四、四六七	二、四、八九三
四八、九八〇	二二、五六〇	一六、一八七	三九、七五三	二九三、八〇〇	三、六四〇、三二〇	三、六八、四〇〇	五〇七、七八〇	三、五二、四四八	五、〇〇〇	三、〇〇、七四〇	三、一〇、一九八	六、七、三七六	六、二、八四八	三、六、六七六
三七、六六二	一九、八〇〇	—	四七、三八三	一九一、五〇〇	三、三六八、四〇三	三、九〇、三三九	四、四三、〇〇〇	三、五二、四四八	四三、六六五	二、九三、六〇九	三、三三、九二五	五、六、一四七	五、九、八五五	二、三、八、二三三
二六、八五〇	一八、二二三	—	一三、一〇〇	一七二、一七六	三、三六八、四〇三	一、六九、五〇九	二、〇四、一一〇	三、三九、二七九	四一、六五八	二、九六、四〇〇	三、四〇、九七五	四、八、八九一	六、五、七六三	二、三、四、〇五〇

業工雑										品リ廻			
計	其ノ他	石材製品	魚網	屏風襖子間	提灯及傘	造花	印刷物	紙箱	薬工品	竹製品	疊製品	履物素地ヲ除ク	其ノ他
七八〇、三二〇	四四、〇六〇	二五、四〇〇	四、七〇〇	一六、五〇〇	一〇、二五〇	三七、五〇〇	四七五、三三三	二八、九六〇	三三、六二四	一一、一八三	五三、八二〇	八六、六二〇	五、三九五
七二七、六九九	三五、六七〇	二二、三〇〇	四、一、三〇〇	一四、〇七〇	九、三三〇	三六、九六〇	四三五、二二八	三一、八三〇	三五、二二六	一一、〇四五	五三、七五〇	八五、九〇〇	四、〇九五
七三六、六四五	三三、三九五	二〇、〇〇〇	五、五、〇〇〇	一七、五〇〇	一〇、三〇〇	三七、八〇〇	四二七、一〇八	三四、五〇〇	三三、九四二	一三、一〇〇	五五、〇〇〇	八二、八〇〇	三、七五〇
七六二、九三三	一三、七二五	一九、五〇〇	六、八、〇〇〇	一五、五〇〇	一二、〇〇〇	四四、一〇〇	四五五、七七二	三五、五〇〇	二四、一三五	二二、二〇一	五三、五〇〇	一六八、七五〇	四、四七〇
七五三、七〇一	一三、〇七〇	一六、三五〇	二、一、五〇〇	一六、五〇〇	一三、七八〇	四一、五〇〇	四五二、四七四	三五、七七七	三三、六二七	二〇、一九二	六八、九八〇	一九二、二〇〇	四、七九六
一〇、六九、八〇五	二二八、五八〇	—	—	—	一〇、七五五	三八、〇九四	六三八、四〇〇	一八、七二〇	三二、二二二	一八、九九四	七五、〇五〇	四、七四九	四、二〇八
九七三、七五二	一三三、五二五	—	—	—	一〇、四七五	二五、五四〇	六七二、〇〇六	一五、六〇〇	二九、〇七二	一七、四九三	七〇、〇五〇	一八、一五〇	三、四、四九五
一〇、四六、七九九	一九三、一一三	—	—	—	五、二五〇	二四、〇〇〇	六八九、八三九	二二、五八〇	二四、七二九	二四、七二九	六一、五六〇	一六、八六八	二、四、一一七

第四、工場

漸進的發達の過程を辿り來つた本市の工場界も、昭和三年を最高とし打續く不況の荒波に場數の減少を來したが、昭和七年下半年期以來所謂インフレ景氣に産業界は再び明るさを示し、工場の新設せらるるありて翌八年末現在では遂に昭和時代に於ける最高を記録するに至つたのである。

而して其の年末現在に於ける市域の包擁する工場總數八十四中、原動機を使用するもの六六、使用せざるもの一三、之によると原動力を使用する工場即ち組織的工業が大多數なるに對し、原動機を使用せざる家内工業的のものは極めて少なく、且つ年と共に漸次衰減しつつある。

生産額に於ては昭和時代に於ける最高の四年に比し七〇萬圓を減じ、深刻なる業界不況を反映してゐる、然しながら以上の事實は主として水産加工品罐詰工業が原料魚族の不漁に伴ふ生産減に基くものにして、誠に止むを得ない現象と言はざるを得ない。

最近に於ける工場の概況を示せば左の如し（職工五人以上を使用する工場）

年次	工場數		歩合		職工		計數
	原動機ヲ使用スルモノ	原動機ヲ使用セザルモノ	原動機ヲ使用スルモノ	原動機ヲ使用セザルモノ	男	女	
昭和元年	六五	一五	八〇	一八、七五	一、二七六	四八三	一、七五九
昭和二年	六四	一五	七九	一八、九九	一、五二〇	六八七	二、一九七
昭和三年	六五	一五	八〇	一八、七五	一、七〇七	一、〇七六	二、七八三
昭和四年	六〇	一一	七一	一五、五〇	一、八七七	一、一三三	二、九一〇
昭和五年	六〇	九	六九	一三、〇五	一、六五一	一、〇四一	二、七〇五
昭和六年	六三	一一	七四	一四、八七	一、六九〇	一、〇一	二、七〇〇
昭和七年	六〇	九	六九	一三、〇四	一、八二五	一、二七二	三、〇九七
昭和八年	六六	一三	七九	一六、四六	一、八二七	一、〇〇一	三、一三九

工場生産額

年次	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
生産額	三、一三九	二、七六三	二、九一〇	二、六九一	二、七〇五	二、七〇〇	三、〇九七	三、一三九

種別	年次		昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
	工場數	生産額								
金器	六	六	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
並器具	六	六	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
機械工業	八	六	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

業工雜	業工刷印		品料食飲工		木業並材製		業工學化		
	生産額	工場數	生産額	工場數	生産額	工場數	生産額	工場數	
九〇、六四九	一二	四四九、一七九	六	三、七九、七〇八	二七	二、八八三、三三六	二二	三二八、七五五	四
八三、六一八	九	三九八、四七八	五	二、八二九、三八五	二六	一、九九五、五九九	一九	二五七、七八八	四
八八、二〇〇	九	四〇七、七二八	五	二、七四〇、六一八	二七	二、二二七、五五七	二四	三七三、六五〇	四
四八、五二七	八	四三八、四八六	五	三、一〇七、一八六	二六	二、六〇〇、四六一	二〇	六三九、七三六	四
五九、八六一	八	四五六、三三四	五	五、二九、六〇〇	二七	三、〇六一、七九〇	二二	四二七、三三二	四
五九、一九三	九	五〇七、二二五	六	二、三八〇、五三三	二九	四、二六六、七二九	二六	四九〇、八六四	四
五六、〇七九	七	四五七、六四六	五	二、一四三、四三三	二九	四、四三三、四三三	二七	五四二、五七〇	五
八三、八二〇	九	五三三、三三九	六	一、五四七、九一六	二九	三、一九七、九四七	二五	五三三、一六四	五

生産額合計	八、五八五、〇四九
	六、二九、五八二
	六、三五〇、七〇四
	七、一七五、九七七
	九、二六三、四二七
	七、五八四、三五九
	八、二二二、九七三
	五、九三六、四二二

工場調査 (昭和八年度末現在) (常時五人以上ノ職工ヲ使用シ又ハ五人以上ノ職工ヲ使用シ得ル設備ヲ有スル工場)

工場名	主要事業	設立年月	町名	代表者
坂本製材製材工場	製材	明治十五年八月	浦町字橋本	坂本周八郎
青森三共木材株式會社	同	大正十一年四月	沖館	和田幸吉
合名 藤田組長木會社	同	大正八年十月	浪打	荒川勇造
澤製材所	同	大正十年八月	長島	小田桐政信
青森製材製材株式會社	同	昭和六年四月	浦町	駒井長太郎
駒井青森製材所	同	大正四年一月	沖館	秋田木材株式會社
秋田木材株式會社	同	大正元年八月	浪打	織田重信
大湊木材株式會社	同	明治四十三年十一月	沖館	成田文吉
成文木材部	同	大正九年三月	蛭貝町	小館保治郎
小館木材株式會社製材工場	同	大正七年四月	新安方町	鈴木力藏
鈴力罐詰工場	罐詰製造業	昭和四年七月	新濱町	三上圓太郎
三上罐詰工場	同	大正八年八月	浪打	坂上辰藏
倉坂上罐詰工場	同			

根市	織詰工場	織詰製造業	大正三年四月	浪打	根市兼次郎
千葉	織詰工場	同	昭和六年四月	同	千葉傳藏
合資會社	佐々木織詰工場	同	大正十四年七月	同	佐々木榮一
合資會社	若井織詰工場	同	大正十五年一月	沖館	若井由太郎
合資會社	久保商店織詰工場	同	昭和二年七月	濱町	久保國松
岡本	織詰工場	同	明治廿五年十一月	浪打	岡本建一
大東食品株式會社	同	同	大正十五年四月	同	角野七藏
青森印刷株式會社	印刷業	同	大正九年七月	寺町	土田和吉
株式會社	啓明社	同	大正九年三月	米町	木村虎雄
東興	日報社	同	明治廿一年十二月	長島	山田金次郎
青森製函工場	包裝用木箱製造業	同	大正二年十月	舘貝町	早瀬喜三郎
沼田蒲鉾工場	水産品製造業	同	大正八年十一月	堤町	沼田磯吉
青森製蠟所	蠟燭製造業	同	明治四十三年九月	浪打	横内忠作
株式會社	青森造船鐵工所	其他ノ船舶造船業	大正七年十二月	舘貝町	小舘保治郎
佐藤	製材所	製材業	昭和七年四月	古川	佐藤正彦
村上	製材所	同	昭和八年五月	同	村上製材所
田中	製材所	同	昭和六年六月	同	田中光雄

杉浦	製材所	同	大正十二年十月	沖舘	杉浦佐次郎
伊藤源	挽材工場	同	昭和二年七月	浪打	伊藤直一
木村	製材所	同	昭和二年三月	同	木村門太郎
株式會社	青森スキ製材所	其他ノ木製品製造業	大正十二年三月	浦町	鈴木大觀
黒丸	証工場	同	昭和八年四月	同	黒丸廣得
長内	証工場	同	昭和五年七月	古川	長内由五郎
副田	証工場	同	大正十四年五月	沖舘	副田兼吉
鎌田	製函工場	包裝用木箱製造業	昭和七年二月	浪打	鎌田權次郎
鈴木	製繩工場	同	昭和六年一月	沖舘	鈴木敬一
市戸	製繩工場	同	嘉永五年	米町	市戸良助
杉野	製繩工場	同	昭和六年一月	沖舘	杉野森富吉
鈴木	第二製繩工場	同	昭和七年十二月	浦町	鈴木敬一
和田	醬油味噌製造所	醬油、味噌、製造業	明治廿四年八月	榮町	和田與作
三橋	醬油味噌製造所	同	寛政元年十月	大工町	三橋三吾
鎌重	味噌製造所	味噌製造業	明治二十年	濱町	鎌田重吉
渡邊	味噌製造所	同	弘化四年	米町	渡邊佐助
烏津	味噌製造所	同	明治元年五月	同	烏津圓次郎

村本味噌製造所	味噌製造業	明治卅五年十二月	博勞町	村本喜四郎
十和田醬油株式會社第二工場	醬油釀造業	大正六年七月	浦町	和田寛次郎
三上竹輪工場	水産品製造業	大正五年十一月	浪打	三上金助
高橋蒲鉾製造所	同	明治卅四年十二月	大町	高橋重藏
青森製紙合資會社	製紙業	昭和三年二月	浪打	木村虎雄
株式會社 篠原商店	同	大正三年十月	同	篠原善次郎
松井紙器製作所	紙製品製造業	明治四十二年七月	米町	松井桂三
株式伊狩洋服店青森出張所	裁縫業	昭和四年五月	新町	伊狩洋服店 青森出張所
田中洋服店	同	大正七年一月	同	田中徳太郎
青森ラムネ製造合資會社	清涼飲料水製造業	明治卅二年三月	寺町	横井與吉
朝日ラムネ製造所	同	大正九年五月	鍛冶町	佐藤鐵之助
細井ラムネ製造工場	同	大正十二年四月	大町	細井儀助
東北印刷株式會社	印刷業	昭和六年六月	新町	八木留二
青森報知新聞社	同	昭和二年四月	安方町	關精一
青森日報社	同	明治十三年六月	柳町	外崎千代吉
◎奈良精米所	其他ノ食料品工業	大正二年	古川	奈良佐市
和田精米所	同	明治四年一月	新安方町	和田幸吉

高橋靴工場	皮革製品製造所	大正十二年七月	新町	川島彌四郎
藤井靴工場	同	明治四十年五月	浦町	藤井新吉
◎平野靴製作所	同	明治四十三年九月	大町	平野彦四郎
青森鉛製造株式會社	菓子製造業	大正八年九月	安方町	星政吉
合名會社明治商行製菓工場	同	昭和八年七月	長島	蝦名安五郎
伊東木工所	家具、建具、製造業	大正十二年四月	浦町	伊東京作
宮本樽工場	樽及桶製造業	大正十二年八月	同	宮本善吉
東洋製織株式會社青森工場	織力織製造業	昭和五年七月	同	酒井達雄
大岡網工場	網製造業	昭和八年五月	安方町	大岡半右工門
海保製作所	其他ノ機械、器具製造業	大正十四年一月	新濱町	海保信治
青燧社燐寸工場	燐寸製造業	明治卅五年	浪打	川村市太郎
柿崎鐵工場	内燃機關	大正十三年五月	新安方町	柿崎平助
青森製氷株式會社	製氷業	大正九年二月	新濱町	坂上五郎兵衛
須藤唧筒製作所	唧筒製造業	明治四十三年五月	新町	須藤佐之助
青森鐵工場	工作機械器具製造	明治廿六年六月	古川	西村長松
小田桐鐵工場	土木建築用機械器具製造業	大正七年八月	鍛冶町	小田桐恒藏

第五、特産品（お土産品）

六四

お土産品の選定に云ふことは旅人にとつては確かに一つの悩みである、土産品を買ふ人の結論は其の土地の特産品であり、氣のきいたもの、一寸値のわからないもの、有難味のあるもの、安くて利用価値のあるもの等々極めて都合のよい考へになるのであるが、然し以上の条件を具備しても餘り嵩になつたり重かつたりする品物は一寸困るので、其の選定は中々容易でないのである。

今左に本市を訪れる大方の爲にお土産品を御紹介すると

一、食料品

○**鮭、鱒罐詰** 所謂北洋魚族を原料とする本品は唯に其の生産額が市内諸生産物中最高位にあるばかりでなく、其の名は既に世界的に響いて居る工産品で、最近では其の通商國が實に廿有餘國に及ぶ進展振である、其製品は一ポンド入立罐、平罐、半ポンド入平罐、四分の一ポンド入平罐の四種がある

○**鱈、鯖罐詰** 鮭、鱒罐詰に次ぎ最近國際的に進出して好評を博して居る、鮭、鱒罐詰が北洋魚族を原料とするに反し、本品は極めて滋養價値に富み且つ沿岸より無盡蔵に漁獲せらるゝ鱈及鯖を原料とする強味があるため、將來の進展こそ刮目に値するものがある。

○**磯の華** 本品は灣内より漁獲せらるゝ小鱈を、近代化學を利用したる乾燥機により完全なる乾燥燻干を作り、之を粉末となし更に同一方法にて乾燥昆布の粉末を作りて兩者を適量に混合したる調味

料で、榮養價の大なる原料が灣内より無盡に得らるゝため價額の低廉なる點に於て其の聲價が高く陸軍省其他病院、學校等に愛用され、最近關西、關東方面に進出されて一般家庭の「ダシ」として賣行熾んなものである。

○**味淋干鱈** 之は數年前より製産せらるゝ様になつた本市の新興名産で、其の獨特の味と手輕な點で食通の間に好評を博し、現今では盛んに縣外に移出せられて居る、原料は豊富なる灣内産の比較的脂肪分のない小鱈で、製法は生鱈の頭腸を切り取り、良く眞水にて洗ひ、腹を開いて骨を除き背を中心に左右に開き之を砂糖と醬油の煮締めた液中に浸し、良く浸み込んだのを更に「スダレ」の上に乗せ味淋にひたして約二日半位天日で乾かすのである、料理法は至つて簡單で之を軽く燻くのみで食用に供せられる様に出來て居り、携帶に便利なので旅行や遠足用として好適のものであり、且つ風味佳良滋養豊富でその聲價が高い。

○**乾燥昆布巻** 本品も亦本市に於ける新興特産で、現在では市勸業課後援の下に大量製産に精進しつゝありて大工場の食用に歡迎せられ、更に軍隊にも進出し最近では滿洲國より大量注文に接する等日尙ほ淺きに拘はらず急激な販路の擴大振りは世人を驚嘆せしめてゐるのである、四季を通じて一般家庭に非常に歡迎されて居る。

灣内特産の公魚（コウナゴ）、若サギ（チカ）の素干を中味として味付昆布の乾燥せるを巻付けたる特製

六五

の昆布巻であり、徑二寸五分のものを二十本づ、セロハン製の袋に入れて販賣せられてあり、携帶至便のため土産品として好適のものである。

○帆立貝柱 本品は陸奥灣内特産の帆立貝を一度煮て其の柱のみを取り、更に軽く焼いたのを乾燥せるもので、本市に於ける對支貿易品として年々相當の輸出をなしてゐる。

柔かで美味で特に支那料理には貴重な逸品である、最近では色々の加工品も出来る様になつて國內に於ける需要も年と共に多くなつてゐる。

二、嗜好品

○津輕飴 飴は青森の名産として古い歴史を有し北海道、樺太、東北各縣等へ移出せられ年々産額も昂まり全國的に優良の地位にあるのである、贈答品用として嚙入あり、普通品では鉢入として發賣せられて名聲を博してゐる、更に加工品では出色のものに飴羊羹等がある。

○林檎 青森縣の林檎か、林檎の青森か、林檎は青森縣の代名詞であり、青森縣を云へば特産林檎が聯想せらるゝ程に著名になつて居り、今日では全國到る處の市場へ進出して聲價を博してゐる。眞紅なる彩光、姿態の優雅、芳淳な風味等々味覺を唆ること夥しく、將に本邦果實界の霸王である。林檎は獨り本縣ばかりでなく各地に散在してゐるけれども其の生産高の豊富なると品質の優秀、香味佳良なると長期の貯藏に堪ふる點等よりして本縣産のものは斷然他の追隨を許さない。

春夏秋冬を問はず市内到る處で容易に求め得られお土産品として將に天下一品である。

○林檎羊羹 林檎を原料とせる本縣獨特のもので、林檎固有の芳香と甘酸とがありて味覺を唆ること夥しい、市内の菓子舗では大抵製造販賣せられてあり、最新の名産として其の需要が廣く土産品として誂ひ向である。

○昆布羊羹 其の名の如く昆布を原料として製造せるもので、名産に恥ぢない逸物で宮家御買上の榮を賜はりたること一再に止まらず、全國各地の主要博覽會に出品して常に名譽賞牌並に金牌等の賞を獲得し、昆布獨特の滋養素を減殺せぬ様製造されたる名産であり、理想的なお土産品である。

三、美術工藝品

○津輕塗 名産中最も古い歴史を有するものは本品である。

一名唐塗とも云ひ器は至つて堅牢で塗料の容易に類げない處から「津輕の馬鹿塗」と云ふ俗名もある。着手より仕上げまで約五十回位も塗り重ねて作るから實用的なことは天下一品で、其の彩色も亦幽雅高尚なので夙に好評を博してゐる、製品の主なるものは食用器物で家具及裝飾品等各種あつて、意匠も年と共に進歩し美術品として其の資格を失はない。

○パニクラパイプ (別名青森パイプ) 縣内特産の俗名根曲竹の根元が即ちパイプの本体であり、竹そのものが無限に自由に採取出来るが、パイプに適する名竹の選擇に一苦勞を要するので價も割合

に高いが曩年朝日新聞の産業座談會記事登載以來、各地より注文殺到し名産として全国的に知らる、様になつたのである、竹に馴れて居る日本人には感興が薄い、外國人殊に歐米人は竹を非常に珍重する、其の上パイプの意匠が純日本趣味を尊擧した點が慾望を唆り、新奇を悦ぶ歐米人の歡迎する所となつて遠く海外に輸出せられてゐるのである。

今では販路を國內需要より國際的工藝品として一路海外の市場に置き、銳意斯業の發展向上に精進しつゝあるを以て、將來の大成は期して待つべく名産として前途益々多幸である。

○善知鳥彫 本市は往時善知鳥村と稱せられ、且つ本市唯一の縣社にして市民の崇敬殊に厚い善知鳥神社の名稱を冠した小型の雅趣に富んだ木製彫刻品である、歴史は新しいが各地の博覽會へ出品して常に好評を博し青森名産として其の名は高い。

○あけび蔓細工 本品は野生の「アケビ」蔓を以て製造する八十年の歴史を持つ名産で、獨逸、佛蘭西、澳地利等の國際見本市並に英吉利、米國、大連に開催された國際的大博覽會に出品して屢々金盃の賞を獲得する等單に津輕名産であるばかりでなく、眞に日本の名産で國際的工産品である、最初は玩具専門であつたが、最近では椅子類を作るやうになり、最も多いのは「バスケット」類、洋酒入、罐詰入、花籠等其他肩掛鞆と云つて學生等の旅行用に供されるものが考案發賣され、非常に好評を博して居る。



果實罐詰食料品
國産林檎輸出問屋



傳中傳商店

中村勝彦

本店 青森市寺町
電話(ナ)又ハ(テン)
電話一三〇四番
振替仙臺八五六九番
支店 青森市上新町
電話七五七番

林檎移出部……青森縣……

南 郡 倉 庫 部
南 郡 岡 倉 庫
南 郡 石 荷 造 場
北 郡 板 柳 荷 造 場
北 郡 鶴 田 出 張 所
北 郡 電話 一七番

青森市柳町四ツ角

果物委託
問屋



商標

木村得治郎商店

銀行 安田銀行青森支店 電話 一〇七番
陸奥銀行青森支店 電話 一〇七番
青森商業銀行 電話 一〇七番
板柳銀行青森支店 電話 一〇七番

木村商店

倉庫 製氷 庫部

所在地 青森市浦町一六九番地

各博覽會金銀賞牌受領
青森名産飴製造發賣元



川島浅吉商店

青森市安方町三丁目
電話 五百二十九番

青森名產

大日本元祖

各博覽會金銀賞牌
百數十個受領

登錄

昆布羊羹

商標

外昆布製各種

青森市大町

昆布翁

高

松

藤

吉

電話一三一三番

營業種目

製飴類各種
五色糖
林檎羊羹
林檎羊羹
昆布羊羹
外昆布製各種
加美工品



青森飴製造株式會社

青森市安方町四六番地

電話二一〇番

電器(ア)又ハ(アメ)

林檎羊羹
菓子舗

甘精堂本店

三浦永太郎
同喫茶部

電話十四番
青森市上新町角



第五章 交通、運輸

第一、概 説

藩主信牧公の商港建設によつて開發された本市の海陸交通が、全国的に其の價値を認めらるゝ様になつたのは明治の中頃で、以前の文化的施設としては僅かに沿岸に於て汽船が交通を助けて居つたに過ぎないのである。

陸上交通關係に在りては無論鐵道が敷かれて居らず、自動車もなく全く原始さながらの状態で、僅かに駕籠と駄馬とによつて交易するに過ぎなかつたのである。

然るに時代の推移と文化の進歩に伴ひ、本市の優越せる地理的狀勢が遂に共同運輸汽船會社（後の日本郵便會社）經營の青森、函館、室蘭間の定期連絡航路の開始となり、更に日本鐵道會社の上野、青森間東北本線の開通ともなつて茲に交通狀態の一大變革を來し、本州對北海道間の物資は概ね本市を經由するに至つて遂に東北に於ける唯一の物資大集散地となつたのである。

其の後上野、青森間奥羽本線も全通せらるゝ、ありて東奥の天地にも文化の瑞雲が漂ひ、あらゆる交通施設か日に月に改まり、遂に今日の如き海陸交通網が四通八達の要路となつたのである。

斯の如く交通機關の發達は一方都市の發展を促し、都市の發展膨脹が交通機關の發達を伴つて名實共

に本邦に於ける重要港灣都市たるの地位を確保し、國際的に進出する様になつたのである。

第二、海 運

○航路 青森港現在に於ける航路の定期船には函館、室蘭の二大連絡航路を首めとし、對北海道航路八線、樺太航路二線、灣内航路四線の對内定期十四線に、大連航路及北鮮航路（滿洲國貿易にも從事）の對外二線計十六線を算するの盛況を呈しつゝある。

大勢は北海道諸港との連絡を目的とする航路であり、樺太の二線も亦途中北海道諸港に寄港するので本港が本州北方の關門として對北海道方面との連絡上如何に樞要であるか、窺知することが出来る。就中青函間鐵道連絡航路は交通文化として、世界にも類例の少ない鐵道省空前の施設たる貨車航路線の航行に依つて客貨の移動最も甚しく、室蘭航路も亦北日本汽船會社經營に係る遞信省命令航路であり、鐵道省連帶直行航路で青函連絡船と共に鐵道省専用岸壁に於て接岸荷役をなし得る便宜が與へられ、青函間鐵道航路に次ぐ本港に於ける主要航路の一つである。

其の他小樽を筆頭に釧路、日高、根室、網走、千島、樺太航路等何れも直通航路でなく、途中北海道沿岸の主要漁港へ寄港するので、貨物の集散益々旺盛となり、集散貨物の多き所、船舶の輻湊するのは理の當然で、近年海運界稀有の不況にも拘はらず獨り本港が漸増の大勢を持続せる事は實に對北海道關係の航路が四通八達の結果に外ならぬ。

加ふるに大連及北鮮、滿洲方面の對外定期航路に依つて巨大船の入港に灣頭常に殷盛を極め、而して前記定期航路の外不定期の自由航路は隨時隨所より内外兩洋に通ずる現状にあり、更に港灣施設の充實に従ひ一面市勢の發展と相俟つて逐年入港船舶の増大を來し、中にも近年外國船舶の入港頻々たるものありて、將に國際的商港たるの價値を把持してゐる。

尙ほ本港現在に於ける定期航路の航路數其の他を示せば左の如くである

定期航路

航路名	區間	運航回数	寄港地	記 事
函館航路	青森 函館	一日一回	函館 青森 間 直航	經營者 函青汽船株式會社 當港 丸共回漕店 取扱店
室蘭航路	青森 室蘭	一日一回	青森 室蘭 間 盡通	北日本汽船株式會社
小樽航路	小樽 青森	夏季 六回 冬季 六回	小樽、古平、余別、岩内、 壽都、瀬棚、釣懸、青苗、 久遠、熊石、江差、函館、 青森	北海道廳命令航路 經營者 藤山汽船會社 當港 磯野回漕店 取扱店

大連朝鮮航路	北鮮航路	外南部航路	上磯航路	上磯航路	下北航路
大 小 一 樽 連	雄 青 一 森 基	下 青 風 一 呂 森	龍 青 一 森 飛	龍 青 一 森 飛	大 青 一 森 湊
年 三 十 六 回	年 二 十 回	月 八 回	一 日 一 回	一 日 一 回	一 日 一 回
大連、鎮南浦、仁川、釜山、 荻、境、舞鶴、新舞鶴、敦賀、 伏木、函館、小樽、青森	雄基、清津、城津、西湖津、 元山、新潟、船川、酒田、 函館、小樽	青森、福浦、牛瀧、長後、 磯谷、矢越、佐井、原田、 材木、奥戸、大間、蛇浦、 易國間、下風呂	青森、蟹田、二ツ家、平館、 宇田、奥平部、雲月、今別、 三厩、宇鐵、六條間、釜ノ 澤、檜、後湯	青森、蟹田、二ツ家、今津、野 田、平館、宇田、奥平部、雲月、 今別、三厩、宇鐵、上宇鐵、大 條間、釜ノ澤、川柱、檜	青森、脇野澤、網崎、宿野 部、川内、大湊
朝鮮總督府命令航路 經營者 烏谷商船株式會社 取投店 磯野回漕店	青森縣市命令航路 經營者 烏谷商船株式會社 取投店 磯野回漕店	奧佐運輸株式會社 經營者 丸賀本房吉 取投店 丸賀回漕店	東北商船株式會社 經營者 取投店 磯野回漕店	經營者 山上船舶部 取投店 磯野回漕店	經營者 東北商船株式會社 取投店 國際通運株式會社 青森出張所

樺太航路	擇捉航路	日高航路	根室航路	釧路航路
函 大 一 一 須 取 取 取	函 大 一 一 捉 取 取 取	青 函 一 一 森 館	根 青 一 一 室 森	函 函 一 一 路 館
月 六 回	年 十 二 回 (四月—十月)	月 五 回	月 二 回	月 六 回
函館、青森、小樽、大泊、 眞岡、泊屋、安別、惠須取 本斗	函館、青森、小樽、大泊、 眞岡、泊屋、安別、惠須取 本斗	函館、青森、根室、釧路、厚 岸、霧多布、斜古丹、入里 節、貝谷、丁寧、年朧、内 保留別、紗那別飛、藥取	伏木、七尾、新潟、酒田、 船川、青森、釧路、厚岸、 霧多布、根室	函館、青森、小越、庶野、 猿留、廣尾、大津、釧路
遞信省命令航路 經營者 近海郵船會社 取投店 國際通運株式會社 青森出張所	樺太廳命令航路 經營者 川崎汽船會社 取投店 磯野回漕店	北海道廳命令航路 經營者 金森商船株式會社 取投店 青森運輸株式會社	北海道廳命令航路 經營者 烏谷商船株式會社 取投店 磯野回漕店	經營者 函館汽船株式會社 取投店 青森運輸株式會社

青函間連絡船	青一森	一日 五回	經營者 鐵道省
--------	-----	-------	---------

○入港船舶 青森港最近に於ける入港船舶の趨勢は左表の示す如くで、歐洲戦後の反動的な不況並昭和二年の財界恐慌時代にも、港勢は轉々向上して漸増の大勢を維持せる一半は、青函間鐵道連絡航路に巨大なる貨車航送船の出現にも依るけれども、反面に優秀なる地利に常により港灣利用に依る物資の集散に努め以て集散利用に重點を置きて企業の勃興を圖り、之を誘導する等凡てが産業の事象を參酌して各般の施設を整備せる結果に外ならぬ。

斯の如く躍進鮮かな本港も、益々深刻に襲ひ來る海運界不況の大勢は支へ難く、一時衰運を辿るに至つたのであるが、昨今はこの狀態を一氣に解消して再び入港船増加の趨勢を示す様になつたのである更に今や本港第二期も云ふべき築港修築擴張工事が、營々として進捗しつゝあるを以て其の完成の曉には、より大型船舶の入港を促すべく本港將來の隆昌こそ期して待つべきものあらん。

入港船舶を内國、外國兩航路に區分觀察するに、外國航路の入港船が年々共に増加しつゝあるは特に注目に價するものあり就中、外國船の頻々たる入港は本港の聲價を一層高めつゝある、之を要するに本港に於ける海運界が内國航路より國際的に進出し、海外に向つて港勢圏が擴大しつゝあるものと謂

はざるを得ない。

最近十ヶ年間の入港船舶調

年次	入港回数	全上噸數		内國航路		外國航路	
		登簿噸數	總噸數	回数	登簿噸數	回数	登簿噸數
昭和八年	四、七〇七	四、七〇七	四、七〇七	四、七〇七	三、一〇一	一三四	三、一〇一
昭和七年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	二、七〇二	一四一	二、七〇二
昭和六年	三、〇三〇	三、〇三〇	三、〇三〇	三、〇三〇	二、一三八	一三三	二、一三八
昭和五年	二、四三三	二、四三三	二、四三三	二、四三三	一、八〇五	一四一	一、八〇五
昭和四年	二、一六九	二、一六九	二、一六九	二、一六九	一、三九〇	一三二	一、三九〇
昭和三年	一、五八〇	一、五八〇	一、五八〇	一、五八〇	一、〇三九	一三二	一、〇三九
昭和二年	一、九三三	一、九三三	一、九三三	一、九三三	一、四〇六	一三二	一、四〇六
昭和元年	一、九三三	一、九三三	一、九三三	一、九三三	一、四〇六	一三二	一、四〇六
大正十四年	一、八九〇	一、八九〇	一、八九〇	一、八九〇	一、四〇五	一三二	一、四〇五
大正十三年	一、七三三	一、七三三	一、七三三	一、七三三	一、三三二	一三二	一、三三二

○乗降船客 海運界空前の不況時にも拘らず依然として漸増の大勢を持続せる貿易界の堅實味に比

較して、之は亦餘りにも悲慘な凋落振である。
 即ち左表に示す如く、昭和元年までは旭日昇天の勢で特に百萬を突破せんとしたのであるが、益々深刻化する不況の荒波に押し流されてか逐年減退するの狀態に陥り、昭和七年に入りて遂に未だ曾つて見ざる不振を示したのである。

青森港乗降船客人員

年次	乗込人員		上陸人員		乗降計
	外國航路	内國航路	外國航路	内國航路	
昭和八年	三	三五九、五五五	七五	三七二、八二五	七三一、四三八
昭和七年	七	三七七、八四六	四四	三四五、八三六	六七三、七三三
昭和六年	七	三五七、四八〇	三三	三七〇、八三三	七二八、三三三
昭和五年	二	四三三、〇三〇	四三	四三六、九四五	八七三、〇一九
昭和四年	一	四六二、三三三	四〇	四五六、一五八	九〇〇、四八二
昭和三年	一六	四四七、五〇二	四六	四五八、八〇四	九〇六、七八八
昭和二年	八	四四八、二九九	二四	四三六、三三六	八八四、七五七
昭和元年	四	四六五、九五三	一六	四六九、二二〇	九三三、三三九

路航要主取扱

青森縣、市命令北鮮定期航路
 朝鮮總督府命令大連朝鮮航路
 北海道廳命令函樽定期航路
 鳥谷商船伏木根室定期航路
 樺太廳命令東海岸航路
 大阪商船内地臺灣航路
 北日本汽船小樽名古屋航路
 北日本汽船小樽大阪航路

雄基、清津、城津、西湖津、元山
 新湯、酒田、函館、小樽
 大連、釜山、小樽
 舞鶴、仁川、小樽
 函館、新津、小樽
 美濃、古平、小樽
 七尾、新根、小樽
 霧多布、新根、小樽
 大泊、新根、小樽
 大坂、新根、小樽
 横濱、新根、小樽
 尾道、新根、小樽
 東京、新根、小樽
 東京、新根、小樽
 東京、新根、小樽
 東京、新根、小樽
 東京、新根、小樽

海運業、陸送業、船内仲仕業、船業、木材筏業、曳船業
 船舶代理業、保險代理業、倉庫業
 佛郵エムエム汽船會社青森函館代理店
 東京海上火災保險株式會社青森代理店
 大倉火災海上保險株式會社代理店
 東洋生命保險株式會社代理店
 稅關貨物取扱人、海事代願取扱人

青森市新濱町三一 (私書函青森局第四號)
全磯野回漕店

電話 二一〇番・一四三番
 振替口座 小樽 一五〇番
 受電略號 アヲモリ・イソノ

青森市新濱町三一
全船部

電話 二一〇番・一四三番

日本郵船株式會社汽船取扱店
 近海郵船株式會社青森事務所
 大北火災海上運送保險株式會社代理店

海運業 國際通運株式會社青森出張所

事務所 青森市新安方町 電話 一五四番
 荷捌所 青森市新濱町 電話 一、五四五番

航路
 遞信省命令樺太線貨客優秀船
 弘前丸、營口丸、每月六回出帆
 北海道各地、東京、橫濱、名古屋、大阪、神戸
 門司、尾ノ道、臺灣各地、天津、上海、香港
 歐洲航路外國各地行

海運業
 陸運業
 船業
 保險代理業

青森運輸株式會社

青森市新濱町十一番地
 登錄受信(アラモリ、ウシユ)
 電話 四一〇番
 市外通話用(專用) 三番
 陸送部 驛構内一、六四五番

船舶給水業
 青森市新濱町十一番地
 合資會社 青森船舶給水所

電話 四一〇番

營業課目

海運業
陸送業
船業
倉庫業
保險代理業



共一舎 鈴木海陸運送部

電話 園一四〇番・八四六番・九五六番
西木一ム鐵道構内出張所電話一五八一番

定期航路

函館線
日高十勝線
東廻—京濱名古屋線
西廻—關門、阪神線
擇捉線
下北外南部線

其他北海道、樺太、臺灣、朝鮮各港行貨物
隨時取扱申候

第三、貿易の現状と將來

○貨物移動の趨勢 青森港は本州の東北端津輕及下北兩半島に圍繞せられ、前方は陸奥灣の蒼波を介し、津輕海峽を隔て、北海道に直面し、津輕海峽は更に東方太平洋に接し、西方日本海に連れるを以て當港は獨り本州對北海道との樞要連絡地點たるばかりでなく、樺太、沿海州及北米西海岸方面に對しても交通上將又國防上極めて優秀なる地點にある、而して後方連絡には東北、奥羽の二大幹線鐵道及羽越線の終點に位し更に所謂五能線全通も目睫の間に迫りつ、ある等、陸上に於ける交通機關の擴張整備は益々後方地域の擴大となり、地域中諸縣下産業の發展向上と東北海運界の覇都青森市を直接背景として、其の經濟事情を反映する港勢は入港船舶と略其の軌を一にし財界の混亂時代にも超然として好く遞増の大勢を維持し、昭和八年の如き實に百七十數萬噸の巨額に達し、本港貿易史上空前の記録を示すに至つたのである、只だ數量と異なり其の價格の常に波狀を畫して進展の顯著ならざるは國內經濟事情に支配せらるゝは勿論、汎く世界經濟の大勢に左右せられて商品價格の昂進、低落等變態的事情の介在するありて誠に止を得ない現象と云はなければならぬ。

○出貨入貨量の比較 海運貨物の噸數及價格を出入別に之を比較觀察するに、噸數に於ては常時出貨噸量は入貨噸量の約半數で、入超に次ぐに入超を以てする情勢なるに反し、價格は常に出超を以て終始するの奇現象を呈して居るのである。

其の主要原因は入貨物の大宗たる木材、水産物、石炭等重量容積の大なる反對に價格の極めて低廉な原料品が、北海道を首め樺太、沿海州方面更に縣内下北半島より無限に生産せられ、其の地理的關係に於て一旦本港へ出荷せられ、本港を經由して集散せらるゝ結果に基くもので、價格の出超たるは之等原料品が本市を中心として内地に於て加工し、精撰せられ更に布帛類、金屬製品、機械、器具等高價品が移出の大宗をなせる關係上、數量と價格に於て常に出入相副はない點のあるのは免れない所である。

貨物移動の狀況

年次	噸		數		價		額	
	出	入	出	入	出	入	出	入
大正十三年	五〇六、五五四	六四三、〇九二	一、一四九、六四六	九七、六五三、九九三	八〇、〇三〇、七三三	一七七、六八四、七二六		
大正十四年	五五九、三六六	六九五、七五八	一、二五五、二二四	一五〇、四五五、七四〇	八六、六七一、五四三	二二七、一七二、八三三		
昭和元年	六五〇、五六九	七三二、二九五	一、三八一、八六四	一五一、六九〇、三三九	八三、〇八六、三三〇	二三四七、七六、六九九		
昭和二年	四四八、七五〇	七八六、一九四	一、二三四、九四四	一三六、〇六六、八四四	八三、八七六、九九九	二二九、九三四、八三三		
昭和三年	五二二、三三六	八三三、五四五	一、三三四、八八二	一五八、三三五、四一九	七三、三三九、七七九	二二一、六七五、一九八		
昭和四年	五五七、五七六	一、〇一五、〇四七	一、五七二、六三三	一四八、八九八、一九三	六九、四八九、六五〇	二二八、三八七、八四三		
昭和五年	五八六、三四五	一、〇一六、四三四	一、六〇一、七九九	一三四、一四〇、三四四	五九、二二一、九三五	一九三、三三二、二六九		

第四、外國貿易

年次	噸	數	價	額
昭和六年	五〇三、四八二	一、四〇六、五二〇	六八、九二七、〇三三	一三六、五八一、一四〇
昭和七年	五七四、二二六	一、六二九、九五五	七五、九九八、八九八	一五一、九六六、八四九
昭和八年	六三六、〇三二	一、七七七、六七八	九二、七三六、一六一	一八三、六六一、二二九

○貿易狀況 本港に於ける貿易界の趨勢は前表に示す如くで、内地沿岸貿易を主とする觀ありて對外貿易は未だに内地と輸贏を競ふの域に達してゐない、而しながら輓近青森港機能の増進に依つて物資移動の徑路に著しき變化を來し、外國貿易が益々重要な地位に進出しつゝ、あるを看取し得らる、就中輸出貿易が最近長足の進展を示して昭和八年の如き遂に輸入を凌ぐ結果となりて本港輸出貿易史上新記録を作るに至つたのである。

近年我が國の對外貿易の入超が國家經濟上一大脅威を與へつゝ、ある秋に當り、本港輸出貿易が急速度に増加しつゝ、ある事實は國際貸借上誠に歓迎すべき現象であり、本港の使命の益々重大なるを痛感するものである。

今茲に明治卅九年開港以來貿易の趨勢を見るに常に遞増の大勢を維持し、昭和二年には實に三十倍強と云ふ本港貿易史上新機軸を示すに至り、本邦港灣中異數の増加率を示したのである。

斯の如く躍進鮮やかなりし對外貿易も、益々深刻化する不況の大勢に一時衰運を辿るに至つたのであるが、之は主として一般物價の昂進低落等特別の事情に依るもので、近年の如く低落一方の時代に於ては誠に止むを得ない現象である。

○通商貿易國 本港貿易の分布状態を見るに、其の商勢圏實に三十餘國に及び、洋の東西を問はず世界主要國至らざるなく、地理的に優越せる本港の對外貿易は駁々乎として長足の進歩を示すに至つたのである、就中鮭、鱒を主とする水産物罐詰工業の勃興は急進的膨脹を示すに至つた最大原因をなしてゐる。

最近に於ける國別通商貿易を見るに、貿易額一千萬圓を突破せる昭和二、三年の如き價格に於て最高を示せるも通商國僅かに十數ヶ國よりなかつたのである、其の後世界的財界恐慌時代に遭遇して、諸物價極度に下落したので貿易額は遞減の道程を辿れるも、商勢圏は反對に年々共に擴大されて近年は常に二十數ヶ國に及び、本港貿易史上空前の盛況を見るに至つたのである。

殊に歐洲各國への進出實に目醒しく、更に阿弗利加、東亞聯邦等も通商せられて南米を除き各洲に行き渡る等年々共に記録の新まるを見ても、如何に本港が國際的商港として適當なるかを雄辯に物語つてゐるのである。

更に最近新興滿洲國間に定期航路が開通せられて物資交易が開始されたので滿洲雜穀、大豆粕輸入に

至大の便益が得られ海産物、荒物等輸出の道開かれたるを以て同國の貿易上特殊的地位にある本港の貿易は、更に一段の光彩を放つであらう。

○輸出貿易 本港對外貿易が往年は對露漁業貿易が其の骨子をなし、従つて稀に支那や關東州へも及びたりし雖も北洋魚族が唯一の顧客たる關係上、漁業上に於ける必要品が輸出を見た外は、殆んど輸入貿易港たるの觀を呈し、夫れが二十有餘年の永い間輸入獨占化に委されてゐたのである。

斯の如く不振を極めた對外輸出貿易も、昭和二年を一轉機に俄然進展を來したのは所謂北洋魚族を原料とせる鮭、鱒罐詰業の勃興である。

想ふに港勢の推移は後方に於ける産業の盛衰に左右されること頗る大なるものあるは、本港既往の實績が雄辯に之を物語つてゐる、即ち企業の勃興に刺戟されて始めて實質的價値を發揮し、本來の使命を全ふするものである。

従つて港灣の經營は常に産業上の利用價に重點を置いて、現在又は將來に於ける産業の機構に適應する施設をなし、企業を誘導するのは當然の理であらねばならぬ。

此處に於て本港は第一期、第二期の階梯に分ちて産業上の事象を參酌し、各般の施設を整へつゝあるのである、而して第一期築港工事を竣り、今更に第二期的工事中なるも、第一期工程の竣成によつて近代的港灣たるの体形を整へるに至つて内外實業家の投資熱を唆り、企業の勃興を誘導する事に努め

た結果、陸岸には堂々たる大倉庫地帯が形成せられ、殊に本港は對岸北海道、樺太及北洋方面に對する漁業の策源地ともなりて鮮魚の大集散地たる關係も手傳つて之等魚族の保管、冷凍、冷蔵に關する諸設備亦整然たるものありて、水産加工業に採りては絶大なる便益が得らるゝ様になつたので、遂に前記罐詰工業の勃興もなつたのである。

斯の如く罐詰工業の進展に依つて輸入港たる本港も茲に輸出港たるの素地が築かれ、海外市場に於て意外の好評を博し、逐年商勢圏が擴大されて青森の名も亦一躍世界的となり、今日では罐詰のみで其の商圏が二十餘國に及ぶ空前の盛況を呈してゐるのである。

更に前述輸出貿易の大宗たる兩製品の外近來鱈、鯖等種々な水産罐詰も輸出せられて賞讃を博し、之等を中心とする輸出貿易が急速度の増加を來し、遂に昨八年開港以來始めて輸入を凌ぐ結果を招いたのである。

而しながら其の間原料魚族の周期的不漁や、世界的不況並に主要需要國に於ける殆んど禁止的關稅改正に災せられて衰運を辿つた時代もあるが堅實なる斯業の發展は着々として歩武を進め、良くこの難關を突破して名實共に罐詰王國を築き、世界に君臨して先進地米國を顔色なからしめてゐるのである。右の如く水産加工品、罐詰工業の大躍進に依つて本港に於ける海外貿易陣は將に金城鐵壁であり、將來の大成は期して待つべきものがあらう。

○輸入貿易

本港に於ける對外貿易は前にも述べた様に殆んど輸入を以て終始し、輸入貿易は青森港の特色たる觀を呈したのである、其の大宗をなせるは何んと云つても原油及重油、豆糟、鮮魚で、この三品總額が常に全輸入品の九割内外を占めてゐる状態で、本港に於ける輸入貿易の振否は實に如上

三大商品の移動状況によりて左右せらるゝ現象を呈してゐる。
 原油及重油は南洋諸島より輸入せられ専ら、漁業用船舶の燃料として其の需要は北海道を首めとし樺太、東北各縣に及んでゐる。

豆糟は關東州及滿洲國よりの輸入品で、農作物肥料として本縣を中心に岩手縣及秋田縣の一部に其の商圏を持つて居るが、慢性不況の農村は依然混迷状態にあるを以て、本品の代用に格安の魚肥を使用する關係で近來聊か衰運を辿つてゐるのである。

魚類は本港に於ける對内は勿論、對外的にも極めて重要であり、且つ本市の繁榮上密接不離の關係を有する必要欠くべからざる商品である、従つて本港貿易の消長並に商工業發展向上は一に繋りて漁業の豊凶と漁業貿易の振否に左右せらるゝのである、之を對内的に見るべきは將に水産加工業を中心とし之に依つて商工業の繁榮を促すべく運命づけられてゐる本市の死活に關する重大問題であり、更に對外的には本港貿易の輸入は勿論、輸出貿易としても其の大宗をなせる罐詰工業の原料たる鮭、鱈等の點から見ても本港に採りては何物にも換へ難き重要商品である。

青森港は對岸函館港と共に露領サガレン、カムチャツカ及沿海州方面に亘る所謂北洋漁場に對する漁業策源地であり、北洋漁業貿易は本港の特徴である、元來本貿易と西曆千九百七年ポーツマス條約に依り日露漁業條約の締結を見るに至つて始めて邦人漁業權が確立したもので、我國家の興亡を賭した一大犠牲であり、幾十萬同胞の血と肉との代償とした實に高價嚴肅なる漁業權である。

此處に於て邦人漁業家は猛然奮起し、北洋漁業は邦人の獨占的活躍の觀あり、漁獲も亦年と共に昂まり、國內に向つて殺倒する物資が逐年益々増加の趨勢を示したのである、而して本港は同方面に對する優越な地利を有する關係で、前述の通り北洋魚族の策源地となりて其の輸入も累年増加を來し、昭和二年三年は共に二百萬圓以上の盛況を呈したのである。

其の後全歐の大動亂、更に露國革命の内亂に禍せられ、露領漁業權の一時危懼せられたのであるが、斷然出漁の壯舉を敢行し、能く既得の權益を保持したのである、更に「ソヴェート」社會主義聯邦國成立せられて其の政体及經濟組織の異なるものあり、雖も、漁業條約の基本には元より變化のある筈がないのであるが、蘇聯新政府は銳意極度政策に力を注ぎ、所謂漁業開發五ヶ年計畫が樹立せられて、漁場の開發、或は工船漁業の經營等其の進出實に目覺しきものがある、斯の如くして漁業權の運用上に關し兩國間に屢々物議を醸し、漁區入札問題が事毎に紛糾を來し、勢ひ邦人側の出漁が著しく遅れ更に周期的不漁にも災せられて近年北洋魚族の入貨は頓に減退を來したのである。

而して茲に最も注目すべきは蘇聯政府は、魚獲物並に之が加工品を自國領圀たる浦鹽港に陸揚し、歐亞方面に販路の擴張を策し、本市産罐詰の聲價を高めつ、ある各國市場に於て挑戰的商戰を展開しつつある狀勢にありて、彼我價格の統制上誠に遺憾とする所である。

斯の如く蘇聯の極度政策は獨り本港に於ける重要輸入品たる魚族のみならず、本市唯一の對外貿易品たる罐詰等にも反響の慮あり、本市の經濟上海に注目すべき問題である。

而して本問題は實に本市に於ける前記貿易關係のみならず、現存する凡ての機能に重大影響を及ぼすを以て一時は相當に危懼せられたのであるが、天與の好位置は我が青森の實力の現實化とに據りて良くこの難關を突破し、商團は隆々として擴大され遂に今日の如き盛況を呈する様になつたのである。

開港以來輸出入貿易額年別表

年次	貿易額	指數	年次	貿易額	指數
明治三十九年	三六〇、三六三	100	明治四十三年	四九三、二一〇	109
明治四十年	九四五、五九九	二六三	明治四十四年	五四六、二五〇	一五二
明治四十一年	七八四、〇九四	二一七	大正元年	七五〇、五三九	二〇八
明治四十二年	七五〇、五三七	二〇八	大正二年	九〇九、六三五	二七七

大正三年	七六三、五六六	大正十三年	七、六八八、八一〇
大正四年	八三三、四五六	大正十四年	九、三〇七、七五五
大正五年	三五六、七八四	昭和元年	一〇、七二六、一七三
大正六年	二二五、八九一	昭和二年	一一、一七〇、〇二九
大正七年	五二七、一八一	昭和三年	一〇、三八三、四一〇
大正八年	一、四三四、九九一	昭和四年	九、〇七二、〇二二
大正九年	二、六七七、九八三	昭和五年	八、一一三、九三六
大正十年	二、〇〇一、六八六	昭和六年	五、五七四、九四七
大正十一年	四、五二〇、七四七	昭和七年	六、七九九、三六九
大正十二年	四、九八四、五八五	昭和八年	八、九五〇、四〇四
			二、四八四

貿易通商國別

國名	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年
關東州	三三四、六二九	四四九、一八二	三五二、〇一〇	六八一、七一〇	一、〇三四、四二七
滿洲國	八二四、九三九	三二二、二五九	五八五、〇一七		

中華民國	三七五	四三八	三、二八八	一、〇四六、二三五	九二二、六六八
露領亞細亞	一、三三〇、五〇八	一、二七五、五九一	一、〇六三、八八三	一、二四四、九六〇	一、八一六、六二一
英領海峽殖民地	二二三、二七九	二〇七、二七四	一一〇、一六六	三五、二九五	
英領印度		八一、一三八	八二五	六九、七〇八	五、二四四
蘭領印度	四七、四三五	一五、一三八	二三五	一、二五〇	一、八四八
佛領印度		110			
比律賓	二、八八〇	五、三〇〇			
英領ボルネオ	一、七六五、九六七	一、三八八、四四一	一、四〇〇、七四五	一、九八〇、五九五	一、八八九、四八二
蘭領ボルネオ		五九三、〇四二	一六六、六一四	四四〇、五三四	七三七、四九九
其ノ他ノ亞細亞	三、〇五〇	三、八九八		一、二四六	
英吉利	一、六二五、八三四	四八五、七〇〇	三九、八三六	五九九、八〇四	一、一四九、五三五
佛蘭西	一、七三五、六三五	一、二〇六、七五一	一、三七三、七九五	一、二五六、四八四	九三四、二三四
獨逸			四八、一六九	二八九、七五五	三、八三六
伊太利	四六、〇八二	九一、九三三		一三、五六六	
和蘭	二二、〇六八	七〇、四一九	三七、一〇八	一〇〇、四三三	九二、〇一〇
白耳義	一四六、二四九	三六〇、五四七	二六、七八五	七九、〇三八	一一四、四六三

瑞典	1,958	3,494	5,260	1,859	1,958
丁抹	990	6,625	15,310	1,859	1,859
希臘	1,300	—	7,687	1,100	3,899
西班牙	—	1,110	—	—	—
其ノ他ノ歐洲	600	1,200	1,100	1,200	—
埃及	3,500	1,000	—	1,451	2,963
南亞聯邦	2,750	59,500	59,557	73,988	31,076
東阿弗利加	3,430	15,185	—	—	—
葡領東阿弗利加	—	—	15,075	16,894	7,560
其他ノ阿弗利加	5,830	6,860	2,266	990	—
澳洲	858,055	116,650	4,746	66,694	33,280
北米合衆國	73,986	99,640	265,602	68,008	257,952
加奈陀	—	—	—	—	—
土耳其	—	—	—	—	—
東亞聯邦	—	6,764	—	—	—
南阿弗利加	1,710	—	—	—	—

國別輸出貿易

暹羅	5,064	—	—	—	—
新西蘭	22,269	—	—	—	—
合計	8,950,404	6,799,369	5,574,947	8,113,936	9,071,111
關東州	3,587	161	6,248	—	—
滿洲國	—	1,440	—	—	—
中華民國	—	20	983	1,236	1,110
露領亞細亞	—	14,934	188,450	133,081	14,640
英領海峽殖民地	—	86,579	—	65	—
英領印度	—	2,870	825	588	5,244
蘭領印度	—	15,138	335	1,250	1,848

國別輸入貿易

南阿弗利加	1,710	15,185				
東亞聯邦國		6,764				
葡領東阿弗利加						
其ノ他阿弗利加	5,830	6,860	15,075	16,894	7,560	
澳洲	858,058	126,500	4,746	990	31,280	
北美合衆國	15,578	71,826		600		
加奈陀				29		
土耳其						
東阿弗利加	3,430					
新西蘭	224,269					
暹羅	5,062					
計	4,688,451	2,569,179	1,833,294	2,305,118	2,438,379	

佛領印度		20				
米領比律賓	2,880	5,300				
其他亞細亞	3,050	3,898				
英吉	1,625,834	485,700	39,836	479,414	1,149,525	
佛蘭西	1,735,625	1,206,736	1,373,795	1,256,352	934,045	
獨逸			48,169	54,460	3,836	
伊太利	46,082	91,933		13,566		
和蘭	11,068	70,419	37,108	100,233	92,010	
白耳義	146,249	360,547	26,785	79,038	114,465	
瑞典			3,494	5,200	1,958	
丁抹典	1,300	3,219	7,687	1,100	34,899	
希臘	990		6,625	15,310	1,859	
西班牙			1,100			
其ノ他歐洲	600	1,800	1,100	1,800		
埃及	3,500	1,100		1,451		
南亞聯邦國	2,750		59,557	73,988	31,076	

國名	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年
中華民國	三七五	四一八	二、三〇五	一、〇五四、九九九	九二〇、四三八
關東州	三三三、〇四三	四四九、〇一一	三四五、七七二	六八七、七二〇	一、〇五五、四二七
露領亞細亞	一、一三〇、五〇八	一、二六〇、六五七	八六五、四三三	一、一一一、八七九	一、八〇一、九九一
英領ホルネオ	一、七六五、九六七	一、三八八、四四一	一、四〇〇、七四五	一、九八〇、五九五	一、八八九、四八三
英領海峽殖民地	三三三、二七九	二二〇、六九五	一一〇、一六六	三五、三三〇	
英領印度		七八、二六八		六九、一一〇	
佛領印度					
英吉利		一五		一一〇、三九〇	一八九
佛蘭西				一三三	
獨逸				三三五、二八七	
北美合衆國	五八、四〇八	二七、八二四	二六五、六〇二	六七、四〇八	二五七、九九三
加奈陀				二一、五三四	
埃及					一、五三二
西班牙					一四四

滿洲	蘭領印度	計
八二四、九三九	四七、四三五	四、二六一、九五三
三二一、八一九		四、三三〇、一九〇
五八五、〇一七		三、七四一、六五三
		五、八〇八、八二八
		六、六四三、六三三

罐詰 主要貿易品統計

年次	數量	價格
昭和八年	二二六、八六四	三、六一五、九九三
昭和七年	二二〇、四七七	二、二七九、三〇三
昭和六年	一七六、〇六八	一、五〇八、二七〇
昭和五年	一九一、五六一	一、九七四、五九〇
昭和四年	二一五、四三五	二、四一二、六一九

原油、重油、石油

昭和八年	一九二、五〇二	二、〇三六、六八一
------	---------	-----------

昭 和 七 年	昭 和 六 年	昭 和 五 年	昭 和 四 年
二〇、四九七、四〇〇	一六、五四五、一〇〇	二三、〇〇六、三〇〇	一七、四六四、五四九
二、〇〇二、七一三	一、八五一、五〇七	二、二九五、〇七九	二、四六三、九二〇

九四

豆
糟

昭 和 八 年	昭 和 七 年	昭 和 六 年	昭 和 五 年	昭 和 四 年
一六八、九六四担	一〇、六八二	一八、七五六	一八、八八三	一六、一四六
六九八、八三一	五七一、〇四一	七七八、七九九	一、三五二、三三二	一、二八〇、五八一

生鹽魚介類

昭 和 八 年	昭 和 七 年
八九、八七〇担	五、四一二
九三七、四一八	九五七、二六四

昭 和 六 年	昭 和 五 年	昭 和 四 年
六、二三五	六、七三九	八、四一一
八六五、四三二	九七一、八七九	一、六八五、二六二

原油及重油輸入國別

(以下八年中ノモノ)

國 名	品 名	數	量	價	格
英領ホルネオ	原油	一一六、四〇四	百ガロン	一一、一五五、一三二	円
同	同	六三、二四八		六一〇、八三五	
英領海峽殖民地	揮發油	六、一四〇		一二二、七九一	
同	燈火用石油	三、二〇二		八三、二九三	
同	發動機用石油	一、〇一一		一七、一九五	
蘭領印度	燈火用石油	二、四九七		四七、四三五	

豆糟輸入國別

滿洲國	豆	精
一三一、六五三担		
九五		五一、五七一

九五

鮮魚類輸入國別

露領オコック	生	鮭	一二、六八六	担	八九、四一二
同	鹽	鮭	一七、一一三		二七三、八一〇
露領ニコライスク	生	鮭	一六、七五三		一九一、九七〇
露領カムサツカ	捕	鮭	二、一〇四		二一、四一七
同	捕	鮭	四、五七四		七一、二二二
露領沿海洲	生	鯧	一、二八六		六、六八五
同	生	鯧	三五、三五四		二八二、九〇二

第五、内國貿易

○貨物移動の概況 近時我が國の財界は世界的不況に見舞はれ大激退を以てする情勢にある、此の非常時局に當面せる本港の對内取引が如何なる徑路を辿れるかを概説せんに、深刻化する不況は極度に購買力を減退せしめ、諸物價の下落に貨物集散價額は著しく低下を來したのである、即ち左表に

合 海産 坂上五郎兵衛
問屋

青森市安方町魚市場

(商號沖五) 電略(ヲキ五)又ハ(五)
(電話局長) 百 五 十 五 番

青森市安方町魚市場

傳

問海產物屋

千葉傳藏商店

電話 一七〇番
一七一番

青森市相馬町

◎

製罐詰竹輪造

千葉罐詰工場

電話 九三五番

日本水産株式会社
函館水産販賣株式会社

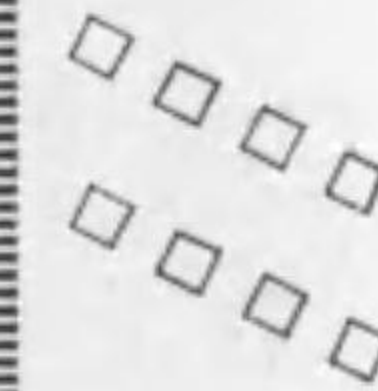
特約店

冷凍魚
鹽干魚
委託賣買

サ

佐伯商店

青森市新安方町
電話 一九一番・一六七八番
發信零號 (サエキ) 又ハ(サ)
振替貯金口座仙台三二八一番



海產物
委託問屋

青森市舘貝町魚市場

金柴甚商店

電話 四五一四番
電 零 (ヤマ五) 又ハ (シ)

出張所 青森市安方町魚市場

電話 九八一番

海產物
肥料問屋

青森市安方町縣廳通角

安阿保民之助

電話 特一〇七八番
三五番

振替貯金口座仙三六三四番

目品

乾鮑、海參、貝柱、干鰯、
鱈、鮫、燒干鰯、煮干鰯、
小女子、帆立黒干、海草類其他

日支貿易品

海産物製造販賣商

青森市堤町八番地

命近藤善吉

電話二一九番
電署(コント)又ハ(コ)

各國博覽會金銀賞牌受領ス

掲ぐるが如く昭和三年までは年に依り消長あれば大勢は漸増の趨勢を持續し二億二千百餘萬圓の巨額に達するの盛況を示せる本港も同年を最高とし遂に不況の大勢に衰運を辿るに至つたのである、然し之は物價の昂騰、低落等變態的事情の介在により止むを得ぬ現象で、之を以て直ちに港勢の振否を論ずるは當らなく。

對外貿易は別とし對内取引に於ける港勢の推移を観察するには利用の状況を數量に重點を置くを妥當とする。

此の意味に於て本港累年の貨物移動の趨勢を概観するに歐洲戰亂終局後に襲ひし反動的不況の餘波を受けて一時頹勢に傾いた時代もあつたが瞬間に平調に復して逐年増加の傾向を來し昭和に入りて金融界未曾有の恐慌時代にも依然として斯の趨勢を持續し更に深刻化せる昭和四、五年に入りても地利的に優越せる本港の對内貿易は駿々乎として長足の進歩を示し遂に昨八年八百六十數萬屯の巨量に達す全く驚異的記録を作るに至つたのは要するに絶へざる市勢の發展と鋭意港灣の改良、船車連絡設備の充實に努力せる結果に外ならずして青森港の面目は實に躍如たるを覺えるのである。

○出貨、入貨量の比較 移出、移入貨物の屯量を比較觀察するに移入は各年共移出を超過し其の進展率も略同一状態に置かれてあり常時移入港たるの觀を呈してゐる、之は世界三大漁場の一つたる北海道、樺太を對岸に持ち且つ材木石炭等無盡藏な寶庫が間近にあり是等貨物が一大消費地たる内地

に向つて輸送せらるゝに當つて其の門戸を扼せる本港を利用せざるべからざる地理的關係があるからである。

之に要するに青森港が前にも述べた通り對外的に近來異常の發展を遂げつゝ、あると共に内地取引にありても海港都市として常に覇權を掌握し我が國の經濟的北方發展に裨益する所甚大なるは今更言ふまでもなし。

入貨、出貨量の比較

年次	噸			價		
	出	入	差引入超	出	入	差引入超
昭和八年	六二四、〇八六	一、〇四七、四〇四	四二三、三二八	八八、〇三七、七一〇	八六、六七三、〇一五	一、三六四、六九五
昭和七年	五七四、二二六	一、〇五五、七三九	三八一、五三三	七五、九九八、八九八	七五、九二七、九五二	七〇、九四七
昭和六年	五〇三、四八二	九〇三、〇二八	三九九、五四六	六八、九二七、〇八三	六七、六五四、〇二七	一、二七三、〇五六
昭和五年	五八六、三四五	一、〇一六、四三四	四三〇、〇八九	一三三、一四〇、三四四	五九、二二一、九二五	七四、九二八、四一九
昭和四年	五五七、五七六	一、〇一五、〇四七	四五七、四七一	一四八、八九八、一九三	六九、四八九、六五〇	七九、四〇八、五四二
昭和三年	五二二、三三六	八三二、五四五	三一〇、二〇九	一五八、三三五、四一九	七三、三三九、七七九	八五、〇〇五、六四〇
昭和二年	四四八、七五〇	七六六、一九四	三三七、四四六	一三六、〇六六、八四四	八三、八七六、九六九	五二、一九八、八七五
昭和元年	六五〇、五六九	七三二、二九五	八〇、七二六	一五一、六九〇、三三九	八三、〇八六、三三〇	六八、六〇四、〇〇九

第六、陸上交通

○鐵道 本市の後方地域に於ける鐵道には東北本線、奥羽本線の二大幹線を首めとし更に東北本線の培養線には大湊線、十和田鐵道、五戸鐵道、八戸線、花輪線、橋場線、山田線の七線あり、奥羽本線の培養線には五所川原線を筆頭に黒石線、弘南鐵道、小坂鐵道、和田鐵道の五線ありその上裏日本を縦斷する羽越線も青森驛を起點とするので本市に於ける鐵道網は文字通り四通八達の状態である、而して青森市は前記鐵道中の東北、奥羽、羽越至大幹線の終發點に位し我邦本州北端の連絡地點たる唯一の地利を有するので遠近各地より旅客及物資を集中し北海道、樺太方面に輸送せられ更に前記各地よりの物資を内地各所へ移出する等優秀なる地利的關係が逐年益々其の數を加ふるの狀態にあり且つ目下敷設工事中の所謂五能線全通の曉には自然秋田縣方面に更に地域が擴大するに至るべく旅客及物資輸送上にも相當大なる變化を來しであらう。

最近に於ける市内三驛の乗降客並に出入貨物の成績左の如くである。

年次	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客
大正十四年	五五九、三六六	六九五、七五八	一三六、三九二	一五〇、四五五、七四〇	八六、六七一、五四三
大正十三年	五〇六、五五四	六四三、〇九二	一三六、五三八	九七、六五三、九九三	八〇、〇四〇、七三三

市内三驛乗降客

市内二驛發着貨物數量 (噸)

年次	發			送			到			計		
	青森驛	浦町驛	浪打驛	青森驛	浦町驛	浪打驛	青森驛	浦町驛	浪打驛			
昭和八年	二六六、三六二	三八、三〇四	三〇四、六六五	一三三、三五七	三三、一一三	一五四、四六九	二六六、三六二	三八、三〇四	三〇四、六六五	一三三、三五七	三三、一一三	一五四、四六九
昭和七年	六六三、一三四	二二五、四七四	一一五、九三七	一、〇〇三、五五五	六四四、〇四九	二二六、四二八	二二四、四七一	九八四、九四八	一、九八八、四九三	六六三、一三四	二二五、四七四	一一五、九三七
昭和六年	六二四、四七四	二二、一五四	一九九、六四三	九四五、二七一	六〇五、二八七	二〇三、六四四	二二〇、二六四	九三九、一九五	一、八七四、四六六	六二四、四七四	二二、一五四	一九九、六四三
昭和五年	六二五、三〇六	二三四、九二六	一〇五、九八一	九四六、二二三	五九三、八八七	二二八、八五三	一〇三、九五八	九二六、六九七	一、八六二、九一〇	六二五、三〇六	二三四、九二六	一〇五、九八一
昭和四年	六七六、二五五	二四七、八一九	二四、一六六	一、〇三八、一一〇	六五六、五二一	二四〇、五二九	二二〇、四二九	一、〇七七、四九九	二、〇五五、五六九	六七六、二五五	二四七、八一九	二四、一六六
昭和三年	七〇八、二三四	二五五、九九九	一一四、四八九	一、〇七八、七三三	六九七、五六九	二五二、八七六	二一九、九三三	一、〇七〇、三七八	二、一四九、一〇〇	七〇八、二三四	二五五、九九九	一一四、四八九
昭和二年	七〇五、七〇七	二三八、八八二	一〇八、四三五	一、〇五三、〇一四	六八〇、八五三	二二九、一五七	一一、二三四	一、〇三一、二四四	二、〇八四、二五八	七〇五、七〇七	二三八、八八二	一〇八、四三五
昭和元年	六二四、六六〇	二四四、五〇五	八九、九〇二	九五九、一五七	六〇九、五四六	二四八、七五九	九三、七六二	九五二、〇六七	一、九二一、二三四	六二四、六六〇	二四四、五〇五	八九、九〇二
大正十四年	六四三、六〇六	二七八、〇三八	—	九二〇、六四四	六二七、七八八	二七〇、三七八	—	八八八、一六六	一、八〇八、八二〇	六四三、六〇六	二七八、〇三八	—
大正十三年	五九八、四六六	二八二、〇六三	—	八八〇、五二九	五八五、五六八	二八二、六〇一	—	八六八、一六九	一、七四八、六九八	五九八、四六六	二八二、〇六三	—

年次	發			送			到			計		
	青森驛	浦町驛	浪打驛	青森驛	浦町驛	浪打驛	青森驛	浦町驛	浪打驛			
昭和七年	二五三、三二一	—	—	二八九、八七九	一〇四、九七九	—	二四、二一九	—	—	二五三、三二一	—	—
昭和六年	二二二、三三五	—	—	二七一、〇一四	八八、六五六	—	二二、〇九四	—	—	二二二、三三五	—	—
昭和五年	二二四、八六六	—	—	二六三、八四四	九八、八六一	—	二七、〇二六	—	—	二二四、八六六	—	—
昭和四年	二五九、二五五	—	—	二九六、五〇一	一四〇、一九四	—	一九、八二九	—	—	二五九、二五五	—	—
昭和三年	二八五、一一三	—	—	三三三、三三八	一三六、三七六	—	二〇、九八九	—	—	二八五、一一三	—	—
昭和二年	二九一、七四〇	—	—	三三三、八一〇	一五三、一六一	—	一四、一九一	—	—	二九一、七四〇	—	—
昭和元年	二八四、二四四	—	—	三二一、一五九	二二、九四一	—	一三、八三三	—	—	二八四、二四四	—	—
大正十四年	二七〇、七一九	—	—	二八七、四三三	一八二、〇〇五	—	一〇、一〇三	—	—	二七〇、七一九	—	—
大正十三年	三四九、六四三	—	—	三六九、三二〇	一五六、四一四	—	八、九二四	—	—	三四九、六四三	—	—

○軌道 本市を起點とし西方津輕半島に敷設せる軌道は本縣の特産として有名な「ヒバ材」の原産地を通過し、青森營林局専用として産額多大なる林産物の搬出に供せられてゐる。

更に本邦に於ける三大美林の隨一たる東郡奥内村地内眞部眺望山の男性的な林相美の觀光客の便をも圖つてゐるので春より秋に亘つて利用するもの相當大い。

○道路 國道は二路線で東京街道は岩手縣より、陸羽街道は秋田縣の兩方面より本縣を縦貫して前者は東方より後者は西より本市に於て相連絡し、市街は之を中心に形成せられて人車の往來股盛を極

め本市に於ける中心道路となつてゐる。

この二大幹線に本市に於て連絡する縣道亦四線ありて何れも貨物輸送の定期自動車往復し、物資集散上直接間接に利用に供せられて居るもの亦多大である。

就中市の東部を貫通する清流堤川に沿ふて南方に走る一條は歩兵第五聯隊所在の筒井村を経て東北の鹽泉酸湯及東北帝國大學附屬高山植物研究所に通じ、更に鬱蒼たる原始的な林相美を眺めつ、峻嶺八甲田を縦斷して天下の奇勝絶景として國際的に有名な十和田湖に至る所謂觀光道路は本年より鐵道省營の觀光バスが青森驛を起點として運轉せられて居るので團體觀光客の往來日を追て甚しく將に本市に於ける諸道路中の白眉である。

○鐵道貨物集散の概要

青森港に於ける海運貨物の集散量は海運界稀有の不況時代にも漫々乎として漸増の大勢を維持し昭和八年の如きは實に百七十數萬屯の巨量に達し、本港貿易史上空前の記録を示して良く重要港灣たるの使命を果すと共に鐵道貨物に在りても常に重要地位にある。

今既往十ヶ年間の鐵道貨物の實績を検討するに海運貨物の反映で其の消長は略軌を一にしてゐる、茲に市内三驛中貨物取扱驛たる青森、浦町兩驛に於ける移動の趨勢を見るに財界に捲き起つた幾多の波瀾をも無關心に年と共に堅實な發展を遂げ昭和三年の如きは實に百三十三萬五千餘屯の巨量に達したのである。

然るに其の後に於て益々深刻化する不況に産業界の衰微甚しく各種事業界は日を経るに従ひ不振を來し、都鄙至る所不景氣の聲に満たさるゝの悲境に陥つた、従つて物資の移動は勢ひ緩漫となり逐次減少するもの亦止むを得ない現象で、本市に於ける各驛も昭和三年を最高とし漸次衰運を辿る様になつたのである。

而し之は一般經濟界大勢の然らしむる所で本市に於ける鐵道物資の集散減退率の過少なるは其の背面に青森港の偉大なる存在を無視する譯に行かない。

鐵道移動物資の中繼貨物を除いて兩驛直扱の移動の趨勢を窺ふに中繼貨物の益々増加する反對に直扱貨物は年と共に不振を示し最近に於て驚くべき激減を示した。

之は一般不況の反映にも依るのは勿論なるも最も大きな打撃は大正十三年より同十四年に亘つて完成せる青函間鐵道連絡航路に貨車航送船が出現せる影響を見るのは妥當である、更に出貨、入貨量を比較觀察するに港灣貨物屯量入超が反映して出貨は入貨より多く、近年に至つて殊に甚だしきものがある

鐵道發着貨物屯數調

種目	年次	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年	大正十三年
兩驛發	送	二六八、二四五	二五五、五六六	二七一、〇〇四	二五六、一八九	二六九、九六八	三三五、三三八	三三三、八〇〇	三三二、一五九	二六七、一四三	三六九、三〇〇

鐵道省 指定
海陸運送貨物取扱



青森市浦町驛前

國際通運株式會社代理店

青森運送合同
株式會社

浦町支店

電話 二〇五・一四六番



青森驛前

國際通運株式會社代理店
大北火災海上運送保險株式會社代理店

青森運送合同
株式會社

電話 二・四六七・三八番
六〇三・一〇五〇番

計	合		物貨繼中道鐵			物貨着發	
	到	發	到	發	到	發	計
計	着	送	計	送	計	着	着
一三三、〇六四	六七八、九三三	六五八、九三三	九三五、八三七	三九〇、六八七	三九四、七九七	一三六、五三三	一三六、五三三
一一二、七九四	六八八、七三三	六八八、七三三	八四六、五〇七	三七三、二〇七	三六六、二八七	一一〇、七三三	一一〇、七三三
一〇八、六八七	六〇九、二四一	六〇九、二四一	八二五、九二二	三三八、二二七	三八二、七六六	一一一、七五三	一一一、七五三
一三三、九三三	七二二、三四四	七二二、三四四	九四三、一七七	四五六、一三五	三七〇、七五五	一一四、五六八	一一四、五六八
一三九、九〇〇	七七八、七三三	七七八、七三三	九〇八、六五二	四二八、七五四	四二一、二八八	一三一、三〇〇	一三一、三〇〇
一三五、四三三	七二二、九八八	七二二、九八八	八五二、八二九	三八七、七六〇	四八二、五九三	一五七、三六五	一五七、三六五
一三九、二七二	七〇一、四二六	七〇一、四二六	八三九、九六四	三七八、六一六	四八九、一六三	一六六、三五三	一六六、三五三
一一〇、〇〇〇	六〇五、八二五	六〇五、八二五	六六八、〇九八	二八四、六六六	五四六、九三三	三五、七六四	三五、七六四
一〇〇、九三三	四八五、七四一	四八五、七四一	五二一、五六二	一九八、五九九	四七九、三五〇	一九二、二〇八	一九二、二〇八
五〇、五〇九	五四八、七三九	五四八、七三九	五〇〇、四一一	一七九、四二九	五三九、六三八	一六五、三三八	一六五、三三八